

創刊大正十三年 通卷八一六号

川柳塔



日川協加盟

No. 816

同人特集・戦後50年と私

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会(句会)の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申し込みのほどよろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

★団体 (氏名・住所・電話番号など掲載) 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円 ③ 3/4頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月25日

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

書庫図布 頒価特 在特

『川柳塔』八〇〇号・誌寿古希を記念して昨年発行した左記の在庫図書の特価で頒布いたします。お申込みは川柳塔社事務所へ。

夫婦句集『旅人・福寿草』 特価一〇〇〇円
(定価一五〇〇円)

合同句集『川柳塔』 特価三〇〇〇円

第10回国民文化祭・とちぎ95(文芸)

川柳作品募集要項

― 詩歌の香りを 栃木から ―

応募受付 平成七年四月一日(土)～六月三十日(金)(当日消印有効)
期 間 但し海外からの投稿作品は、必ず応募期間内に着くようにしてください。

応募作品 一人各題二句詠 (未発表作品に限る)

宿題(事前投句)

やさしい 森 学校 女流

応募料

宿題(当日句)

一人につき一、〇〇〇円(ただし海外投稿者は無料)

応募方法

栃木県実行委員会作成の募集要項を御覧のうえ、所定の応募用紙を使用し、て御応募ください。

応募先

③三二〇 栃木県宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内
第10回国民文化祭栃木県実行委員会事務局

選者

(1)第一次選者 (五〇音順)
(事前投句) 去来川巨城・橋高 薫風・鈴木柳太郎
田頭 良子・錦 俊坊・西村 在 我

(当日句) 横地 霧静 秋山 静舟・植木 利衛・山崎 涼史

賞

(2)第二次選者 磯野いさむ・川俣喜康・仲川たけし・尾藤三柳・八木千代
文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・栃木県知事賞

発表

第10回国民文化祭栃木県実行委員会会長賞・栃木県教育委員会教育長賞・宇都宮市長賞
宇都宮市教育委員会教育長賞 他

表

川柳大会(入選発表・講演会・選評)
平成七年十月二十九日(日) 十時～十六時

問い合わせ

入選作品は作品集として刊行し、応募者全員に無料配付します。
及び募集要項請求先

主催

宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内
宇都宮市本町二二一

主

宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内
宇都宮市本町二二一

催

宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内
宇都宮市本町二二一

宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内
宇都宮市本町二二一

幸せな丸虫

西尾 栗

塔社の同人でTという男がいる。彼は
大変、誕生日が好きで、自分のことは勿
論、他人のバースデーもよく憶えてい
て、何かと世話をやく。彼の誕生日は十
二月十二日である。かの有名な石川五右
衛門の釜茹での日である。この十二月十
二日を短冊型に切った半紙を逆さまに貼
る呪いの咄を彼にきくと数時間に及ぶ。
私のことで恐縮だが私の誕生日は、啓
蟄である。即ち三月六日で昔、地久節と
言つて、現皇太后良子女王の誕生日で、
女学校は休みで戸毎に旗をたてたもので
ある。私の古い句に、

啓蟄は我れ誕生日虫に似る

という自嘲の句を作ったことがある。陽
気につれて地虫がそろそろ穴から出る。
二十四節氣の一つで、案外、この日の誕
生日の人が多い。私の入会しているライ
オンズクラブの百二十一人の中で五人も
いる。珍しいので、啓蟄会という会を作
つて、幸せな丸虫やというてグラスをあ
げてこの日を欣んでいる。啓蟄の蟄とい
う字がやさしいようで、さてどうだつた
かなアと考える時がある。その時、幸せ
な丸虫というて書くと、すぐ出来る。
親も子も誕生日を忘れている時、他人
さんから祝われると、ほのぼのと心が温
まる。私は古希をすぎた頃から、夫婦で
誕生日ごっこをしている。十年も続くと
プレゼントするものがなくなる。「おま
えのセンスのないネクタイはだめだ」

「あなたの派手なばかりのネッカチーフ
なんて何処へもして行けないわ」と言い
合つて、マフラーにしようか、帽子にし
ましようか、靴にしましようかというた
が、何時かの靴のプレゼントのヘチマの
敷皮に、マジックで「我が家へ直行。寄
り道するな」と書いてあつて、他所さん
の家で脱げない靴であつた。

さて今年は何か欲しいもの言つて下
さい。お金では曲がないし、欲しいもの
何でもと強要されて、阿呆のサイクに、
「お前のカラダが欲しい」。すると俺の
番だが「お前は何か欲しい。何が欲しい」
と言つと、「六十年前にアナタに処女を
捧げたが、まだその感謝状をもらつてな
いので、感謝状が欲しい」。へエ、お屈
さま。

春の日は暮れそうでくれぬ。



座右の句

人恋し人わずらわし波の音

私の句

手のひらを見せて失うものばかり

(葉)

大橋 政良

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 幸せな丸虫

おしやべり庵

川柳塔(同人吟)

自選集

川柳の群像 神山虚六

■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十五〜二十六丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

大空のころ(53)

西尾 葉 (1)

高杉 鬼遊 (2)

橘高 薫風選 (4)

東野 大八 (46)

高杉 鬼遊選 (52)

林 荒介 (50)

蘭田 猊沓 (75)

橘高 薫風 (79)

おしやべり庵

高杉 鬼遊



「歪んだ世相のひとつとき、小さな屋根の下で、お互い本音で語り合える、町のサロンを開きます。酒の欲しい人は酒を提げ、食べたい人は食べ物を、それぞれ自分勝手にぶら下げて、気兼ねなくぶらりとやって来ませんか。別にテーマはありません。話が話呼び、笑うもよし、泣くもよし、一枚の舌と二つの耳で愉しいひろがりを目指いたします。」

庵主敬白

これは昭和五十四年、第一回「おしやべり庵」の案内状である。案内先は当方の一存で川柳仲間、絵の友だち、親戚、近所の人、いろいろである。一月十三日の参加者は十一名、六畳の部屋は満員で、知らない者とも膝を接しないわけにいかない。

当日のメニューは、高安山から採って来た山菜のあえもの程度で、あとは各自持参の酒肴で酒盛りが始まる。わいわい、がやがや、ただしやべる。例えは悪いが、水を得た魚のように生き生きとして明るい。時と場所と雰囲気、こんなに人をおしやべりにするとは

渺湖抄

小出智子選

(76)

茴香の花

西出楓楽選

(80)

《同人特集》 戦後五十年と私

田村新造・桜井千秀・小玉満江・藤井一二三

(82)

「馬」

美田旋風選

(86)

一路集「とどろく」

中島志洋選

(86)

「女々しい」

都倉求芽選

(87)

初歩教室「花」

吉岡美房

(88)

柳界展望

吉岡美房

(88)

各地柳壇（佳句地十選／河内月子）

各地柳壇

(92)

五月各地句会案内

五月各地句会案内

(103)

四月本社句会

四月本社句会

(104)

■編集後記

■編集後記

(108)

座右の句

一粒の種 太陽は見逃さず

(恵二期)

私の句

こだわらぬ心を空に教えられ

江口 有一朗

驚きである。目的はここにあったのだが、こんなに盛り上がるとは予想外である。

敗戦後まで人は寡黙であった。それを美徳の一つに教え込まれた時代だったとも言える。かつての学校、社会、軍隊でも、たてまえが先行して、ほんねはひそやかに個々の胸中にあった。「賢い人は、何かを言う前に二度考えて、そしてなんにも言わない人」と、ユーモアにあるように、賢い人はびっくりだった。わたしも「賢い人」ぶっていた。学校でも、近所でも、軍隊でも、実に「賢い人」の評価に耐えてきた。生き苦しい時代が後々、尾をひき、対人恐怖症にまでには至らなかったが、人と話をするのが最も苦手だった。

わたしは川柳を通じて多くの友だちができ、ほんねで話せる世界を知った。別に川柳にこだわりたくないが、うつけきされたほんねの虫が動きはじめたのは事実である。人との出会いにより多くのことを知るのには、ここを豊かにしてくれる。

十七世紀頃フランスにあったサロンとは、どんなものだったか知らないが、いろいろな人が利害を超えて話し合える、そんなわたしの夢のサロンが「おしゃべり庵」の誕生だった。第七回の会合を見ることもない「おしゃべり庵」の看板も今は寂しい。みんなが「賢い人」になったからだとは思いたくない。この世の忙しさから解放されたい。



橘 高 薫 風 選

広島県 田 村 新 造

病む戦友を置いて夕陽の丘を発つ（興安嶺逃亡記）

興安嶺の夕陽に祈る明日の無事

昼眠るカッコウの鳴く森の中

馬肉炊く煙気になる森の中

群狼の遠吠え怖し夜の静寂

山一つまた山一つ南下する

唐津市 田 口 虹 汀

泡沫の流れ今生一人旅

目を瞠る弥勒の膝の年輪に

皇后の針にかかった鮎を釣る

齢だナと思う歴史が恋しくて

五十年防空壕は花畑

孫が来る可愛い曾孫抱いて来る

尼崎市 田 中 薫

暁闇 ワガ視野ノ裡スベテ傾キ

土色ノ屋根 高速道路 コレハナンダ

壊レタ時計 死者タチノ行列

警報機ボカント 給水車ニ並ブ

ドコマデモ闇ノ マガマガト犇メク

冬空ノ底抜ケテ ビニールシート

吹田市 古 川 喜美子

パレットには美しい色溶いた筈

それだから言わぬことではない卵

枝ぶりの悪い玉串渡される

湾に沿い灯るは春のネックレス

助かるとわかり病人叱られる

二月十七日シート真っ白に干す

米子市

林 荒 介

おとこには男のいくさ種子を播く

石段の一段ごとにある夜景

切り取った壁をキャンバスに移す

光背と語る異次元のむかし

説明の出来ない音が追ってくる

お袋を今も握っているこぶし

弘前市

高 瀬 霜 石

罪憎みひとを憎まずとはゆかぬ

家計簿がでればわたしの負けである

父さんは明日も仕事だ酒二合

泥酔のあいつにどんな理由がある

禁煙の次は豆腐に凝っている

あの頃がいちばんだったランドセル

鳥取県

林 露 杖

ふる里を囲む山々 山笑う

焦心は未だ若さのある証

それなりに悩みもあるが飯は喰う

盗み酒心の憂さは拭えない

震災の孫が手製の雛飾る

模擬火災サイレン同じ音で鳴る

和歌山市

木 本 朱 夏

きさらぎの水の匂に忌が巡る

不本意な母の死なれば拒む花

母の死を見届けていた寒桜

暁のしらしら闇にははの気配

事故現場踏んでゆくのはみな他人

母は在すみやこわすれのむらさきに

鳥取県

新 家 完 司

雪だるまになって郵便配達夫

春蒔きの種が吹雪と共に着く

うぐいすが鳴けば牛蒡の種を蒔く

神さまからいちばん遠い僕の家

死ぬまでにどれほど水を汚すのか

ぼっくりと逝けたら拍手してほしい

尼崎市

春 城 年 代

五色豆の彩は老母の数え唄

春の小川の流れを消した大震災

身にしかと刻まれている震度七

午後の天気は朝の晴れ間に騙される

忘却の日々よ わたしの寒椿

ポケットに燐る遠い日の匂

砂川市

大 橋 政 良

どの指も一つのビジョン持っている

ポケットの石好き嫌いして困る

今日という絵が出来あがり今日終る

春の窓ピアノやさしい音になる

逆らって逆らって川丸くなる

どの人も倅せに見えすれ違ふ

唐津市 仁部 四郎

いろいろな博士と並ぶバスツアー

年金が来た日ステーキ半値なり

コマーシャル裸を見せて何を売る

酔顔を拭いたら涙の跡が見え

歴史的町並み恋も埋めてある

人生の顔が揃った辞任式

静岡県 蘭田 獏 杏

人を待つ船影のろろじれつたい

やけ酒を呑めない下手は笑うのみ

梅が咲く活断層を抱いたまま

春風に蚎の羽音を一つ聞く

SLの煙を混せて杉花粉

風害の浜に風力発電機

大阪市 上田 柳 影

句読点わが来し方に悔いはない

生き死にはどうあろうとも夫婦なり

黄昏てやつと寄りそう比翼塚

ご機嫌はいつでもとれるグーチョキパー

ほんまですほんまにいのち考える

老いたなとしみじみ思う昼の風呂

出雲市 伊藤 寿美
犠牲者の幼児「大志」の名を覚え（阪神大震災）
根雪掘り掘って大根の甘さかな

愕然として両の手の石捨てる

ひたすらに生き傷つけて傷ついて

蜘蛛の巣のところでどこに置く言葉

堺市 桑原 道夫

蛍光灯ほどに明るし平成は

蝶が居て蝶と溶けゆく時間あり

降り出した雪に指あり爪があり

耳と耳との距離が彼奴との仲か

旅の半ばの池でタオルを絞りけり

和歌山市 西山 幸

下手だったなと亡父母の声がする

還らない日のあざやかな紅絹裏よ

訣れてからの雨のいろ風のいろ

紙人形と身の行く末を嘲い合う

浅春のきまぐれに読む聖書なり

西宮市 奥田 みつ子

へりの音絶えず被災地土けむり

倒壊の屋根くろぐろと寒の月

美術全集 瓦礫に埋もれ雨に濡れ

粉々に愛が碎ける梅が散る

金色に光って見える奴隷船

伊丹市 山崎君子

茨木市 堀良江

うたた寝に花咲いて散る長い夢
義理チョコに温み少うし花カード
ミニ流行り無愛想なる小さいバラ
その艶は酒で磨いた夜の桜
子育てをふと懐かしむ花の守り

富山市 酒井輝

白い杖くずれぬ街がまだ見える
朝鮮が映る古墳を出た鏡
泪涸れたひとのかわりになみだする
鬱の日は自分で打って蕎麦にする
総入れ歯まだ人生の味を噛む

鳥取県 乾喜与志

サイレンが鳴るよお腹が空いてるよ
腹八分に間に合うだけの食前酒
満腹が判るまだまだ呆けてない
にぎやかい米寿卒寿の御同行
魂魄のふるさとがあり慌てまい

鳥取県 江原とみお

啓蟄や四股でも踏んでみようかな
音無しの構えでお酒のんでいる
友達だ馬鹿の加減もみせておく
春や春騙されやすくなりました
春がきた森の改札口ひらく

一本にまとまることも楽じゃない
壇に立ち影一つなしえん尾服
肩車大好きだった子が嫁ぐ
大声で笑ってるまた照れかくし
地震から柱時計がよくとまる

豊中市 吉田あずき

少年のからだに春の水走る
我なりのルールが増える老いの坂
流されぬための机を垂直に
ボランテイヤ賢治が西へオロオロと
落日よ神戸を写しつつ沈む

西宮市 亀岡哲子

子の巣立ち四月一日嘘もなし
まばたいて何ごともなし四月馬鹿
塔落ちて光を仰ぐ天使の絵
再会のそして別れのミモザ散る
さらさらと薄手茶碗に花菜漬

藤井寺市 吉岡美房

決断へ男の海が満ちて来る
ほろほろと飲めばほろほろ梅が咲く
土筆摘むいつしか子等と競い合う
その先は聞かずにおこう鯨そば
竹割ったような夫で苦勞する

高槻市 川 島 颯云児

門限を無視する進まない時計
世の中がどう変わろうとマイペース
仮面など被らなくても無位無冠
父さんの酒は明日への潤滑油
晩成を信じ歩幅を整える

松原市 小 池 しげお

それまでに大きな卵生んでおく
大声で怒鳴れば大声での返事
幸せは金ではないが金が必要
アベノ橋 河内弁しか通じない
立春や金魚の餌を買い溜める

唐津市 浜 本 ち よ

夢に見た独り生活の頼り無さ
計略もへそくりも無い淋しさよ
演技する相手の居ない味気なさ
幾山河越えた余生の空しさよ
お手頃と高価な品を出してくる

島根県 小 砂 白 汀

どこからか口笛流るる五月かな
春雷一喝のりつけほうせが目をさまし
沈丁の香りに春も寝ておれず
ひよつとして卒寿のケルンに触れるかも
マイペース短針すこしも悪びれず

倉敷市 田 辺 灸 六

雪崩から笈は返事してくれぬ
春寒料峭山有難く過疎を抱き
谿の水流れて楽も苦も忘れ
継ぎ足してひとり芝居をまだ続け
知恵の差を足して二で割る夫婦仲

倉敷市 小 野 克 枝

三叉路で地蔵は右手あげている
夢だけを残し女の焼く手紙
草屋根に老いたる母の子守唄
さいはての線路に憩う名無し草
無い乳房押えて友は生きたしと

富田林市 池 森 子

流れるのが嫌いで旗を振っている
春風の方へポストは向きたがる
わたくしを耕す鬼がいてくれる
余震一生つづくだろうか母ひとり
風向きを読んでるてっぺんのガラス

和歌山市 牛 尾 緑 良

戸籍には神戸生まれと書いてある
素顔には朝日夕陽があたたかい
おかたの事を許して増える皺
子の為にすぐにこわれる父の城
椰子の実を待つ子と夢を語り合う

青森県

田中 叶

鳥取県

大角 幸代

日が永くなつてく風呂を洗う僕

バツイチの女が春だなと思ふ

よく笑う女が生んだタマゴだな

その病院のトイレにずっとある造花

松かさのかたちのまんま灰になる

京都市

山海 友熙

正義感 川の流れが淀んでる

ふりむけば靴音ばかり春の闇

石は永久 人を裏切ることとはなし

八方美人 上げ上げてひとりぼち

つくばいに一粒沈む鬼の豆

米子市

野坂 なみ

竹原市

小島 蘭幸

羽衣を借りて未来の駅へゆく

その日まで善女を演じ切れるかな

老蛙には池の広さがうとましい

薬草が彩を沈めて咲いている

殊勝にも世話引受けたばつかりに

鳥取県

土橋 螢

弘前市

肥後 和香子

笑つても声を出さないようにして

お静かにいま鶯が啼いている

黒紅の薔薇一輪の恋だった

負けて勝つために今でも生きている

約束を守ってくれてありがとう

やがて春 大地もぬくい風と逢う

まごころを知ってる豆のまるさかな

引き出しの恋がガタガタ音たてる

うしろから見ればガタガタいう生命

サヨナラを言うには惜しい風に逢う

鳥取県

大角 正道

親と子は笑顔ひとつで満たされる

五七五で今日も日記を締めくくる

触れたくなるような新しい芽を出した

つかれた心にとってもやさしい鈴の音だ

やさしさや強さで丸くなる礫

春霞とぼけることにして男

恋人の帽子を被らせて貰う

月の光と厳しさに耐えている

羽ばたいてゆくのも愛と思うなり

美しいうしろ姿をもっている

乳房までも考える手術後は

はらわたも見えた医師と眼が合いすぎる

病棟の深夜ドラマをぎゅっと詰め

黒真珠一粒沈め話す医師

三島由紀夫の無明を知って退院す

五所川原市 斉藤 嘉

何もしないでボランティアしています

チャンネルをシルクロードの旅にする

震災の遺影虚しや卒業歌

アメリカのりんご試食にいくところ

水も春 小便小僧ほとばしる

黒石市 千葉 風樹

父になる練習せずに父になる

人生はすぐにちびてく絵ロウソク

本音また言えず終った義歯洗う

酒に素顔映してるああ男達

檜山の小道で花の芽に出会う

弘前市 佐治 千加子

生死一如すっぱり生きることにする

またどうぞ帰りざわだけよい笑顔

あれはあれでよかったのだと茶を入れる

待つことが嫌いな男待っている

風花になぜか見返り阿弥陀かな

弘前市 一戸 ツネ

淋しさをそつと包んだ津軽弁

血の湖で邪念の衣洗います

振り向けば一炊の夢露の玉

竹トンボ津軽じょんがら追いかける

熱燗で今日を労う独り言

弘前市 岡本 花匠

啓蟄にこころの虫も動き出す

陽炎の向うに天女見え隠れ

風の子の天衣無縫に暮れ泥む

さくら闇 記憶たどれば愛と憎

この年齢に丁度良いですさくら餅

姫路市 大原 葉香

烏合の衆も清き一票もっている

鏡見る振りで後ろの敵を見る

心より顔がお先に齢をとり

お日さまは芸術家だよ入日の図

書院棚花一輪を替えた朝

熊本市 永田 俊子

どこか明るい百歳の人の通夜

明治の姿勢崩さず生きた白い菊

何かを奪い飛んでゆく赤い風船

今日も無事 両掌に春の日ざし受け

月おぼろ命もおぼろ今日を生き

海南省 三宅 保州

僕のことですか初老の紳士とは

一癖も二癖もある実力者

一回も戦友会へ行かぬ老父

勝敗はどうあれ蟹のVサイン

隠居した漁師毎朝空を見る

豊中市 安藤 寿美子

羽曳野市 榎本 吐来

春寒の部屋で残金をかぞえ

この家でよう働いた日もあった

死んだからええ人やったと言ったげる

春時雨知らない人に会釈する

食細くなった女が目刺焼く

守口市 森川 まさお

通行止の道が綺麗に掃いてある

なんとなく上流へ足が向く散歩

しぶちんが土産にくれた桜餅

チヨコレート貰って血圧高くなり

茶飲み友達なんて淋しいことを言う

鳥取市 美田 旋風

地震にはにらみが効かぬ鬼瓦

握手したあとのシナリオ考える

堅物にされて仮面がほくそ笑む

末席でだいぶ古参になって来た

目をかけた花へようやく蝶が来る

豊中市 井上 直次

震災後仏壇の灯も早く消す

頸動脈切られ日本の危機管理

仲直り老婆の茶を出すタイミン

グ近づけば隣のバラも同じ色

メンバーに博愛主義者いてもめる

幸せを知らぬ女の地獄耳

負けぬ気の意地片頬が笑うている

夫婦箸 胎児が容貌成してくる

正夢に念押すように梅の花

坊さんも神主もいるクラス会

松原市 玉置 重人

てごわそうな敵だ剃りあとか青い

職退いてときどき夢に出る会社

弁解はしない男の靴すべり

来客のおかげでうまい上にぎり

薬包紙妻の闘病まだ続く

米子市 澤田 千春

草原に影も私もごろ寝する

鍵かけた部屋から笑う声がする

雨だれにいつか話そう広い海

枯草も明日の性根をもっている

三寒四温やがて芝居の幕があく

米子市 田中 亜弥

未来を入れた箱がだんだん重くなる

せめてもの広さ大の字に寝るだけでよい

いつまでも隣の芝居まだ未熟

春を囲んで弁当買いに酒買いに

寝入りばな夢がドスンと落ちてくる

米子市 政岡 日枝子

瓦礫の上のコンペイトーがいたましい
活断層の上で未来を組みなおす

未来何色 柩は赤い炎の中に

過去未来 私に棒になったまま

嬉しいな ホラ たんぽぽが咲いてきた

尼崎市 春城 武庫坊

不通電話に余震の音に似た響き

無事のひとこと受話器に温い風たまる

瓦礫の街に春を探している鴉

地に還りまた芽吹く日をじつと待つ

春風にゆっくり揺れてみたくなる

富山市 舟渡 杏花

ノラにもなれず昨日とおなじ厨ごと

手拍子で生れ変ったわたしです

必ずよむ別れたひとの運勢欄

お水取り古都にこだまや漢の譜

心眼にほんのすこしの彩が欲し

西宮市 林 はつ 絵

月月金今復旧の歌声だ

半壊の呻きつづける床柱

人間の小さな腕でやり直す

無くなってさっぱりしたと言ってみる

補聴器へ復旧の音頼もしい

島根県 堀江 正朗

走馬灯さくら桜は胸の奥

盲人に流れの変る春の音

師の短冊かけた柱で打つ額

裏表学び人生膝栗毛

先走る僕の手先で割れた音

島根県 堀江 芳子

雛さまを飾る心の中に春

どっちかが先 真剣に墓のこと

相傘の高さは孫の背の高さ

お赤飯 遠く住む息子の誕生日

市場かご春陽に夫と手をつなぐ

広島県 藤解 静風

言わんでも男 言うてと女かな

差引零 私と妻の対照表

川柳の目では見るなと妻がいう

北側の窓も時には拭いてやる

風邪ひきの家族のトリをしめくくる

豊中市 田中正 坊

震災が生きる力を砕きしか(三月四日 姉死す)

姉ひとり弟ひとり姉の死よ

老醜はあとかたもなし花柩

通夜の席立ち新月を仰ぎけり

人は死ぬ皆死ぬのなり南無阿弥陀

吹田市 山本 希久子

私を洗う小さな川を探して

おばあちゃんなどと私を呼ばないで

こだわりは持たぬ支流のメダカ達

飛ばされる風船でさえ癖を持つ

からにしてから満たさねば知恵袋

大阪市 川端 一步

他人には模範夫婦にしています

美術館出るとひとみが美しい

目覚しをもぐら叩きで止めている

大阪城にらめっこすると恥ずかしい

弁当も持つハンカチも春の彩

奈良県 田中 紀美代

鏡から最後に離れるのは眼

お喋りな妻より喋る客が寄り

毒舌の妻 留守にして臍抜けなり

民衆がいつも犠牲になるニュース

戦争と汚職ニュースに付きまとう

岸和田市 岩佐 ダン吉

形勢はどうあろうとも僕の道

たかが笛 僕を踊らそうだなんて

異常なしそして風邪だけでもろてきた

裁判長まさか眠っているのでは

ドクターが僕も腰痛だと明かし

大阪市 西出 楓 楽

ワンテンボ遅れて笑う下心

がんばってねといともたやすく言う他人

褒めるのも褒められるのもくたびれる

風邪癒えぬわたしは何処へ行ったやら

近頃は褒めなくなった富士びたい

大阪市 稲本 凡子

幸せは昨日と同じこと出来る

結局は会うことにした長電話

盛りつけの豪華あげ底だったとは

目を入れてからのダルマはよく転ぶ

記念撮影とつときの顔しておこう

岡山県 小林 妻子

言い過ぎてつい冗談に切り換える

丸腰へ毎日老婆の言う通り

無理なんかするなと弁当箱重い

山脈のように脱ぎ釈迦のように寝る

逆縁の茶毘の煙はさまよえり

和歌山市 福本 英子

夫に子に貸した膝から瘦せ細る

本職の腕に納得させられる

石一つ生かす紫煙の輪を重ね

若者に負けずにひいた流行り風邪

両親の嫌なとこだけ似て育ち

雨の朝 今頃神戸どうしてる

呉市 横田英詩

茜雲 朱色なければ唯の雲

創造の神 川上におわします

折角の美味呑みこんで受話器とる

よく帰ったなと灯台が呟いた

大阪市 神夏磯典子

ひらめいた色で輝くチューリップ

もたもたしてたら風が变つてた

敬遠の球に慣れてる一本気

自覚せよ身体あちこちベルが鳴る

治ったら蟹を食べようきつい風邪

大阪市 大塚節子

瓢箪の実りを待たずガンに死す

酒の粕一枚食べて寝ています

主なき庭に柊香りたち

鼓草 綿毛となつて旅立ちぬ

植替えに土とみみずも宿がえし

大阪市 本間満津子

平穏な日々屋根の恩忘れ居り

非常袋の中身いつしか元の場所

七十年喧嘩友達勝負なし

角取れた人の忠告そらそうや

緑の雫 五月翡翠のペンダント

たこ焼が花のお江戸で人氣もの

久闊を叙する契機は大震災

鎮魂の挽歌聞こえる夜の廃墟

桃一枝 今年の雛はひかえめに

立て板に水の電話はマダムから

大阪市 町田達子

テレビ観て目頭拭っている私

彼岸寺 先祖に告げること多し

人麿の歌碑めぐりなど花の頃

今年の花は何かを主張するのでは

「愛とは」を読む寂聴の観音経

大阪市 榊本落児

古手袋に感情線がある怖さ

おじいちゃんちゃんばら好きで正義漢

容貌も知能も丁度よい女房

婚約指輪やがて手錠にかわらねば

テーブルクロス白いばかりが能でない

大阪市 松尾柳右子

盆栽の虫とり新芽までも取り

新緑にテニスルックの二人連れ

そば通るだけで電灯パツとつき

新緑に満喫 靴が痛み出し

あくびしてホームラン打つプロ選手

堺市 藤井 一二三

膝ついて見舞わる美智子妃の慈愛

冬耐えた養虫へ日の暖かし

父逝った春の彼岸の遠い風

合格の声が弾けて二月尽

天上の師を偲ばせて風花す

堺市 近藤 豊子

整然と植込みのこし家崩る

赤ちゃんを囲む顔あり仮設風呂

粉雪が舞いこんでくる仮設風呂

電気きて水きて今朝の洗濯機

被災地のテントを揺する春一番

豊中市 江口 明光

仕事より夜が達者な齢になる

地震から妻が意外な事を言う

列島の地理を知ってる渡り鳥

長男はポルシェに乗って寺を継ぐ

朝刊が一日遅れで来る故郷

池田市 金崎 峰子

年毎に明るい色が好きになり

さざんかが梅にバトンをわたす庭

花ことば知らぬともよしすきな花

同い年見舞って何となくさびし

おしまい祖母が味方ときめる孫

岡山県 山本 玉恵

末席でチャンスを狙うのがひとり

無罪放免 束ねて捨てる薬包紙

焦点をぼかし上手に逃げた人

胸張って十五の春を孫よ行け

二歩進み三歩さがった人生譜

広島市 森田 文

おかめにも人に言えない皺がふえ

失敗の度に遠くが見えてくる

太極拳のリズムで老母運動す

犬の背をなでて男の日が終る

バラバラの自我を集めて黄昏る

柳井市 弘津 柳慶

大正生れにダブルベッドは苦手です

西の旅なせ急いで一人行く(義弟死去)

風邪熱へ独り寂しい卵酒

恋敵もふられて心さばさばし

婚礼と葬儀ダブった通知受け

竹原市 古谷 節夫

逆風へ少年の目が光り出す

佐渡情話聞きたくなった亡母の節

妻だけが暗証番号知っている

雑草が教えてくれる四季の唄

人間の技とは見えぬとぼけよう

竹原市 森井菁居

残り火へ活性炭をくべておく

口惜しさを芝のみどりが聴いてくれ

第三の人生なんてあったかな

春は良し酢味噌に限るふきのとう

雲一つ二つは欲しい春の海

竹原市 岩本笑子

銀色のしずくはきつときつと涙(友の結婚)

おかえ地蔵に笑くぼはきつと二つある

白鳥のレールなど無い北帰行

列の最後でいつもいつもハングリー

ピンク着る幸福色と知ってます

竹原市 石原淑子

遅しく危なくも見ゆ子の船出

忘れえぬ桜の駅のある別れ

得意気な猫の落ちるの見てしまっ

せせらぎの小石の如く生きた父

麦踏みで麦です今をのりこえて

廿日市市 林野甦光

箸枕 水仙の客ひとりあり

知らぬ顔してゐるが昨日来た女

落ちてゐるライバルの絵馬掛けてやる

目配せをしてもすげない春の風

葉ざくらの下はいくさの日の名残り

宇部市 平田実男

楢山の駅降りる人だけで混み

練習の成果大きく見える的

他社の良さも言うセールスのほうを買う

臭い物にまた蓋をした自己嫌悪

嘘に嘘重ね仮面の顔になる

下関市 石川侃流洞

群雄割拠して私の一票攻めにくる

老夫婦の間に猫の指定席

素晴らしい絵を描いているホームレス

なるようにしか成らぬと弱気になった父

無職ではないぞ専業主夫である

鳥取市 西村黙光

満腹になると決まって忘れ物

ブライドはこんなものかよお茶と水

日本海の風はなんだか酒臭い

ペン先へ想い託した十五年(同人誌創刊以来十五年)

誤字脱字 地域文化の灯に晒す

倉吉市 米田幸子

沈黙の海で互いを悟り合う

痩せても枯れても他人の水はいただかぬ

大衆の前で笑顔を試される

定年の船で座礁をくり返す

黒幕の筋書き少し無理がある

倉吉市 野中御前
パーマ屋は噂の種を撒くところ

種芋が春だ春だと騒ぎだす

平凡な妻のおいしい五目ずし

涙に弱い男に涙用意する

意地捨てると意外と空気澄んでくる

倉吉市 淡路ゆり子

嫌われていいこともある花粉症

梅便り書き終えて見るおぼろ月

子の部屋が静かすぎても落着かぬ

若くはないが素足になってやり直す

啼き合うてつがいの鶴の北帰行

米子市 石垣花子

カラオケの軍歌を老父は唄い切る

毒草だって同じ大地の恵み吸う

野次とばす人のうしろで疑われ

男結びしっかり覚えた子の歩幅

吊橋で騒がしいのは男の子

米子市 林瑞枝

夕闇のクレール並木にある禱り

ご大家に住んで噂に遠い耳

一笑に付す今も解らぬのが自分

封印をされた文箱にある罅

間欠泉 地下のマグマは気紛れよ

産声が何年ぶりに灯をとます

笑い種ない日はくしゃみまで笑う

春の陽にもの言いたげな落ち椿

たつぷりと墨をふくませ幸と書く

松葉蟹もらったままで娘へ送る

米子市 金山夕子

墓参り一日他は考えぬ

神棚に水 仏壇に一番茶

一日がジョークで終わることもある

光らない活字を今日も並べてる

私のともだち貶す嫌な人

米子市 光井玲子

菜の花がはしゃぐと私まではしゃぐ

昨日までが夢まぼろしか花吹雪

菜味となつて古い女のまま生きる

この際だ静かに自分みつめよう

亡父のふところおとき話が詰まっていた

米子市 寺沢みど里

氾濫の疵をのこして河が澄む

根無し草にはならぬ鉛筆尖らせて

創世記ひらき未来を知ろうとする

雑草の背丈が越せぬ芝ざくら

額からときどき暗示かけられる

米子市 川 上 より子

靴も帽子も聞いたかよべの春一番
旧家族制度乱舞する白寿の宴
白寿祝いのあとの大波小波銀の波
三つの矢 二本とひとつに束ねらる
みぞおちの位置を忘れる花の下

米子市 菅 井 とも子

陽の当る部屋で時間を忘れている
病室で老父の思い出聞かされる
瘤取って貰い気儘なおじいさん
未来もう気にせず今を歩いている
温泉に浸り地下のマグマは気にしない

鳥取県 土 橋 はるお

今だ今だとパチンコの玉が出る
嫁さんも我が娘と同じように呼ぶ
坊さんに布施が少ないと言われ
床屋から眉毛の補償して貰う
待ち人にしびれ切らしている眉毛

鳥取県 羽津川 公 乃

新年の気負いも消えて花便り
義母実母カーネーションは赤い色
衰運の年 念入りに羽繕い
知らぬ間に癖の一つを孫に見る
喜怒哀楽静かに溜めた背が丸い

鳥取県 さえき や え

耕運機ごきげんさんで回ります
かしらから順に出ていきひとりです
山ぞくが出そうな家に住んでいる
使いすぎ背にすじかい入れておく
おかげさま元気で春の幕あける

鳥取県 鈴 木 公 弘

表から見ればなんでもない家並み
着ぶくれて身動きできぬ軽い役
叩いたら笑うにくにくい釘だ
ものの芽が萌えてくるから忙しい
予備校へ春を預ける娘がひとり

鳥取県 上 田 俊 路

今のろし上げねば流れ変わるまい
言い訳の出来ぬ小石が重くなる
番付は下でも人気では負けぬ
重い腰上げた男の不退転
予め根回しをした多数決

鳥取県 谷 口 次 男

説明は要らぬ給料上げてくれ
説明は一切不要ポルノ見る
二合ほど飲むと静かになる男
先にきてちようどの時間酔いつぶれ
せかせかと動く男で金もない

稲妻が走る日古い傷疼く

松江市 舟木 与根一

ワンカップ回し飲みする嫌な仲

カルテには仁術という痛み止め

焼香の順と遺産にある興味

野良猫との戦で終る小半日

出雲市 板垣 草丘

向きかえて電車 六道湖眺めさせ

箱型のポストで薄い唇よ

用件をついでのように言っておく

落ちそうな人形ケースの下で寝る

給振りは娘の銀行で娘に貰う

出雲市 尼 れいじ

うつらうつら昨日の酒がきいている

私が行く道だけに吹く風

顔二つ持って世間を平泳ぎ

葉桜に春の名残りがぶら下がる

故郷が消えた一本杉がない

出雲市 久谷 まこと

結論が出てから本音芽ぶくれる

生まじめが背負いこんでる苦情欄

振り返る時には消える影法師

明日生きる事を信じて画布かえる

不景気を凌ぐは妻の力こぶ

寒雀 日向で犬の餌盗む

出雲市 岸 桂子

深酒のわけは語らぬ夫の背

やぶ椿これから先は春の風

安物と嫁の心につれて着る

冬が逝く胸で育てた人つれて

出雲市 竹 治 ちかし

未練などないかのように子は巢立ち

馬鹿になる覚悟を決めてから強し

磨いても光らぬ石をまだ磨く

子には子の妻には妻の皿の彩

春に咲く花が知ってる春の風

島根県 佐々木 鳳 笙

この辺が効きまっしゃろという指圧

言い負けた夜の寝返りが二時を聞く

猪に娑婆は曲った道ばかり

騙された方も悪いと叱られる

投げ返す球を真つ赤に染めておく

香川県 成 重 放任

野暮なこと聞くだけ野暮と笑われる

七福の笑顔に勝る母の笑み

拾うより落したものの大きすぎ

あの遺品ほしいが口によい出さん

忍空からセーラームーンまでテレビ占め

香川県 川崎 ひかり

後攻めのゆとりで足を組みかえる
過去と言う水でいやした胸の傷
いつの日も帰る巣箱はあたたかい
出る釘はつまづく人の理由知らぬ
生きてればなんとかなるさ朝が来る

香川県 池内 かおり

投げ出してならぬ明日から攻めに出る
メモを取る妻に油断のならぬ日々
誕生日息子と娘から電話
ヘソクリも快調 家計簿が楽し
ライバルに和睦の笑顔贈ろうか

香川県 永峰 伽名子

ご先祖の霊所も崩れ声なきこえ(仁川墓地)
やせ蛙本命射止めてVサイン(早稲田総合学院合格)
お近づき出来た矢先の出船とは
棒針の先がわたしを放さない
スケジュールたてる八十の胸算用

今治市 越智 一水

春らんまん両手を孫がひいてくれ
陶芸の里裏切らぬ陽の光
陶芸の里は野の幸山の幸
税務署でねばって出れば春の風
安らぎを水の流れてとり戻し

今治市 矢野 佳雲

妻に勝つ鬼なら家にいてもらう
前ぶれに金魚一匹浮いている
父の癖半分もって安堵させ
栄転へ分でないけど断わらぬ
素直なら俺はいないと同じこと

今治市 野村 京子

受け皿の母は裏切りなどしない
菜の花が一面 内緒などはない
マニキュアがはげてのぞいた嘘ひとつ
雑兵の父は古傷ばかりなめ
柚子風呂で父のおはこの浪花節

東京都 山口 新子

老いて娘に従いすぎる 父よ
この父に妻がいたらと亡母憎し
ふるさとに知らない人が多く住み
散髪の父がゆっくり若くなり
背を流す父が素直で小さくて

町田市 竹内 紫鏑

深夜ラジオ聞く間に円は最高値
円高で彼は来るまいクラス会
耳遠き級友かこむ声となり
人名は忘れるばかりマップ通
動物園 外野でコールする新芽(多摩動物園)

富士を仰ぐ二病息災甦る

富士宮市 渥美 弧秀

寝転べば孤高の富士に吸い込まれ

窓は雪 庭の野菜が眼に痛い

諍ってまた寄り添って老いふたり

傘寿まだ燃えつつけてる詩とピアノ

仙台市 川村 映輝

売らんかな芸術性の無いヌード

亡き母の面影今も九十歳

横綱の恋をマスコミ見逃さず

罹災者を奮い起たせる甲子園

受験子が鉢巻のまま居眠りし

唐津市 久保 正剣

昨日からの続きを生きる洗面器

人間国宝作品碎いて名を守る

下積みの貨車切り放す助演賞

生きる意地修羅場に見せる握り飯

禁煙席作る差別を咎めない

唐津市 山口 高明

漫画より漫画ちつくな僕の父

世の中が悪いとぬかす殺人鬼

世の中の苦勞独りで背負う貌

社の人事 極秘事項はすぐ漏れる

異次元の世界が視える石の上

雪溶ける雫が春の命生む

弘前市 蒔苗 果林

とんとんと古希越し今日もとんと行く

木の芽にも もぞもぞ僕に似た心

啓蟄の虫を装う妻街へ

家の子等いつも早春花ざかり

十和田市 阿部 進

いい女が居るからできるいい笑顔

震災でローンと身体だけ残り

潮時を逃がさず労使手を握り

青春をお国に捧げ喜寿となり

横車やる気ないのが押してくる

箕面市 岩津 ようじ

母親が二人ドラマの主人公

考えるだけなら天下取ることも

記紀の神にもおわします好き男

人生にないようである時刻表

神仏にいけないことを妻にいう

箕面市 椎江 清芳

金魚屋が通る路地から夏になる

小雨降る祇園 蛇の目が美しい

仲人の言ういい婿は酒が好き

始末書の文字達筆と褒められる

出雲から鈍行で来た安来節

吹田市 瀬戸 まさよ
真面目ですエロスを語り合うときは

独り身で豊かな性を書く女性

この破壊天意人爲と問いつけ

若者の献身未来あり日本

くぎ煮待つ今年こちらが送る番

吹田市 井上 照子
庭の草 折角の芽を摘む私

行く道はいばらもあると身にしてみ

口紅を引いて女でまだ居たい

薬のむために食事に手をかける

湯気ゆらぐひとつになった湯のみから

吹田市 栗谷 春子

地震から涙ぐむ日の多くなり

湯気のものもつと上げたい避難先

旅のことそろそろ胸に兆せども

ひびきよし持統天皇春すぎて

投句すみ紅茶にワインひとしずく

茨木市 藤井 正雄

地酒飲む沢庵だけで良い孤独

卒業写真同級だったパパとママ

駅裏の安い旨いに気を晴らす

新しい名刺息子に長がつく

ふる里の灯はありがたい母が酌

守口市 結城 君子

白酒に手を振っている病みあがり

かげろうの中に再起の人の声

通院の姿は檜山へ行く姿

検温の時間ですよとひとりごと

空白のなんと饒舌なることよ

東大阪市 安永 暁子

テノールの電話の声が耳底に

人柄も若さも惜しい愚痴となり

皆で泣いたあの日忘れることはない

忘却の彼方面影濃くなる

運命に大人子供の差別ない

高石市 浅野 房子

大地震のショック尾を引く怠け癖

深入りを避けて片足そつと抜く

歯切れよい言葉と春を流される

花咲かそ被災地故により赤く

はないちもんめ思惑通りいかぬもの

八尾市 片上 英一

年上の女に憧れてた頃も

反省の猿もいつしか遠くなり

樋口可南子の梅川に酔う春の宵

神様よこの人たちをなんと見る

邯鄲の夢だったのか五十年

八尾市 吉村 一風

鉛筆をゆっくり削るいい日和
心ない噂春まで抱くことに

これやなあ小さい幸の湯が溢れ
下駄はいた散歩へ犬のリズムよし

愚痴ひとつ飲んで屋台をあとにする

寝屋川市 柴田 英壬子

浦島にすこし不向きな太り肉(舞踊おさらい会)

玉手箱ひらいてからの辛い所作

かくす人ないのに愉し内緒金

コミカルにすらすら嘘をつく洋画

減点をさがすと答早く出る

寝屋川市 江口 度

みの虫も呼び出されてる春の風

用心深い新芽と思う猫やなぎ

回転木馬ぐるぐる回る取越し苦労

鼻よ集まれ匂いふりまくハーブ園

見苦しいのは怒っている方だ

寝屋川市 岸野 あやめ

生きていた時は勲章くれはらず(亡夫死に叙ぶに)

四十九日これでよいとは思われぬ

ひとり居て咳に悩んで臥ています

表面に出ればこんなに強い妻

思いきり泣きも出来ぬが気も晴れぬ

藤井寺市 中島 志洋

評判が良すぎて落ちた地方選

口下手と聞いてた娘バスガイド

今どこに生きてはるやらグリコ犯

手土産につられてなった保証人

連休が済んでゆっくり旅支度

藤井寺市 福元 みのる

ゼロからの出発と胸張る若さ

テレビを切ってからのわが家の巨神戦

花束をついぞ貰ったことがない

いっき呑み今に女性が天下取る

男です花道やはり考える

羽曳野市 田中 透太

来た道が見えるところににぎりめし

いきさつはどうあれ鳥もう鳴かぬ

水たまりまだ飛び越せぬあかんたれ

春の部屋 妻はコントを書いている

日本一短い手紙孫がくれ

羽曳野市 森松 まつお

白い雲ボンヤリ見る朝の風呂

順番に風邪ひきまわし春近し

五十路には理解できないファッションだ

ひと押しと思たか女すねて見せ

復興の音めざましく桜咲く

岸和田市 寺田甚一

追つて来てほしくてちよつと逃げてみる

啓蟄も瓦礫の下に虫いない

嫁いでもホットラインをもつ母娘

温顔と言われ苦言をひっこめる

かつこよさだけで携帯電話もち

岸和田市 島崎富志子

補聴器をはずし心をととのえる

惜しまれて逝きたし椿の花の如

六十五年 火の粉の中も生き延びて

ケチヨケチヨと勉強不足の鳥も春

子と孫が合せてくれる温い老い

富田林市 片岡智恵子

不器用に生きて結べぬ靴の紐

大事にされ便利にされて弾めない

いい朝の空気へ毬がよく弾む

前畑さん八十年を泳ぎ切り

孫入院いのちの水が涸れてゆく

河内長野市 井上喜醉

花見頃のおびりしたら春嵐

敗戦の罪じつくりといびられる

道一つ外すと怖い鬼の爪

くすぶると噂繕う針がない

窮屈な空気が苦手サクラ草

大阪府 八十田洞庵

花の下天下を取った程の酔い

海越しに見える被災の火が悲し

税務署にとられる顔ととる顔が

野仏に素朴な祈り農を終え

引き際を知らぬブライド崖つぶち

大阪府 粂山隆

七十の肩にとつぜん五十肩

ためらわず切ったメロンの揃いよう

つけばくろ泣きも笑いも演じ切り

湯治場へ茶飲みともだち連れもつて

仏さま彼岸と此岸往き来する

神戸市 山口美穂

終の住処を老母から奪った大震災

恐怖の跡撮る野次馬がVサイン

病床で思いさまぎま掌をみてる

地の神が自然破壊への怒り

「生きてます」その電話が通じない

神戸市 木村貴代子

明日だけ見つめていこう朝の窓

水運びどうして五階に住んでいる

ブタマンへ並ぶリユックとスニーカー

よもぎ摘む公園仮設住宅地

ガスが出たやつと人間らしくなる

西宮市 門谷 たず子

枯れてゆく葦でつつかい棒がほし
ふんばつてみても所詮は流される

親切な嫁 嬉しとも重しとも

コーヒー茶碗も割れて思い出遠くなり
うす氷ぬくいなさけに溶けやすし

西宮市 秋元 てる

震度七 頭かすめた遺言書

遺しても捨てられる物捨て切れぬ

酒乱とまで言われた亡父が判りかけ

自分だけでも自分が好きになる工夫

被災して自分が少し好きになり

宝塚市 中田 純次

被災地に灯のよな福寿草

ひと駅を隔てて地獄見てしまふ

見るテレビなおすてがたし聞くラジオ

父の木は今も遠くの道しるべ

千年の屋久杉にみた肌の皺

川西市 松本 ただし

気配りを解ってくれた粹な人

息吸って暢気袋をふくらます

ネクタイに縛られ凍る顯示欲

真ん中は臍だけでない腰の骨

上げ底の都会で生きる雪月花

姫路市 丁坪 サワ子

春遠し孫の受験の済むまでは

大正に解らぬことの多い世だ

被災地の土に溶けしか友の骨

もう少し生きたかったと遺影の眼

花花 花 やすらぎのあるデスマスク

京都市 都倉 求芽

昔なら年号変えたか多事多難

地の虫は無事だったかな啓蟄に

おひなさま地震に怯えた眉でない

怒らすな怒るな地球も生きている

円高が津波のごとく太平洋

京都市 稲葉 冬葉

全快は近い女にもどる朝

いつもながらの葬儀屋の名文句

きれいな事並べて生きる火消壺

あの人もこの人も逝く写真帳

怒っている方が負けているそば枕

奈良市 天正 千梢

人間の英知 何程やあらん震度七

被災地の夕べせまれば風痛し

地球儀を回してさがす活火山

とどのつまり票がほしいだけなのさ

侵略者の一人となりて山のぼる

生駒市 北山悟郎

生きるのも死ぬのも楽な道がなし
仏飯を他人の妻が供えてる

逞しく地震に心磨かれる
鷲に厚着の僕が笑われる

腹立ちにこぶしの中が汗まみれ

奈良市 米田恭昌

独酌に頬杖ついて詩人とや

本音吐くライバル少し老いてきた
すかたんな夫婦で笑い絶え間ない

山小屋に灯が点り知る恋心
年頃か灯をともしびと読む娘

大和郡山市 坊農柳弘

復興の淡路の浜へ汐干狩り

精いっぱい咲いて零れて白牡丹
食卓に春いっぱいいの菜種漬

菜種梅雨梅酒の仕込み急かされて
考古学 活断層を見付けてよ

奈良県 長谷川春蘭

毎日が句作の小径繰り返し

どこかも軋みてどこか隙間風
マスクして一寸と敬遠されて居り

葉牡丹の渦 解け初めて恙なし
春眠が愚痴と欠伸に結ばれて

和歌山市 堀端三男

老人会啓蟄すぎて動き出す
銀髪か禿かで揉める老女達

所属するどの会からも喜寿祝い
即答は出来かねますと息子立て

シュプレヒコールちよつと兵庫に遠慮する

和歌山市 桜井千秀

狸にもなれず君子の顔でいる

気の置けぬ方で素顔でお付き合い
通訳の免状孫の勲章だ

足跡は烏どころでない目尻
片手だけの手袋溜まる小引き出し

和歌山市 垂井千寿子

人生の子という荷物の育て甲斐
一つずつ角を曲って出た広さ

紙屑も塵箱に居て落ち着ける
神戸株式会社笑えないねえ戦中派

器には過ぎた浅知恵こぼれ出す

和歌山市 細川稚代

信号の色で占う風の街
民宿のやさしさに会う朝の膳

ハンドルの遊び程度のおつき合い
独り居の詩は私によく似合う
妖怪が蠢いている藪の中

和歌山市 田中輝子

山一つ越えたかネジが緩み出し
似たような話があつて救われる

地図通り行つて沈丁花が匂う

信念のかたさを囓う鬼薊

幾久しくと冬の終りに来た手紙

和歌山市 宮口克子

言にくい事をライター カチカチと

新人はハイハイハイと三日間

そうですな愛さえあればなんて過去

永遠の理想男の胸に母

忙しい事はいいこと美味しい酒

和歌山市 北山好笑

玉子綴じ土筆も里の味で食べ

美しい笑顔奥の手ほのめかし

信念がときどき邪魔になる六十路

無器用で何も拾えぬ女の手

言い訳をするから裏をのぞかれる

和歌山市 山田高夫

目鼻立ちどこか似ている国訛り

ブレイキの利かぬ同士の梯子酒

顔ぶれの一人歯抜けの指定席

ささやかな奢りで満ちた誕生日

はた目から見れば漫画のサザエさん

和歌山市 玉置当代

被災地の手が待っている待つている
霜柱踏んで誤解を解きに行く

ちゃんちゃんこ脱いで土筆を摘みにゆく

SPの役を演じている案山子

殺し文句でじんわり麻酔かけられる

和歌山市 岩本美智子

夫の顔だんだん小さくなっていく

頑なな病夫このごろ愛おしい

愛らしいといわれ続けてきた癖毛

瓶につめた少年の夢潮路ゆく

病室へ一札をする二度童子

笠岡市 松本忠三

大っぴらに嫁がどうのと田舎バス

わたしだけ損をしてます妻だから

蜚蜚がこんな字を書く知らなんだ

ご神酒の罰があたつて酔つ払い

先生とゲートボールのおっさんに

岡山県 荻野鮫虎狼

黒梓になって立派な物語

春の風 枝の小言を聴いてやり

明日がある競争がある塾がある

結局は元に戻った設計図

退屈な一日妻と花の下

女性部で災害頭巾縫うブラン

大阪市 津守柳伸

酔眼へ北も南も閑古鳥

うつろいの刻へ確かに鶯の声

気まぐれな風気まぐれに戎橋

大阪市 河井庸佑

見解の広さが左右した勝負

知る人ぞ知る黙々と積む努力

無理の利く体の自負が崩れ出す

我武者羅に押さずじつくり時を待つ

大阪市 清水利武

熱血の士が出てほしい知事選挙

老夫婦喧嘩しながら寺参り

豪邸も平屋も灰にした地震

親と子の絆で再建する我が家

大阪市 井上白峰

虚と実の狭間で揺れる心の灯

広言を吐いて疵口拡げてる

自己主張 誇示する老いの咳払い

さよならを言うにはつらい輪の温み

大阪市 小糸昭子

死んだ振りして退屈を噛みしめる

寝つかれぬ夜は耳だけ起きている

水洩れる隙間大きくなっていく

口あけた蛙の産卵見てしまう

子ばなれをしたと思えど膝に孫

大阪市 清水絹子

初対面 嘘でなかったお人柄

一つ鍋とことん使い夫の留守

一世紀 今も脈々一葉忌

大阪市 寺井東雲

カロリーを気にするご仁多くなり

とっときの万札遂に出て行つた

何となく足早にする大阪で

震災の巻添えになる観光地

大阪市 坂本仙吉郎

受験子を抱える親を思いやる

通ったかと聞くにためらう電話口

家中が合格祝う顔うかぶ

来年も受験の孫が二人居り

大阪市 渡部さと美

怒って出ても熱い涙は筋を引き

足すくいに来た横波をとびかわす

虚弱体質聞かされそんなとこばかり

息子が母と正反対の美人連れ

大阪市 北勝美

青首を伸ばして大根春を待ち

間引かれて汁に浮いてる不仕合せ

咲かす花剪定鋏に慈悲がある

春の雨蒔草の慌てよう

七転び八起きを望む義援金

堺市 楊井二南

医者の手を借りて生存確かめる

絵空事 鹿爪らしい口を利く

執拗に続く余震の震度三

堺市 柿花紀美女

旅疲れ我が家の温い灯が見える

逃げた運拾った運もついて来る

血圧が上がる事件に目をつむる

入院の友へゆっくりリンゴ剥く

堺市 黒田真砂

生かされた生命大事に福寿草

負けたなと思う相手の咳ばらい

朝日には幸 夕陽には感謝忘れずに

被災地を思えば離れも浮かぬ顔

堺市 中野櫛子

亡娘と孫の笑顔ふつつスイトピー

翔びたい夢 巻き戻したい私彩

倅せをかみしめているお風呂好き

避難所を案じ飲んでる風邪ぐすり

堺市 一瀬福一

ミニマキシホットパンツの春が往く

ぬれぎぬのままで女に冬がくる

ステージの夢は忘れぬ皿洗い

口笛が転がしている秘密

地震以後日記白紙になっている

豊中市 辻川慶子

生きている春の手帳に赤の丸

抱き合うかたちになって草枯れる

どこまでがほんとに夢で逢うばかり

豊中市 滝北博史

百円の輸入ビールはまず妻が

東京の息子の家へ移る姉

博士号とれず小唄の名取り状

かしわ餅三個で足りる老夫婦

豊中市 三宅つえ子

車椅子あと何年の墓参り

麦藁帽 父の匂がまだ残り

教室のまん中にある車椅子

封をすると他人の顔になる手紙

池田市 岡本吉太郎

気がばりが過ぎこちらまでおかしなる

生と死を瞬時に分けし震度七

宝石はいつもガラスの向う側

平成にと願ひし御代に大震災

箕面市 坪田紅葉

行ける時行ってよかった旅の宿

あるがまま生きて行きたい長い旅

みほろ峠はかほかの焼いにも手をぬくめ

孫二人嫁に行っただし元氣出す

吹田市 茂見よ志子

散策に程よい雨後の春の土手

枯枝に緑の衣 春の情

エンゲル係数減って諸掛りばかり殖え

意識せぬ心構えが意識する

寝屋川市 平松 かすみ

雪つりの縄たるみきて日向ぼこ

黒百合に女の無念宿るなり

たわむれる犬と小鳥という渚

直線も曲線もあり泣き笑い

寝屋川市 堀江 光子

退院を待たず椿の散って居り

被災地に花蘇る芽を信じ

どれ一つ同じ影見ぬ枯木道

出立へ革袋新しくして

枚方市 八田 敏

円高でボトルの棚が低くなる

留守がちのわが家は犬が主顔

ボランティアに生甲斐かけて老いの日々

力んでもたかだか知れたわが余生

枚方市 海老池 洋

世に揉まれ中間色になりにけり

つくづくと人生思う同期会

放置でも許せる孫の三輪車

知恵の輪の解けたら会える人のいる

東大阪市 森下 愛論

地滑りの隙間に雑草芽を伸ばし

残り火を燃やせどきしみ出す骨よ

時どきはつまずいている勘どころ

人の情ふところに入れ明日に起ち

交野市 福岡 しげお

内助の功 妻聞き役に耐えている

花咲けどあわれ瓦礫の庭の隅

ボランティア背にリュックの一万歩

肩書の無いのが力になつてくれ

羽曳野市 吉川 寿美

読めないのが救いカルテの中の余命

しあわせが通り過ぎてくわたしの駅

余生と言う残り時間を鈍行で

砂時計流した過去を責められる

八尾市 山下 美津留

白梅の匂こぼれて娘は巣立ち

ワープロになめられている鈍い指

水槽の鯛ゆつたりと終を待つ

叙位叙勲などには縁のないコンビ

八尾市 高杉 千歩

こころ開き五月の風に会釈する

絵三昧 余花を尋ねて昼の山

川のない橋で亡母を呼んでみる

くり返しビデオの孫へする拍手

八尾市 宮崎 シマ子
橋杭から這い上がってくる流し難
父さんに頭上がらぬ伯母がいる

春になったら亀も兎を追い越そう
僕の味方は生後二十日の子猫だけ

富田林市 松本 今日子

主のない古びた聖書本棚に

被災した妹元気でボランテニア

読むもよし読まぬのもよしダイレクトメール

花道の花はきめてる雪柳

岸和田市 芳地 狸村

お馴染みの屋台たのしい寺参り

肩書が消えて誇りをもつ名刺

節分の鬼がたまげる子沢山

ご祝儀を入れたつもりの空袋

岸和田市 古野 ひで

口癖の勿体ないで暮す老母

ふつくと心優しき片笑くぼ

仲直りしておく手紙書いている

哲学の道で豊かになる心

岸和田市 原 さよ子

土壇場がこんと一途になれぬたち

冬の部屋やわらぎくれるシクラメン

宿ゆかた主婦を忘れて華やいで

ぎざぎざに描いても母の顔になり

岸和田市 高須賀 金太
まっすぐに進めば障害が多い
駆けのぼる奴は周りを見ていない

せかせかとする暮らしにはもう飽いた
墨絵の中に極彩色の夢を塗る

岸和田市 三輪 通彦

石女が悲哀感じる子供の日

匿名のときは本音のアンケート

薬漬けになっても生きる人の業

春闘も氣勢上がらぬ震災後

岸和田市 田中文時

定年後 居候にも似た日夜

信号の赤に拘り出遅れる

介護する方も年金貰ってる

入り乱れお好み焼きのような党

岸和田市 藪野 けい子

産声に幸への名前字典引く

小企業へ借りて欲しいとくるFAX

欠席すると連絡に行き飲むコーヒ

買物へ散歩の友と二人連れ

河内長野市 植村 喜代

ボタン雪 神戸は寒いことだろう

春来れば人の心も春になる

早送り誰かしているように経つ

自分一人何が出来よう大地震

和泉市 西岡洛醉

一枚を重ねてひとつ老い進む
雑兵の宝に嘘の無い暮らし
神仏に今を祈って老いふたり
一二三 小川を越えた童唄

和泉市 岡井やすお

人だものいざ鎌倉の助け合い
天災も狙ってるのか新記録
早とちりマルコポーロは死ぬ羽目に
オープンザドアズへ条理フィルター

奈良市 宮口笛生

礼服をなおす間のない計が続く
仏滅にこだわりがある老夫婦
好きな酒此の頃弱くなって来た
ストレスを吐き出す酒にのまれてる

天理市 飯田昇

色っぽい話の語尾に謎がある
ひたむきにつくすナースの温い嘘
肚割ってにをは抜きの酒にする
戦後五十年戦艦大和も死語となる

大和高田市 岸本豊平次

子離れの出来ない妻の淋しがり
無駄なのは一つもなかった皺の自負
羽根布団の軽さが寒い貧乏性
芹薺 御形 繁縷 散歩道

和歌山市 玉井豊太

個々の芽がじつとこらえて春の声
いい影と遊んでいます縄電車
他人さまも佳い日の幕に出入りする
お頭がわたしを手下にすると言う

和歌山市 青枝鉄治

被災地へ徐々に笑いのくる安堵
吠えたてる犬に餌付けをする策士
すぐ解けるクイズの持っている野心
春風のささやきで買う赤い靴

和歌山市 池永正雄

人情が特産品といえる町
中味より上品過ぎる包み紙
ロビーより赤提灯で手を握る
無理をしてスルメの足に笑われる

和歌山市 内芝登志代

逃げ出して見ても良心許さない
恋をする孫の苦勞を聞かされる
あの時の面影抱いて母の忌よ
あのお顔 遠いお顔にしてならぬ

和歌山市 福井桂香

木蓮のもの言いたげにそそり立つ
春の花充たしてこころうそ淋し
流されていては命が磨滅する
暮れなずむ街は私のテリトリ

和歌山市 山口 三千子

離婚願望わたしひとりの身であらず

様々な風と出会って半生記

長生きをせねば苦勞の甲斐がない

縄電車子供二人は途中下車

和歌山市 田中 みね

釣書には無かった妻の左利き

あの方もそうと思えば楽になり

身に余る席で笑顔がぎこちない

好きなひと忘れるための恋もある

和歌山県 西口 忠雄

ハネムーン土産は妻の腹にある

好きな人できて無職とも言えず

ばあさんを残してOL乗せたバス

鉛筆の芯までまあるくなつた恋

和歌山県 小倉 アサ

一杯の茶粥に亡姑が近くなる

根の浅い内は少々耐える向き

うっかりと出来ぬ枝葉にある流れ

逢うほどに余韻ひきずる沈丁花

西宮市 菊池 トミエ

生かされし命を抱いて日脚伸び

倒壊のただ茫然と貝になる

煩惱を払う木魚のにぶい音

紅椿ぬし無き庭の片隅に

日にち薬 冗談言える電話口

この春は菜の花のいろ目にうれし

仏だんの修理しばらくお待ち乞う

盆梅展ごもつともなる花名札

西宮市 山本 義子

八十へあとひととびで手が届く

地震から独り暮しの夜が長い

大地震 地獄の鬼のいたずらか

南から桜便りもちらほらと

宝塚市 丸山 よし津

チャリティーで半値になつた引出物

鯛よりもピザを喜ぶ祝膳

半壊の家で明るい花を分け

入れ歯はすす最早電話に出られない

伊丹市 樫谷 寿馬

天地が今開かれんとして震れる

声ならぬ声で呼び合う闇の中

会話せし事 無き人に背負われる

一人では暮らせぬものと神の告げ

川西市 氏林 洋敏

宝石で飾ってやろう妻の指

淋しい日ひろびろとする四畳半

背伸びして星に近づく努力する

友達といつも会つてパチンコ屋

加古川市 吐田公一

復興へ死力尽してツチの音

家も子もなくし槌音さえ空し

日本より妻に合うのはロスの水

珍しい病へ医者が寄ってくる

姫路市 中塚遊峰

堪忍の袋を結ぶ細い紐

野仏にペダルゆっくり頭下げ

古傷に触れる話にそっと立つ

捨てきれぬ欲と二人で古希の坂

岡山市 井上柳五郎

今一度再会祈る遠い友

仔犬一匹ひい孫のよう可愛がり

身勝手とさぞかし神はおかしから

お互いのクスリ見せ合う老い二人

岡山市 花田たけ志

挑戦をすれば色が出つやが出る

贅沢に無縁な余生で後も無い

人間の油断をあざける活断層

この世ではいわおになれずさざれ石

岡山市 矢内寿恵子

あれも夢これも夢かや風挽歌

生きざまを風も斜めに刺してくる

夢見る夜 夢の形はまだおぼろ

風一会 人の情けも道づれに

岡山市 二宗吟平

観艦式の偉容を偲ぶ神戸港(昭和五年頃)

ドル箱の自慢の駅も無人駅

セメントの山は残って工場消え

百輛の貨車を捌いた線路錆び

岡山市 岩道博友

旬の物植えて我が家の味にする

二枚舌熱い番茶で舌を焼き

素直袋 東や西へ持ってゆく

悪口の中に善玉だつてある

岡山市 池田半仙

一駅毎 梅が膨らむ伯備線

曾孫まで血を分けたのが十四人

山茶花の散り敷く庭に蓄の木

もう少し欲しいとこまで美味しい酒

岡山市 江口有一朗

燃えている自転している陽の温さ

よい目覚めふつと解った師の言葉

無念無想人間らしさ取り戻す

何気なく置いた心にある油断

竹原市 時広一路

奔放な雲でも空は広過ぎる

中間の辛さよ面が二つ要る

黄昏の渚に一人 演歌だな

ジョークかな晴れた空から雨ボツリ

悪運の強い男がよく笑う

鳥取市 両川 洋々

ありがとう僕には過ぎた妻でした

新しい試練に神戸負けるなよ

酒二合 今日怒りがまだとけぬ

鳥取市 西原 艶子

もう少し若かったらと思うこと

鍵の束しっかり持って働きに

裏切りを書けば金色夜叉に似る

菜の花が咲くたび過去が遠くなる

鳥取市 武田 帆雀

早口で言うから骨が軽くなる

会社には馴染めず髭を蓄える

お坊ちゃん育ちに鬼が通せんぼ

役付きに推されて骨の髄が溶け

鳥取市 岩原 喬水

雑魚のまま運命線が伸び悩み

足音で好きな人だとすぐわかる

善人で太っ腹だが銭がない

男同士小指を出して笑い合い

鳥取市 小谷 美ツ千

疑いもなく蛇口の水を飲んでいる

美しい罨と走っている愛よ

風に逢いそれから哀がはじまった

蒼く青く燃える絵本を読みあさる

幸せの住む山と聞き行つて見る

鳥取市 春木 圭一郎

幸せのヒントを不満から拾う

羽衣のかかった松が気にかかる

年金を指折り数え待っている

鳥取市 前田 一枝

風花に持つて行かれた宝くじ

福の神逃げ足早く追いつけず

竹の子は皮脱いで立ち上がる

袖の下足りなかったか又翹べず

倉吉市 野口 節子

ドールンで埋まらぬ深い傷がある

さよならが静かに言えた電話口

年金でそよ風ほどの夢を見る

恩返し回り道して惜しくない

倉吉市 最上 和枝

うわさの樹 王者の貌が欠けて来た

噂の裏にひっそり仕掛人がいた

墨痕に謀叛されつつ書を習う

幸せの今をラップに包み込む

米子市 茂理 高代

策に乗る野望老いても捨てられぬ

どこがどう間違ひ舟が揺れ出した

かく駅で涙を捨てる旅に出る

草萌える春だ遠出をしてみよう

米子市

白根ふみ

風が寒くてとりまくものがまだ無口

雪解けに流されまいとふきの薹

名残雪お水送りの水たしか

芽吹きだすとの天もみな網の目に

米子市

青戸田鶴

いぬふぐり一途なところつたえよう

せかさぬと私の針はすすまない

すき間風 私も家も年をとる

天も地も迷いが多い世紀末

米子市

新正子

逆風を知ってるような泣きぼくろ

帰省する度に木陰がやせている

老いが来るエレベーターに乗って来る

入院をしたら家来が寄りつかぬ

米子市

中井ゆき

色々な事をしのいで今日の部屋

この部屋の城主様です泣くまいぞ

我儘で静かな道にあきて来る

サムソナイト開けると私翔んでゆく

鳥取県

松下たつみ

本当のことが言えないのも立場

正直がつまずいていた第一歩

元栓を切つて男の芯を見せ

うぬぼれのポーズに赤がよく似合う

鳥取県

津村八重子

食べざかり母に悲鳴と詩がある

まだ元氣テレビの番はしておれぬ

かげろうがゆらゆら心まよわせる

万葉の里で古代の夢つむぐ

鳥取県

黒田くに子

拘りがまだ胃に残る雨が降る

あなたよりたぶんだよりになる保険

師の一言やがて心のかてになる

バラ一本やがてハートを射るつもり

鳥取県

西川和子

タレントの誇り大きく光る石

これだけの人生なのか六十路行く

その先の夢は大きな物ばかり

母の顔浮かべつらさから逃れ

鳥取県

石谷美恵子

小宇宙泳ぎ胎児は刻を待つ

竹に似てしなやか誰も傷つけぬ

ピカピカに家を磨いて寄せつけぬ

福耳と言われピアスがためらわれ

鳥取県

幸家單車

アベコベになると貴男は逃げて行く

俺よりも一寸愚かな君が好き

あべこべにされてもダルマ起き上がる

矢印は地獄の方に向いている

鳥取県 乾 隆 風

善人の屋根に首傾げる鳥

散る桜ながめてしまいうしろ手に

弔問の客から匂う祝酒

五十年夫婦茶碗を懐かしむ

鳥取県 田 村 きみ子

以下余白などと日記をさぼってる

人を許してそれから笑顔美しい

宝くじ又買いました内緒ですよ

肩パット外してこの世面白

鳥取県 土 橋 睦子

パワー全開花も小鳥も競い合う

騙されてみようか美しい嘘に

臆病がマニアにさせた石磨く

春の宵 道草をする喫茶店

鳥取県 石 尾 かつ乃

主婦の座を譲ると老けてくる予感

バス賃を残して募金して帰り

窓という窓を拭いてる嬉しい日

路地裏に春の匂を貯めておく

松江市 柳 楽 鶴 丸

灰皿に三下半はかけません

妻に一度着せて見たいチャイナドレス

波瀾万丈でした僕の昭和史

頑張るぞ二〇〇〇年は年男

出雲市 園 山 多賀子

白椿浅き夢見て酔いもせず

針山が錆びてわたしも光らない

蹟かぬよう慎重に背伸びする

弱虫で忍び返しがまだ越せぬ

出雲市 吉 岡 きみえ

ふと本音洩らすためいきかすみ草

極楽に逝くよう和尚によく頼む

濡れ衣をどう晴らそうか春浅い

耳長くしてきいている金のこと

出雲市 小 白 金 房 子

健康を宝と生きる老いの日々

ふる里を捨てた女の白い指

戴いた叔母の形見で春を着る

はく息も白く牛飼う今朝の霜

出雲市 小 玉 満 江

少女趣味少し残して年重ね

惜しまれて去就の春や昼の月

嫁さんに合せて今日も舟をこぐ

病院のくぼんだ椅子に浅くかけ

出雲市 板 垣 夢 酔

聞き上手とばけ上手な古狸

標準語舌噛みそうで出雲弁

待つ人が居る吊り橋で恐くなし

青空になろうとするに去らぬ雲

出雲市 富田 蘭水

ネクタイを外すと美味しいお茶が待つ
子の夢をいびつな型に親が変え
蜚雪の意味は知らない優等生
春一番 胸のうずきを連れてくる

出雲市 石倉 芙佐子

かくれんぼするには丁度良い所
寄り添うて別離の唄を華やかに
夢覚めて転がり落ちたにぎりめし
五月雨行くも帰日も唯ひとり

島根県 松本文子

気がかりな病母へ小雪がちらついて
茶碗割る 忘れられないのはわたし
唇に溶けてしまった春の雪
どうでもいいことだ春眠もう少し

島根県 石飛水煙

命だけ一つ残っただけの運
手応えは満点だった自己過信
一生を段差の多い道を行く
入れ替えの人事ライバルまた一緒

島根県 西村 早苗

五時からの吹きだまりとなるホルモン屋
手鏡に胸ときめてないしょの日
噂でも飛ばそう空気がうますぎる
たまらなく好き亡母さんを恋うように

島根県 藤原 鈴江

もうちょっとと光ってみたいと思う日も
五月かなああ五月かな亡夫恋し
ちぎれ雲幸せつなく空の青
哀しさよ今頃何故めぐり逢い

香川県 木村 あきら

世の中に作り笑顔が多すぎる
招き猫よりも効き目のある笑顔
陽がのぼる俺も遮二無二生きている
地蔵岬見下ろす丘に句碑が建つ(対岸小豆島の地蔵崎灯台)

香川県 工藤 吟笑

好きな物食べと言われてチトあわて
充電はしたがエンジン掛からない
約束を違えた方がタンカ切り
消費税関係なしに糶を播く

香川県 山地 マツエ

酔っている振りして聞いている噂
さくら貝探す小さな夢さがす
背くかも知れぬ笑顔と手を結ぶ
曲り角見落としてから運が逃げ

香川県 新川 マサエ

厄払い鳴り物入りの餅をつく
横道で雑草の花競い咲く
震災のニュースに日毎出る涙
予算より浮いたお金で夢を買う

大勢に押され妥協のバスに乗る 松山市 白石春嶺

操縦のミス蜘蛛の巣に朽ちる羽根

ワンテンポ置く山彦の生返事

棧橋でやたら手を振る小さい母

松山市 宮尾みのり

子守り唄かすかに祖母の土地訛り

帽子から確かに鳩は飛び出たが

パンドラの箱かも胸に持つ樹海

やじろべえ妻がだんだん重くなる

高知市 赤川菊野

大声でふいに叫んでみたくなる

ダイヤにも勝る宝石児の笑顔

再会へ遠い記憶がよみがえり

八方美人リバーシブルのような人

北九州市 梅田宣司

静と動故に二人はうまが合う

罪深い十指合掌繰り返す

無造作な返事が多くなる二人

勝算があつてためらう振りをする

福岡県 横地東川

義援金送ろう我が家は温いめし

エリートだ横やり騒すのも巧い

ちっぱけなベテラン脇役ばかり来る

嘘が下手家系に商売あっち向く

薄給から拠出を震災義援金

祝祭日国旗を掲ぐ戦中派

暴走車轟き夜半不眠症

村里の春へ轟く鹿威し

名古屋市 越村枯梢

貸家札貼って人間廃業す

双手高く つかバンザイしてみた

父が呼ぶ母が呼ぶ急がねばならぬ終の旅

誰がために合掌するや無神論

羽咋市 三宅ろ亭

焦土にも春あり合格案内入れられる

小波がおきた桜咲いた数

する墨の製作労苦無にしない

江掘して村にほんとに春がくる

七尾市 松高秀峰

ゴメンネを言える夫婦で仲が良い

過疎の村 卒業二人に一人入り

透析で生きる気迫の顔の艶

病んでから母の温みがよくわかり

横浜市 菱田満秋

兆という桁あり億にたじろがず

落着けば神戸の土竜気にかかる

イヤリングはずして女座りかえ

電車待つ美人の並ぶ列へつき

唐津市 筒井朴竜

弘前市 小寺花峯

またひとり戸籍をぬけたたちくらみ
娘の気持そっとしておくシャボン玉

わたくしも花になりたい葱坊主
二次会へ行く足ならまだ動く

弘前市 中山雅城

離壇で居眠りしてはいけません
順番を待つほど世間広くない

大臣もくじで座ったクラス会
孫たちに負けてたまるかちゃんこ

弘前市 村田善保

砂時計 何度問答繰り返す
記念樹の翠に無限の詩があり

少年の拳の中で湧く涙
むき出しの人情を知る吹き溜り

黒石市 相馬一花

心電図とると治まる不整脈
友人の祝辞が婿を減多斬り

演劇の好きな和尚の名法話
義理チョコを貰い嬉しい血糖値

十和田市 小笠原敏人

剪定の桜並木の下を行く
ベタ雪にゴム長添えて春を呼ぶ

お人よし祝言弔い目白押し
わたしにもカラオケ歌える時がある

八戸市 島田昭治
逝くときは笑っていくよに鍛えねば
おはよう坂兎等の挨拶元氣よく

本の虫そんな昔を懐かしむ
被災地に管工事で行く子に拍手

札幌市 瀬尾六郎太

何故ぞ猪突盲進活断層（作者注『猛にあらず』）
住む大地ドッスンゆらゆら死を覚悟

日本中物騒列島活断層
甲子園センバツ決行勇気づけ

「川柳塔わかやま」 300号記念川柳大会

とき 8月6日（日）午前11時開場

ところ JA会館五階（JR和歌山駅前）

事前投句 「海」 牛尾 緑良選

◎指定ハガキに2句・7月15日締切

兼題と選者（各題2句）

「続く」 河内 天笑選

「耐える」 中村 重治選

「ハンカチ」 森中 恵美子選

「山」 田中 好啓選

「歌」 橘高 薫風選

会費 1500円（軽食・記念品）

懇親宴 3500円（申込制）

柳 緑 花 紅

橘 高 薫 風

命あつての物種という。英雄も大悪人も命絶えると、この世のことは「ハイ、それまでよ」となる。太平洋戦争と結核という死病で青春時代を死と対決してきた私ではあるが、こんどの大震災の犠牲者にどうお慰めしてよいか、言うべき言葉を知らない。

元大阪大学医学部教授で、大阪厚生年金病院の名誉院長だった武田義章先生は、私の家五代に亘る命の恩人で、九十二歳、鄧小平と同一齢と言うのが近頃の口癖だった。その先生の奥様が東灘区の自宅が倒壊して圧迫死された。一月十七日以後、音信不通なので私は現地へ行くことにした。

JR住吉駅で降り国道へ出ると軒並みにビルは傾き、壊れた家屋の惨状に目を覆いたくなる。探し当てた先生のお宅は和洋折衷らしい二階建てが膝を折ってひれ伏し、門から玄関に通じる庭の椿が、赤い花を腹の立つほど沢山つけていた。樹木たちはどれも無傷で甚だ印象的な光景に思えた。その日は三宮へ出

た。日を改めて避難先へ伺い先生のお話を聞く。奥様の圧迫死は一瞬のことで暗闇の中、名を呼んでもついぞ一言の返答も無かった。ご自身も梁の下敷になり身動き出来ぬのを、梁を切断して救助された由、その間の老師の思いは如何ばかりか。

直ちに奥様の火葬許可を貰いに行くと、警察の検死が必要だから仏を元の現場に戻せと言う。初期の区役所の現状把握や応待よりはひどかったらしい。

川柳の仲間では、ふあつと川柳社の抜井ユキさん死亡、前川千津子さん全壊全焼、船津とみ子さん半壊、梶元せつさん半壊の被害よく訪問をした甲子園口の紋太居がなくなつてしまふ。奇しくもこの四人は、昨年十二月に米子のきやらばく忘年句会でお会いした方たちである。

三月、鳥取県川柳大会で鹿野町へ行き、川瀬町長から、鹿野は被災地へタンクに温泉を満たし、五度運んで被災者に喜んで頂けた、と聞き、土橋螢夫人のお仲間は豚汁二千人分を提供、ボランティア活動をなさつたと聞く。

川柳塔社も本社句会の席上の拠金や各地のグループからの多額の義援金で、神戸の柳社や同人十名の家屋倒壊された方へお見舞金を贈ることが出来、心から感謝致しております。

作 品 鑑 賞

昼眠るカッコウの鳴く森の中

田村 新造

絵のような一駒一駒の表出が連続し、それも前後の内容が作用し合つて感銘を深める。遠い日の記憶だから迫真の気は少々薄い、忘れ得ぬ事柄ゆゑ映像鮮明で、戦後五十年の今年のテーマにうつつつけの逃避行である。

それだから言わぬことではない卵

古川喜美子

「ほら、言わんこつちやないやろ」と卵をポケットに入れていて、うっかりつぶしてしまつたときに言われたことがある。

茹で卵きれいにむいてから落とし

延原句沙弥

の匂も思い出す。累卵の危うさでもあらう。

禁煙の次は豆腐に凝っている

高瀬 霜石

男の単純さ、おかしさは、喫煙、禁煙を繰り返して、ひととき豆腐にこだわつてみたり、見戯に似たところがある。禁煙と豆腐の取り合わせも味の一つであらう。

SLの煙を混ぜて杉花粉

蘭田 獏杏

大井川鉄道の人気車掌さんの実感句。私もそのような自然の風に会いに旅に出たい。

自選集

高杉鬼遊

毒ガスがまさかまさかの乱気流
友だちを疑ってみるサリンから
わたしより悪い男がいるサリン
手荷物をサリンと思う日がつづき
死ぬよりもサリンが怖い世となりぬ

野村太茂津

内科医と外科医の診方見比べる
流石名医も人情の機微触れてない
お見舞いの義理半分も見えてくる
白白白 病窓の雲みんな白
幸せは日光を浴び日光を浴び

松川杜的

一丁の近さにポストも銭湯も
朝夕を同じ台詞で仏様
安定剤 妻と相談をしては飲む
非常口ばちばち決めておかなけりや
キッチンのリズムで本を読む安堵

有働芳仙

人生の地図塗り替える呱呱の声
太陽をいつも斜めに受けて生き
億という借りがあるとは見えぬ顔
救済の声聞き飽いている握り飯
被災地へ復興の花ひらき初め

遠山可住

勲章をもらたらない男
つるし柿食べ終った春になる
転職をしてふつくとしなさった
陳情書 中味も読まず書いてあげ
あと十年 亡父の歩いた道を追う

恒松町紅

あの日から鳩の神経過敏症
老いの足まだ自転車を磨いてる
欲ばった道でつまずく皮財布
寄る年へ負けない汗をかいている
充電をしろと体温計が言う

月原 宵明

コルセットに縛られ空のない世界
鐘撞いて故郷しみじみよい所
憎い人懐かしい人目をつむる
四捨五入 情か非情か解らない
一病を友に米寿へ立ち向う

正 本 水 客

持ち時間がないと自分に言い聞かせ
美しい言葉で口をふさいどく
もう一人の私と話して妥協する
反省することが何もない春の空
真つ正直な暮しがいいメンタイコ

奥 谷 弘 朗

資本家に雑草の意地見せてやる
耐えぬいて出来た艶だとほめてくれ
了簡の狭い主人に慣らされる
女なら掃くほどあるとぬかしたり
金回り良いと体調までも良い

小 林 由 多 香

進学と就職わが家春にする
負け犬に冷たい雨が鞭を打つ
日の丸の弁当いくさには負けた
単身へ慣れて気楽に飲んで寝る
マネキンも明るい色で春飾る

黒 川 紫 香

復興の息吹き草も唱和する（震災復興
負けん気が漲っている飯店舗
声だけは昔のままの人に会う
夕焼が明日の予約をして消える
鯉のぼり首出して見る園児バス

野 田 素 身 郎

つよくない酒だが酒の句にひかれ
明日は行くつもりの花へ雨が降り
生活の隙間見つけて句を作り
孫の風邪 誰がうつしたのかもめる
いずれ行く道 斎場へ続く道

大 矢 十 郎

打ち寄せて返す波なく片男波
持ち寄ってバレンタインは食べてゆき
天性の声澄み努力の声は枯れ
奥歯まで見せて政治屋よう笑う
断末魔の顔で鯛の干し上がり

藤 村 女

きつちりと新茶の届く友があり
幾山河越えて丸みが出来た祖母
見て見ぬふりが上手になった祖母
感受性にぶい婆ちゃん生き上手
いたずらへ名乗る孫の勇氣ほめ

金井文秋

器ではないと器の辞意固し
この足で行きたい二十一世紀
塩昆布 常備に炊いて独り住む
ごみの山に群がる鳥は詩を持たぬ
少うしは呆けて天寿を全うす

工藤甲吉

節分が過ぎても鬼に住みつかれ
春や春 柳緑花紅始まりぬ
嬉しくて顔いっぱいに皺が伸び
理髪屋の鏡で老いたなと思ひ
愚痴言うな三度食えてるではないか

辻白溪子

湯豆腐の湯気が静かな京の庭
茶へ座る婦警静かにお辞儀する
強盗と知らずに自動ドア開く
薄化粧 美人目立っている喪服
コーヒーへ道草をした万歩計

八木千代

存在感がある安売りの桃の種
雪礫といっしょに投げる種袋
くせの強い種で十年後に芽吹く
火種でもないのに熱い種袋
消し壺の火種 殺されてはいない

小西雄々

七彩の風がつばみをせきたてる
葉桜へ律儀な風に月おぼろ
掌の鬱わすれさす遼太郎
若返る刺激 赤鬼から学ぶ
タレントの教授 雑学には弱い

児島与呂志

人生のさてこれからの震源地
道一つへだてた友の情に合う
山並のくつきり初夏を朝の雲
今さらに言い訳をする覚え書き
根来坂 昔の人の口伝え

藤井明朗

カードローン便利のよさに借用中
自我独尊 気取って敬遠されている
太陽の平等を無視 難民はふえてくる
川柳と仕事二役 元氣満ちてくる
汽車見える窓ではじまる朝のお茶

久家代仕男

弥陀の手にいのちあずけてある安堵
木登りをする子も居ない塾靴
物騒な世相きそうて犬を飼い
激震が話題 病棟の長廊下
何時からか公園に見ぬカゴメの輪

波多野五楽庵

月が出てもぐらも人も哲学者
古希祝 仏も鬼もさらけ出し
再婚を拒むこはぜの深い闇
同情はいいよ病後の意地がある
涙ほろほろあけびの芽を噛んで

西田柳宏子

被災地を励ますように桜咲く
因習が貌現かせる大和屋根
復興を日毎に語る窓明り
半分は老母に聞かせる独り言
地震では堕ちないはずの橋が落ち

小出智子

鉢の花枯らしてはまた買ってくる
晩年や泣きたいときはひとり泣く
また一つ荷を降ろしては淋しがる
夢に出た亡母が知らん顔をする
母の死後ぼつんと座る癖がつき

河内天笑

皆殺しする気のオウム真理教
一面も九時のニュースもサリン潰け
よそ行きの顔を並べた立候補
浮動票集めに走る漫才師
円高で安値の金売れている

川柳都大路200号
記念誌上川柳大会

宿題と選者

「悪」	天根夢草選
「うたう」	河島いち子選
「横」	北沢双舟選
「透る」	小出智子選
「まだ」	杉森節子選
「雑詠」	奥山晴生選

投句 便箋程度の用紙に各題2句連記
(各題別紙) 住所・氏名・電話
番号を明記のこと

締切 6月30日

参加料 1000円(発表誌呈・各題秀句賞<楯>)

発表予定 川柳都大路9月号

投句先 〒610-01 城陽市寺田深谷8-58
中林 酔虎

水煙抄 (追加)

役職を返上しすぎ軽すぎる
二次会に率先サイフ軽い奴

大阪市 宮本信幸

ルナロッサわれも傾く三宮(震災2句)

橋高薫風

豆撒いて豆拾いおる家があり

柳の芽姉三六角蛸錦

白胡麻と黒胡麻しかと差別あり
桜かてすかっと散ったわけでなし

川柳太平記 (204)

川柳の群像

神山虚六

東野 大八

神山虚六といっても、今の川柳人にはなじみの薄い人物だと思ふが、知る人ぞ知る十四代根岸川柳（一八八五—一九七七）の一番弟子であり、親身の後援者だったのである。

神山博之が実名で、明治43年一月26日栃木県今市の生れ。商大（一ツ橋大）を卒業後、東京府庁に勤務。上司が根岸川柳の実弟の石川栄曜（後の建設局長。戦後、早大教授となり、都市計画の權威）が縁で、根岸川柳が時折、弟の職場を訪ねるうちに顔なじみとなり、終世川柳との縁が生じたという。

「おれの若い頃、府庁で仕事中に、机のそばでうるさい事を言っているそのジイ様が根岸先生だったというわけだ」

「今から四十年ぐらいむかしのこと、私が十四世のお供をして、栃木の吟社にお邪魔し

たことがあり、虚六さんのお宅に泊めて頂きました。今市の街道筋の道に面した旧家の店構えて、長く続いた名物の饅頭製造販売を業としておられ、店頭には白い湯気をあげた蒸し饅頭のせいろがあり、甘党にはたえ難い香りが漂っていました。

後から十四世にきいたことですが、虚六さんご自身は、この家業に乗り気ではなかったらしいのだが、ご両親が由緒ある饅頭の店だけに、この家業を止めるなどとは思ひもよらず、親孝行のつもりで続けているとのこと。

当時は砂糖など思いに任せず、苦勞も多かったことでしょうが、親を喜ばせるための心がけと知り、豪放らしい落そうな虚六さんが、そんなやさしい思いやりの人だと感じ入ったことです」（酒寄遊子悼文）

「これは一つの想像にすぎないが、今市の実家は実弟に任せて、奥さまと東京住いをするつもりであつたらしい。しかし、非情にも、日中の戦争がはじまり、新婚三か月で召集除隊の後、今度は長女の明子さんが乳のみ子の頃、再度召集をうけ、敗戦後、本土に復員という事になり、この間、実弟は、海軍の技術士官として南海に散華してしまつたのです」（脇屋川柳悼文）

以上の二つの悼文は、『川柳』No.214の『神山虚六追悼号』に掲げられたもので、虚六の死去は平成6年5月31日である。

以下、この号の『神山虚六氏を偲ぶ』の、脇屋川柳の長文の悼文から抄録する。

私が初めて柳人先輩の虚六氏とお会いしたのは、十四世根岸川柳のお供をして、宇都宮からの帰りの日光線車中から始まる。

「先生、虚六さんのお宅の今市の家で、私などがお宿させて頂いていいのですか」と訊けば、先生は

「うん、駅前の饅頭屋だ。むかしは旅館もしていた家だから、お前一人ぐらいはなんとかなる。心配するな」というぶっきらぼうの返事だった。

いささか人みしりの強い私は、いささかそれをきいて気にかけていたが、虚六さんにお

目にかかり、そのお宅の家族の皆さんにあうたら、そんな心配はたちまちけしとんでしまった。虚六さんをはじめ、礼儀正しい奥さまやお姑さん、女の子や坊やまで、みんな明るくて、まるで永年の知己のような扱いをうけたことだ。日本にまだこんな純粹で、屈託のない家族が存在していたことに感銘したことがある。

根岸川柳は、家庭的には不遇で、東京では虚六や山村祐のお二人の心のこもる援助がなかったら、ことに神山家の一家をあけての親身の歓待がなかったら、八十九歳の天寿を全うすることはおそらくできなかったことであらうと思われる。

昭和44年ごろ、根岸川柳が病いの床にいたときのことである。生来、赤ん坊がそのまま老人になってしまったような一面をもつ根岸川柳は、

「虚六の家で静養したい」と門下生たちをよく困らせたことだ。

虚六居で久しく厄介になり、約束の期限を満喫した翁が、息子の迎えをうけて今市を離れる際の、なんとも痛ましいほどの悲しみにみちた眼を今も私は忘れない。

傘寿を越えた虚六氏は、市内の高齢者たちに川柳教室をひらき、文字通り最後の「泰公

であった。初老の頃の肺気腫がわざわいして時折り入院をされていたが、東京川柳会の長老であり、常任選者であった虚六氏から届く選句が、急に字が乱れはじめたのを心配していたが、初めに述べたように、平成6年5月に他界されたのである。享年八十三歳であった。

遺作（あしあとの抜粋）

落日を背に美しい嘘を言う

虚六

絶景へフト失恋が生きてくる

薄化粧妻も女をとり戻し

歩きつづけて―正月であった（以下略）

この上は何を望もう子と孫と

戦後三十二年ごろより、今市虚六居で、毎月句会を宇都宮、鹿沼はじめ地元今市の若い人を集め、「川柳かっぱの巣」と名付け、根岸川柳直伝の川柳指導を熱心に行った。この頃根岸川柳の今市通いは頻繁で、大体、今市に入ると二週間は虚六居で滞在したものだそうである。

この会の草分けは、昭和15年頃の現役除隊後、虚六は世田ヶ谷の太子堂に住み、毎月一回「寄ろう会」なる会名で、川柳仲間とすきやき会を持ち回りではじめた頃からだ、と虚六の愛子未亡人は懐かしく回顧するのである。この愛子未亡人は、栃木市の開業医で東大

出の博士の五番目の長女の由。昭和12年3月人あつて虚六と見合いののち、十か月の婚前交渉の末、その年の十二月に結婚。その頃の虚六は、東京府庁のお役人で羽振りもよく、根岸川柳の実弟である石川建設局長の部下として、都市計画の商店街の発展等に腐心している少壮官吏の姿が、愛子未亡人のハートを捉えたものらしい。二人の間に二男一女がある。

泣き居ては駄目だと亡夫の声のして

生きゆく日々のプランをするす

のうたに添えて、天国へ行ったその歳の新年、

虚六もこんなうたを作っている。

携えて八十路の坂を越えて来ぬ

新しき道また開けたり

虚六

「つつがなく明けて八十三の春

虚六

初日の出明るくあけて今朝の春

追悼記に雅句を並べることはいささかの戸

惑いがあるが、東京川柳会の歴史とともに歩いて来られた虚六先輩の、いうにいいない古

淡な人生哲学を、あらためていま見詰め直したい気持ちで、雅句引用をお許し願いたい」

（志茂二郎悼文）

▼次号は「中島繁太郎」

柳籠裏三篇研究 (二十五〜二十六丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人
八木敬一・七久保博・岩田秀行
紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

335 御入部に柄杓を持ツとしかられる 素鳥

佐藤 御入部は、大名が参勤交代で江戸から御国へ帰ることをいうが、これに便乗してお伊勢参りをくわだてる丁稚小僧があった。行列にまぎれこんで雑用をつとめ、ロハ旅行をしようとする手合いで、あからさまに柄杓など持参して大名行列に参加すれば、その下心が分かるわけで、足軽のお頭あたりから叱り飛ばされることになるであらう。しかし、例句などを見ても分かるように、多くは大名に見てくれたようでもある。

柄杓おつ取り御入部の跡へつき 第四十

御入部に御用四五人ちくてんし 明四義 4

旅は道つれ大名とたるひろひ 一六 16

柄杓おつとり大名に付て行 二七 9

八木 叱つてゐるのは小僧の主人筋ではないかと思ふ。抜参りにヒシヤクを持って行つた事は、「宝曆現来集」「兎園小説拾遺」等に見える。

岩田 賛、「膝栗毛」後編にも、「柄杓をふつてもおいせさままでいつてこにやアげえぶんざわりい」とある。

仕合じや・ひさくのへらぬ抜ヶ参

宝十二 3

鈴木 その風俗「不斗おもひ立旅の空、柄杓持手もいはけなく菅笠にぶつ、け書の、文字黒々たるしるしは、いはねと抜参りの有さまや宣也……」（俳諧古文庫坤之巻）。

岡田 行列のうしろに付いていったのです。

336 草履かくしを女房するふとゞきさ 芹丈

佐藤 「草履隠し」は子供の遊戯であるが、主題句は問男を上げて、履物を玄関口に置かず隠すことを言つたものらしい。まことに「不届至極」ということになる。

昔、玉の井や亀戸の私娼窟では、履物を持つて二階へ上つたもので、これも突然の臨検をのがれる苦肉の策であつた。

岩田 賛、「草履隠し」の句。

子供にも草履隠しを儒者させず 二二 22 甲

鈴木・岡田 同。

337 両の手を草へつかえてばつた逃ヶ 五鳥

佐藤 そのままの句。

おさへればすすきはなせばきりきりす

五 13

鈴木・岡田 賛。

二十六丁

338 新造にもつともで無いどらを打 高砂

八木 川柳における新造は、次の場合が主である。

①老人を相手にした。

どうもよくすると隠居の大はまり 拾七
新造の袖死金に疵をつけ 拾七

②姉女郎の「名代」。この場合、その新造とは本番は出来ない規則であつた。

名代はぜんたいさせていい理屈 五

聞えぬは名代がおんなじ値段 一九

主題句は①・②どちらであらうか。おそらく①の場合であらう。①ならば、老人が新造にはまった場合である。老人のくせに孫みたいな新造にはまるから、「もつともでない」といふのである。

七久保「礎稿①」に賛。ただし、中七の「もつともでない」の語に不安を感じる。

新造と老人の取り合わせは川柳の常套手段であるから、それから推量するに、老人が孫のような新造を有り金はたいて請け出した場合ではないか？

岩田「同じく①に賛。『どらを打つ』などというのは、向うみずの若者のすることであるのに、分別盛りをも通り返した老人が『どらを打つ』のは、『もつともでない』というのである。

岡田「もちろん老人説でも通るが、あるいは若い者かも知れぬ。特技も知らぬ新造より

は、特技の巧みなオイランの方を好むのが一般なのに……。

339 丸綿のひざへだかれるいちらしき 五鳥

八木「丸綿」は婚礼の際花嫁のかぶる綿帽子と考えてよい。①コブ付きの嫁入り、あるいは②新郎の方に子があつて再婚する場合が考えられるが、コブ付きの方であらう。

岩田「八木氏①に賛。

西原「礎稿①説賛。『いちらしき』の川柳語としては、『かわいい+かわいそ』の同情する意味がより強いように思ふ。

青木「膝に抱かれる」と言う措辞から、諸説とは反対の夫の連子と見たい。即ち、

南無女房乳を飲ませに化けて来ひ 拾三
の如く、妻に先立たれて乳飲み子を残された男、世話する人があつて迎えた後妻、乳飲み子のあるのを万々承知で、今日の晴れの婚礼となり、綿帽子のまま、その子を膝に抱いたが、この母と子、血のつながりのない継母と継子である。無心な顔を見るにつけても、周囲の人々にとっては『いちらしい』のである。

佐藤「①説。連子しての嫁入り説に賛。幼児の様子がいじらしいのであらう。

泣子にハカたれず丸綿でのませ 富一 35

色直しだにだつこしやう／＼ 傍一 7

色直し前に一口乳をのませ 一六 2

こんれいのばんうちいこう／＼ 安七 鶴 4

丸綿でち、をのませるきのとくさ

安六 智 2

鈴木「佐藤兄の類句によつて①説が妥当。

岡田「『いちらしき』の表現から、小生は青木君のように②説の方に解していた。

新日川協常任幹事

全日本川柳協会の新常任幹事がこのほど決まつた。川柳塔社関係は次の十一人。

小出智子・川島諷云児・田中正坊・奥田みつ子・小林由多香・恒松町紅・奥谷弘朗・月原宵明・二宗吟平・西田柳宏子・野村太茂津

ときせん賞決まる

時の川柳社の「ときせん賞」の入賞者が決定した。順位・氏名・得点は次のとおり。

①河島いち子(12) ②三宅保州(11) ③射場昭一(8) ④中原諷人・和田恭子・金井矩子・大野蒼流(7) ⑤船崎通子・柳生みち子

北村紅絵(6)

秀句鑑賞

同人吟林 荒介

— 4月号から

いい顔で次の電車を待っている

田中透太

鷹揚に待っていれば電車は必ずやって来るし、その電車が意に適わねば氣に入る電車が来るまで待てばよい。何もそんなに急いでぎゅうぎゅう詰め電車に乗ることはない。誰

にも電車はやって来る。いい顔をしてゆつたりと暮らしても、怒っていても必ずやって来る電車。いい顔で暮らすのに越したことはない。あなたもわたくしも。

守護神も一緒に山を売る話

山本玉恵

これは山の本を売るのではなくて、山ごとごとり売のお話。先祖から受け継ぎ私たちを見守ってくださったお山。何代にも渡って植林を繰り返したお山。代々の心の拠り所で、朝に夕に祈りつづけたお山を売ってしまった。心、心の拠り所がなくなってしまう。パブルは弾けても日本列島は開発が続いている。山は削られて埋め立てに、ゴルフ場に、宅地に変えられている。何処かで歯止めを掛けなければ根無し草になってしまう。

震災の神戸では住民不在のまま新しい都市計画案が審議会を通過した。大好きな神戸だったが、どうなるのか心配だ。みんなが心の拠り所を大切にして暮らしたい。

追いつめた所に立ててある梯子

小池 しげお

素直に読めば、折角追い詰めたのに梯子で逃げられた。となるが、追い詰められているのは他人ではなく、作者自身と読ませて頂いた。とことん自分を追い詰めた所で句が生まれる。人間は弱いもの、自分で自分に鞭を打たねば誰も味方はしてくれぬ。自分を見据え続けられ、壁にも抜け穴があり梯子もある。梯子で一つの壁を越された作者。

広口の瓶で重宝されている

寺沢 みどり

広口の瓶がいい、包容力があつて出し入れも簡単。何でも中に入れられるし、何を入れたも不満も聞かせない。何方からも重宝されている瓶。優しくて明るい頼り甲斐のある作者。

人間こうなりたものだ。お陰さまで生か

されている世の中、少しでも人さまのお役に立たなければ世間さまに申し訳が立たない。頂いたり差し上げたりの人間の暮らし。

津山市の公募作品、第二回西東三鬼賞の受賞作品には次の句が発表された。

航空母艦 稲妻のたび横たわる 本多 脩

秀逸十句の中に

紅生萎むかしはなしのみな貧し

大焚火どのでのひらもわれに向き

兵たりし日の耳となる遠花火

これらの作品は俳句の場で発表されたから

俳句、川柳の場で発表されれば川柳で通る。

同じ十七音字で構成され「念」を語れば川柳

も俳句も相違点はないようだ。

木枯らしの音空缶となり転ぶ

これも秀逸十句の中の作品、どの作品も難

しい言葉は無くして平明。稲妻は空爆の閃光に

連なり余韻がある。そして、言葉選びも慎重

で無駄がない。今月号を通して感じたのだが

が言い過ぎ、書き過ぎが多いように思った。

説明が過ぎると読者の立ち入る余地がない

から、説明をし過ぎて答えまで出さないで欲

しい。何をどう詠むか難しいことだが、何時

も自問自答の十七音字。

目に角を立てるとものが歪みだす

米田 幸子

何事につけても平常心が大事。平常心でなければ価値判断を誤る。見ると言う文字にも観る、診る、眇る等々色々の「みる」がある。たまには、斜に、横から、裏返しての観察も大事。角を立てずに暮らすのも気が疲れるが歪な絵の中では人間関係も不協和音になる。

頑張って行かねば山は登れない

岸 桂子

目では一瞥できる山も登るとなると大変。昨年カタクリの花を見たくて中国山地の船通山に登った。登山口までは車で行けるが、そこから人と擦れ違わないような急な山道を一時間半、頂上近くの道端から低い灌木の間にカタクリの花が咲いている。頂上には八岐大蛇を退治した、天叢雲剣を模したモニュメントが建てられていて、あたり一面カタクリの花のお花畑。一時間半の汗のお陰で花にも会えた。座しては絶対、山には登れない。

書齋も同じ、折角お金を出して買った本も積読や枕では自分のものにはならぬ。頑張つての人生。川柳も一緒。机に向かって居るだけでは駄目で、肌合いの違う句会にも足を運び、自分との違いを確かめ、違った目で自分を見直す。そこで新しい自分に出会える。

地震には耐えた我が家が焼け落ちる

木村 貴代子

テレビに釘付けにされた二日間。今年も神戸で米子での再会を約束したお方も亡くなられた。小さな額に入れた去年の写真が机の上にある。現地のお方の話ではテレビや画報の比では無いとのこと。テレビでも大変だったのにそれ以上の惨状とは。好きな街で毎年二回三回と出掛けていた神戸だったのに、二日目になってもまた火事が起こった。

折角地震でも崩れなかった家が目の前で焼け落ちる。阪神では地震がないと思っていたから、米子でも震度3の揺れがあったが神戸からの余震とは思ひもしなかった。六時前にテレビのスイッチを入れたらあの惨状。ローソンの残っている家が焼ける。怒りの持つて行き場も無い。罹災された知人も沢山ある。

わらべ唄 雪のいのちを掌に受ける

吉岡 美房

豪雪地帯ではこの句は作れない。まれに見る雪は淡く優しくて美しい、掌に受けた雪は瞬く間に解けて儚い。はかないものに對する無常観。侘び、寂びに通じ宗教にも通じる。雪国で生まれ育った私は、子供のころコートに付いた雪の結晶を比べたりしながら、雪の解けてゆくまで眺めていた。

飯茶碗ぽつんぽつんとあり 家族

田中 薫

飯茶碗と家族は類想の作品が沢山あるが、「ぽつんぽつん」は作者の発見。使い古された飯茶碗と家族でも「ぽつんぽつん」で改めて飯茶碗が生きてくる。食卓にぽつんぽつんと有る食器にはベールソスがあるし、会話の少ない家族像が浮かんでくる。これが現代の家族像かもしれないが、親と子との会話、妻と夫との会話が気になる。ぽつんぽつんと有る茶碗から育つ日本は大丈夫だろうか。

ラップして会話が乾かないように

榎原 公子

身に沁みたお話は心の糧、仲間同士の暖かい会話は潤滑油。何時までも乾かないように大事にしたい。風化させたい嫌な話も耳に届くが、ラップにくるんだお話は多いほど心が豊かになる。透明なラップは何時でも取り出して見ることもできるし、踏きそふな時に取り出せば道も教えてくれる。

人間は様々な出会いを繰り返して生きていく。茶房でも旅の隣同士でも、些細な会話の中から今まで気が付かなかった事を教えられ。お陰さまの人生だから、ぽつんぽつんと暮らさないで、饒舌に過ぎない程度の会話の中で暮らしていきたい。



高杉鬼遊選

言葉空転 胸中の余震

西宮市 牧 洲 富喜子

暗転の舞台となった古い家

為すべきは何かと声を出して見る

半壊の柱けなげに立っている

同情の嵐の中で胃が痛む

尼崎市 田 辺 鹿 太

行く末を想い妻には負けておく

転んでも起きても街は笑わない

慈悲深い父で水虫飼っている

この町で暮らそう風が温いから

運動の量が足らない古時計

名古屋 藤 井 高 子

そよ風のノックに弱い胸のドア

生きてます五月の空の真ン下で

人と言う形の脆さ逞ましき

呉越同舟 敵も味方もパスを待つ

心足る日故に鏡晴れてくる

クロスワードパズルのような瞳が迫る

小便をちびりながらに従いてくる

これも罪かコンデンスドミルク舐めた舌

冬の陽と包丁を研いでいる老女

向う岸へ この世の影が伸びてゆく

徳島県 安 宅 美代子

皿一枚割らぬ嫁だが肩がこり

お互いに裏目を底い合う絆

泣くほどの種も仕掛けもない夫婦

ふところに吾が身を責めるムチを抱く

汚染源絶えず地球が枯れてゆく

沖縄県 杉 谷 一 栄

貯金箱一ぱいにするのが夢

独りなら南瓜だけで足る夕餉

かたくなに一人はずれる羽根ぶとん

使わずに済んで消火器有難い

パチンコの食わず嫌いもあっていい

豊中市 石川 勝

お金など貯めているから不眠症
きざみ葱 生涯主役にはなれぬ
どうせこの世は加害者か被害者か
春の酒 上手な嘘に聞き惚れる
難聴の母は笑顔を絶やさない

唐津市 山口 ふさ子

生きてます金も栄誉もないけれど
両親を亡くした子にも春は来る
段々とうとうっかりが多くなり
愛するに資格免許など要らず
鳥達の唄う声にも花粉症

摂津市 木下 道子

額の絵が傾いたまま春立ちぬ
被災地のどなたに似合う帽子編む
義援金めぐる争い悲しすぎ
猫柳ほどの希望をふくらます
軌道修正うしろは見ないことにする

八尾市 村上 剛治

はじめから反省会は飲むつもり
黒白をつけない方があたたかい
失敗もいつかくすりになっている
調子よい返事がちよっと気にかかる
ありがとうその一言が嬉しくて

藤井寺市 高田 美代子

桁ひとつ消したら此の世住みやすし
あしたへと続くドラマがまださむい
集団へ逃げこむ千羽鶴のクビ
売れない詩 書いてたいたいま花粉症
死ぬときのこと時々かんがえる

和泉市 中川 楓

原発反対 ひかり号には乗ってます
針仕事 母娘そろって死語にする
もてなしは一つ覚えのちらし寿し
メインよりサラダが大事かすみ草
こんな事で皆会うなんてお葬式

今治市 渡辺 南奉

入院の妻へは内緒 加持祈祷
決断の遅れを知っている財布
電話とは凶器 昼夜をいとわない
影法師こらこら背なが曲がってる
新郎と握手ふるえてならぬ父

伊丹市 桧谷 郁子

人形と本が雨ふる闇の中
揺れる揺れる恐怖の時間揺れやまず
避難所で貰ったパンと夜を明かす
只今と帰る我が家も今や無し
住み慣れた家に暇を老い二人

倉吉市 松本 よしえ

白足袋を濡らしてからは躊躇わぬ
不倫した噂なんかに驚かぬ

噂にもならぬ二人でつまらない
騙す気は無い風船が割れただけ
コーヒーで黄門さんが出番待つ

鳥取県 山本 正光

講演を聞くと欠伸がでてこまる
自画像に真つ赤な服を着せておく
妻入院約束ごとを溜めたまま
ばたばたと妻の動作に似てきた娘
たつぷりと時間あるのに急ぐくせ

鳥取県 岩崎 みさ江

手綱持つ夫がいるから跳ねられる
待つ人がいるしあわせな急ぎ足
人生に無駄でなかった回り道
縄電車 母は一人で降りて行く
蜘蛛の糸しっかり母を頼みます

宿毛市 岡村 千鳥

甘い科白で風はわたしを抱きにくる
福は内 嫁も孫等もみんな福
娘はみんな勝気で尻に敷くタイプ
読み書きは拔群 妻の掃除下手
惚れぐすり飲んでも一度若がえる

神戸市 高東 宏

地震国なのに地震に脆かった
震災の安否気づかうベルしきり
なお余震 軒のすずめも息ひそめ
紙一重 神の恵みで生かされる

和歌山市 古久保 和子

水族館 命冥加な鰻の群
通夜の席 私も靴を間違える
脳波には異状はないが春の鬱
聞き届けられないほどの絵馬の数

久留米市 鶴久 百万両

井戸水が浅くて魔女に溺れそう
寝たふりの男へ魔女が油断する
老後への暮らしに土塁盛りあげる
深い眠りにつくまで恋の詩を書こう

鳥取市 山宮 愛恵

過去は過去すっかり君のとりこです
受けとめて絡み合う世の糸をとく
見直しの計算 城が遠ざかる
河豚提灯バンクするほど笑っている

尼崎市 軸丸 勝巳

リーダーの髭 貫禄の震災地
瓦礫の街を何も知らない陽が昇る
ふとん叩く音にも怯え地震あと
啓蟄や地虫と地震語らんか

尼崎市 岩 倉 キク子

春風がそつと耳うちして通る

幸運もあいそつかして寄りつかず

チャブチャブタイムですよと孫が呼びに来る

かたい事言わず此処らで四捨五入

和歌山市 木 村 親 路

死んだことないから死んだ気になれず

子供より親がくわしい受験校

平成の吉宗公よ出て欲しい

いいことがないがどうにか生きてます

今治市 村 上 久美子

長生きしそう仏心にまだ遠い

深迫いはよそう私を見失う

かくれんぼバカ正直は鬼の方

職退いてプツリ誘いの糸も切れ

河内長野市 大 西 文 次

長旅の疲れで川は蛇行する

ぎしぎしと身体の部品軋み出し

敬語などいらぬ長屋で住みやすい

雪見酒 雪がやんでも飲んでいる

寝屋川市 籠 島 恵 子

無造作に息子を跨ぐ四畳半

鬼よりも一足早く帰つとく

どの人に電話しようか菜種つゆ

百度石 人の願いで丸くなり

熊本県 高 野 宵 草

一病息災 叱ってくれる医師が居る

世話づかれ孫と一緒に寝てしまふ

旅行する暇が出来たら病氣する

日向ぼこ蠅よお前も人恋し

羽曳野市 西 村 りつえ

花よりもスターの店の嵐山

やんわりと言われきくつとして帰り

着上手な亡母には勝てぬ縞紬

残り糸繋ぎいつまでも亡母と

海南市 谷 口 義 男

苦勞して育てた息子別居する

遺産など残さぬ主義の死の美学

上を見て諦め下見 我慢する

抜け道を作つて置いた法の網

八尾市 平 川 幸 枝

歯も友も欠けて反省ひとしきり

母が逝き無償の愛に悔いのこる

太い綱 結び目ゆるく老夫婦

どこからか酢を切る匂 春彼岸

秋田県 湊 修 水

何よりも住居が欲しい血のさけび

二十年昔に戻り娘とくらす

娘よ婿よいかいお世話になります

罹災者にすまんすまんと湯につかる

高槻市 芦田 静江

殉教の町に羽ばたく風見鶏

めのかラフル魔除け信じて生かされる

齡聞かれ喜寿と一歳意地を張る

四天王 愛の炎の依怙鼎眞

愛媛県 中居 善信

うまいもの食うたか口を拭いている

女ひとりになると神霊信じ切る

Uターン大阪弁が抜けきれぬ

人間がどう進化する全自動

八尾市 村上 ミツ子

ねたふりをして聞える妻のぐち

都合あり老母を病気にしてしまふ

風の子はなくブランコがただ揺れる

テント村咲いた桜に救われる

佐賀市 古川 かずのり

味噌汁の具もだんだんに春になる

休め遊べ仕事の鬼が疎まれる

單身赴任 妻がときどきテストする

記憶力抜群 妻が釘を刺す

静岡市 佐藤 次枝

期待したそれほどにない遺産わけ

誘われるうちが花だと無理をする

すれ違ふサイレン留守が気にかかる
被災地に春よ来い早く来い

鳥取市 杉本 孝男

古い傷力むと痛み走り出す

打明けてからはビクビクしなくなる

輪の中に味方のような敵もいる

政界へ進むか腰が低くなる

静岡市 大村 正雄

洋画展お値段だけを見て通り

店長がまごまごしてる下手なレジ

手ぶらでは行けず一日延ばしする

貧しくも明るい妻の片えくぼ

堺市 宮本 かりん

まだ慣れぬ風にふるえている新芽

夢枕の亡母に詫びたい花手桶

自信たっぷり答えて恥をかいている

募金箱善人面をして入れる

檀原市 西本 保夫

やましさが無いから話す未亡人

安っぽく見られる訳はすぐに詫び

賞状の額も今では邪魔になる

正直に言う誰にも憎まれる

香川県 山崎 はつ恵

ワンランク落とせば楽になる呼吸

鼻づまりシャネル5番と言われても

表彰の以下同文が並ぶ席
ここまでと線を引くのがむずかしい

富田林市

欄

智久

藤井寺市

楠

昭子

女の業ポックリ寺へ今日も行き

ライバルの狙うところは同じ椅子

まだ嫁に行かぬつもりかよく肥える

いつもより早く帰れば氣遣われ

大阪府

原

美恵子

和歌山市

津

村武春

懐中電灯リユックも買ったあの日から

警察で咲いても桜ピンク色

骨粗鬆症恐くて牛乳のんでいる

春本番へまだ風邪引きが治らない

吹田市

西岡

豊

米子市

木

村春江

料亭で盛りあがってる忌明け席

妥協なきビデオに我が身論される

好きやねん駄菓子のようなお人です

夕闇に主婦脱ぎ捨てて蝶となる

高槻市

庄

野

澄子

犬山市

早

川盛夫

毒と薬 背中合わせの中で生き

芍薬でも牡丹でもない我が姿

鬼も蛇も菩薩も抱いて私です

ひと仕事終わったあとの無職です

富山市

島

ひかる

羽曳野市

芦

田絢子

かくし味 余った酒が利いている

大好きな人へ移った風邪の熱

牛乳を飲めよ飲んだか息子に言われ

ヨーロッパ 本でひと足先の旅

ぜいたくな猫で困るという自慢
そうかそうかと猫の話を聞いてやり
料理上手な夫へ離婚など言えず
お世辞よりずばりが後で効いてくる
怖いもの今年もやはり地震だな
遣された同士で苦い酒を酌む
過労死に出世の欲がなかったか
リストラが家庭の平和おびやかす
大震災 早速家具を置き変える
昼の耳いやな噂の中にいる
翔び過ぎて着地点さえ見当らぬ
艶ばなしきらりと光る他人の目
出稼ぎの男を泣かすきりたんぼ
いつきても男ばかりの混浴場
跨がれて夫婦というは恐ろしき
ゴング鳴る相手を倒す他はない
自問自答で合格点をつけておく
一人居の私の部屋は無菌室
空っぽの瓶から嘘がこぼれ出す
世が変る私も少しずつ変る

今治市 渡邊 伊津志

楳の火の灰がふわりと舞いおさめ

陽が沈み海は無限の空を抱く

焦るまい一刻待てば潮が満ち

酸欠の海に面舵ままならぬ

羽曳野市 安芸田 泰子

落花舞うこの葛藤に身をゆだね

真実が少しほやけた水鏡

早起きをして一日をどう暮す

若やいで見せたが腰が痛み出す

仙台市 小寺 九

結論は政治のせいにしておこう

単身赴任とどん増える電話代

新聞に名前のるほど悪じやない

単身はつらいと妻に言っておく

柏市 上鈴木 春枝

達筆の署名離婚の届です

どん底と思えば気楽もう落ちぬ

重荷ですそんなひたむきすぎる愛

香水の一滴 今日逢えそう

宇部市 中村 三良

影法師あらぬとこまで行きたがり

頼りない父だが居ないよりはまし

黄水仙のやさしさ今日も良い天気

筋だけを通して後は昼の酒

西宮市 古谷 ひろ子

瓦礫にも端然と座す鬼瓦

庶民の夢食って太ったジャンボクジ

うちの駄馬 他人のムチに走り出し

駆けっこはビリだが孫は人気者

尼崎市 的場 十四郎

一声で嫁と姑の溝が解け

今ここに僕が座っている奇跡

チラシから春の流行走りだす

救う神ありて幸せ生きている

米子市 堀江 美月

海亀の泪 晴らしてくれる沖

落着いて座れば解ける結び玉

海に向う旅にドラマが生まれそう

蝶も来て野の花々も喋り出す

大阪市 松永 会美

今月のラッキーカーにつけてみる

被災地の友の背中が丸くなり

めし食おうという人居ない遅い膳

マンシヨンの谷間に泳ぐ鯉のぼり

茨木市 久保田 恵美子

夢中から醒めて詮ないことを知る

出不精のいつも気になる垣の外

自分史をアツハアツハと振り返る

猫の恋 丈余の柵を飛び越える

出雲市 原 章 峰

蟹の泡 嘘は上手に言えぬもの

哀しいことが正面を離れない

源流は父の匂のするところ

鹿児島県 大 山 舞鳥影

軍神とシベリアの死とどう違う

定年で素直に伸びる足の爪

注射点滴 血液型が気にかかる

静岡市 三 浦 つ ね

飽食で猫のヒゲなど役立たず

復興へ身なり構わず髭が伸び

寒い朝元気に回る洗濯機

静岡市 沢 田 き ん

誘われてみたい若さが欲しくなる

嘘を吐く心はきつと辛かろう

嫁姑どこにでもある立ち話

静岡市 永 倉 柳 華

好きだから喧嘩も出来る夫婦仲

健康に分かっていても食べられず

柔らかい日差しへ芽吹く春の色

静岡市 小 木 久 子

役人に収賄と言う落し穴

聞いて欲しくて誘いの水を向けている

被災地へ若い奉仕がすばらしい

静岡市 片 平 静 代

歳月の早き喜寿とは恐れ入り

喜寿傘寿無口になつて老いてゆく

桜咲く化粧も服も春の彩

摂津市 井 上 源 一

ドル沈下 住み慣らされる深海魚

無農薬食つて胃カメラ飲まされる

死は夢か生は夢かで眠れない

茨木市 島 元 ふ み

お勤めのように律義に興味の会

老い二人燃え立つこともない灯

黙つてると きずつないからしゃべり出す

宝塚市 飯 西 ミサヲ

余震待つわけではないが着ぶくれて

これしきを飲み合える震災後

百円でごつう便利な物見つけ

新潟県 高 野 不 二

母の寿にあやかる酒を吞みすごし(母の米寿)

ダイエツト中と勝手な時に言う

百薬の長を信じて医者嫌い

河内長野市 印 藤 智 子

梅に来てまずご馳走を腹に入れ

週刊誌めくつて夫の手術まつ

考えが天地の違いでも夫婦

鳴門市 八木芳水

静岡市 松下正枝

口外はしないが燃えるものがある
死に金になって仕舞った接待費

弱音など吐くまい大地掘れば春

大阪市 今西静子

りんご旨いと言うたあなたはもういない
年金のくらしも結構忙しい

ヒューズとんで暗がりだから寝るとする

羽曳野市 麻野幽玄

声掛けて悪かったかな連れが居た

一日の差を見せバラの芽が動く

カーテンを引き病室の夜とする

豊中市 岸田知香子

雪の寺 廊下素足の修行僧

フルムーン永平寺そば春遠く

トンネルを出れば雪 雪 北陸道

鳥取市 岸本宏章

えこひいきいじめの卵かもしれぬ

食管を離れる米が迷いだす

流しびなすつかり町の顔になり(鳥取県用瀬町)

和歌山市 杉山精子

深呼吸 煙樹ヶ浜に春の風

救われた生命の重さ荷の重さ

何年も気付かなかったれんげ草

期待した孫は未だにフリーター

風邪癒えて橙風呂の香にひたる

生きているうちに行こうと誘われる

大阪市 三浦千津子

日向ぼこ問わず語りが長くなり

厳しくも手加減もして子が育ち

美しい嘘にしばらく酔うてみる

和歌山市 森口美羽

親しくていつもおこられ役でいる

言い負けておこう本音はいい彼女

おだてられつい乗せられる軽い腰

熊本市 遠山夏生

温泉町ここが最後の赴任地か

杖はまだいらぬと万歩計がいう

昨年を思えば梅雨よもつと降れ

熊本市 大川幸子

しびれ切らすほどでもないにクラクション

回り椅子一度は掛けてみたい椅子

そうですかですねで納得済みにされ

犬山市 城山道子

いろいろとあつた過去ともグッドバイ

翔べるだけ翔んだ女の見合席

テーブルにたまたま寄ったジュース党

枚方市 前 たもつ

駐場ないがわが家は突き当り

断りもなく「海の日」になる誕生日

偏差値の身につまされる棒グラフ

香川県 田 中 ふみ

他人事と言えず気になる朝の夢

日溜りで愚痴がグツグツ煮えている

留守居してあちこち電話かけてます

広島市 流 奈美子

流行に少し遅れて風邪をひき

二泊三日の人間ドックで得る悟り

美しい涙だきりり光るだけ

舞鶴市 森 本 芳 月

残像の祈りが届く火の祭

一回転すればその気になる男

錆ついた大工道具の一人言

鳥取市 谷 口 侑 里

弱者には弱者の主張譲れない

隠しても積もる想いは顔に出る

待っている私に出席やってこぬ

大阪市 一 本 勇 太

女対おんな黙って見ていよう

処世術ときに音痴の真似もする

古きよき昔を言って何になる

鳥取県 原 みさを

自分史に妻が朱筆を入れたがる

CM付葉書で用の足りる仲

古い葉がじやまして若い芽が伸びぬ

大阪府 尾 崎 黄 紅

馬の背に復員以来乗ってない

呑み過ぎた財布を月に覗かれる

九分九厘任せなさいという手術

島根県 三 代 朝 子

気に入った服を迷うて買いそびれ

野良犬がゆきつもどりつ寒い朝

頼られてあれこれ忙しまた楽し

高槻市 傍 島 克 治

図にのって受けた頼みをもて余す

お仕着せの服嫌と言う齡となり

祈祷料はずめば効目あるやろか

枚方市 森 本 節 子

耳ふさぐことにも慣れた年の功

只今のつぎには犬の機嫌さく

引出しの奥で眠っている免状

岡山市 大 石 あすなろ

夢ひそと抱いてひと日の沙羅双樹

とある日の本音が風とにげてゆく

人情も乗せてゆきます無人駅

嫁がきて朝の挨拶思いだす
米子市 小 塩 智加恵

光る孫 光らぬ孫も数のうち
うれしいと一人笑いをしてみよう

札幌市 三 浦 強 一

富士山を借景にしてはいチーズ

Q アンドA ベティ ジャックも老いました

定年の蟻一抜けるかごめの輪

和歌山市 吉 村 さち子

しくじりを一人で笑い飢えている

柔らかな曲が癒さす齒の治療

さくさくと大根切れる嬉しい日

寝屋川市 後 藤 黎之助

義援金ちよつと気持を軽くする

あれ以来隣近所と立話

元旦の計は地震がもってゆき

和歌山市 木 村 初 子

海鳴りを聞いてまばたく岬の灯

お駄賃はいらぬと孫が肩叩く

ファミコンに棚上げされた童話本

鳥取市 田 中 友 子

妻忘れ女で座るカウンター

大空に向かい涙を押し戻す

お留守番時計の針が牛歩する

四捨五入わたしを四と見たらしい
綾部市 藤 田 芳 郎

伯父さんが来ると進軍ラッパ吹く

放つとけば治ると 痛いのは私

八尾市 井 上 しのぶ

反省がちつとも生きてない夫

たんこぶの一つが今もまだ痛む

守ろうと思った人に守られる

豊中市 上 田 圭津子

幸せを焼き尽したか地獄の火

忘れず思い出したいくない恐さ

生かされていると身にしむ大地震

伊丹市 小 熊 江 美

新しくなって不便になった駅

ごはん粒こぼす私を孫が見る

嫌な事言う占いを信じない

大阪市 池 田 一 男

飼い馴らした心の虎が死んでいる

糞虫の寂しさわかる歳になる

老醜の足音 蟄に影がない

芦別市 斎 藤 房 子

月一度 誌上で友とデートする

淋しくて茜の雲を敷いて寝る

相応のくらしを煮込むひとつ鍋

相生市 中塚礎石

嘘と嘘からみ合うてる両隣

役人の手で植えられた花の園

厚化粧したおばさんがパチンコ屋

今治市 塩路 よしみ

人間不信わたし砂漠のどまん中

好きですと言ったら罪になりますか

その先は言うまい明日は春祭り

尼崎市 長浜澄子

遠まわりする気になった炎の匂

木漏れ日が揺れ追憶の曇さがり

つい口が滑ってからの椅子のかたち

唐津市 浜本治幸

吸い過ぎに注意しながら飲むタバコ

老妻もグルメに凝りて肥りだす

診断も年のせいだといなされる

宝塚市 嵯峨根保子

磯ぶえの海女に五月の風ひかる

気分転換しゃれたフレーム買ってみる

白い歯が自慢で笑いぐせがつき

唐津市 福島紀一

寒椿ひとつり咲いて覗かれる

春はそこ入試の孫に寒の風

喜寿傘寿 夫婦並んで済みません

八尾市 生嶋ますみ

向う岸私を待つてる人がいる

ゆったりと姑らしく結ぶ帯

物忘れせぬよう回す指の先

西宮市 池田善守

単身赴任 鏡にいつも見送られ

スーパ一の帰りのように葉さげ

一寸先闇は政治と直下型

香川県 高橋たみ

びしょぬれで家についたら雨がやみ

水仙を選んだあなた好きになり

好きやねん遠いところから言うてくる

十和田市 阿部喜久江

味噌汁の香りで朝が動き出し

内幕を知らない人がさわざたて

謎なぞが解けないまま時間切れ

高槻市 江原秀夫

強烈な批評をかわす懐手

走り出す自分の影に身構える

山一つ越えて気ままな尾根歩き

高知県 百田幸

表には顔を出さない妻がいる

尻尾振る犬も相手が欲しいんだ

肩書が消えてスーツもあくびする

緑の遠い娘と二人暮してる
うつむいているが小骨のある男
蛇口から俵せが出るどつと出る

尼崎市 森 安 夢之助

最後尾ながら時流に乗ってゆく
雑念を捨ててきましたかつら橋
地に足が着いていないと落着かぬ

富田林市 藤 田 泰 子

黙った黙って妻が注いでくれ
おりこうとほめたは親のいる間
ひよつとこがいるからおかめ光り出す

旭川市 朝 倉 大 柏

避難所の凍てつく夜半を偲びつつ
満月に怒りと祈り果てしなく
今のいままで励まし合つて来た別れ

鳥取県 高 尾 京

病床でラジオの良さを妻は知り
初めての娘が見せる母子手帳
避難所の生活わが身を置いてみる

河内長野市 木 太 久 正 一

贅沢を先どりにして自己破産
蜘蛛の巣に習い絆を補強する
被災地の報道綺麗すぎないか

米子市 鹿 島 蘭

黄昏の瓦礫の中に生きて立つ
古希むかえ生命ひとしおいとおしむ
釘抜きがきかないほどに妻も錆び

尼崎市 松 下 弘

健康っていいなすつきり目が覚める
念入りに顔拭いている恋の猫
ちひろの絵に囲まれてみる昼の夢

河内長野市 橋 本 弘 美

語り合うお袋の味 七回忌

羽曳野市 酒 井 一 壺

この辺で一ぶくせよと足の怪我
松葉杖それほど楽なものでない

河内長野市 水 谷 笙 子

水あるでえ あのコマージュルほつとする
念入りに診察されてノイローゼ
水溜り越える勇気がまだ出ない

唐津市 山 門 幸 夫

プライバシー守る衝立避難先
信じよう空缶拾う人だから
越境の梅の枝たち有難う

唐津市 山 門 夕 美

一本の包丁ばかり可愛がり
落葉焼く煙は人につきまとい
晴着より普段着に替え軽い肩

高槻市 小林 一 閑
就職に太いパイプがあるじゃなし
避難所の寒さ堅さが痛ましい
二日分地震で薬飲み忘れ

静岡市 増 田 扶 美
栄転の鮑も躍る始発バス
バス揺れて娘の匂う長い髪
躓いた小石に老いを教えられ

堺 市 吉 本 菁 風
子育てで育てる方も育てられ
悠久の流れの色を人が変え（重慶にて）
初診者はあれもこれもと検査され

岡山市 福 原 悦 子
夢抱いたままの一生だったなあ
水底に民話一つが置きざりに
水割りも溶かす二人の愛だろう

大山市 田 中 太 音
電線が垂れるニュースが重すぎて
遠縁が越後から来て喪主となる
カサカサとまだ言っている父の骨

岡山市 土 居 ひでの
例えばの話の裏で風邪を引き
雑魚なりに春の陽気に迷い込み
園児みな春の音譜へ走り出す

大阪市 川 原 章 久
みぞおちに痛みが溜る瓦礫跡
回り椅子欲しさ根回し足回し
累々と屍に似た寺の墓

寝屋川市 森 茜
病む孫に逸る車窓へ富士は泰然
前ばかり見ている首が長くなり
自分だけ偉くなったと誤解する

日立市 加 藤 権 悟
逆境にたえた無冠の背が温い
真直ぐに歩いた父の墓洗う
影法師なんと淋しい貌なんだ

東京都 清 原 悦 子
ストレスが増えて食欲今日も増し
この話どこまでほんとワイドショー
スパゲッティおはしで食べる人が好き

高知県 桑 名 孝 雄
新旧の世紀を繋ぐ鯉のぼり
眠たいが永眠はまだご猶予を
拙速を尊べ俺の陽が沈む

和歌山県 中 村 君 枝
雲掴む話聞いている義理の席
挑戦へすぐに腰折るダイエット
失敗を笑い合ってる老夫婦

和歌山県 中 後 清 史

喝采の背なへ吹き矢が飛んでくる

肝心なところは小文字の契約書

パチンコで勝てるもんなら働かん

和歌山県 山 根 めぐみ

咲くいのち散るいのちあり円舞曲

過去の窓あけて愚かなひとり言

人を恋う白木蓮の花の精

姫路市 服 部 一 典

朝の来ぬ夜はないぞと励まされ

新緑をたっぷり吸って毒を吐く

敗戦が二度来たような大地震

米子市 永 井 三津子

寂しさに覚えた酒と別れたい

死にたいと狂う日々でも腹が減る

残業を終えて亡夫へ帰路の愚痴

尼崎市 立 谷 勇次郎

コーヒーは心とします黒い魔女

俺の子にしては息子が真面目すぎ

結果聞く医者の口元見る不安

姫路市 福 島 姫 女

忘れもの届けてマフラー置き忘れ

山茶花のくずれし籬掃きもせで

葱きざむ目の涙など夫知らず

寝屋川市 北 岡 波留吉

回らぬ舌で孫が諫める盗み酒

回り道すれば飲み屋があるのだが

甘い水求めて旅に出る螢

泉佐野市 内 田 倫 子

五十年ぶりに安否の電話くる

被災者を思えば苦勞何もない

思いきりわがままをして一人住む

富田林市 山 原 昭 水

雪舟や鉄斎の絵に酔っている

これが川だ 蛙 メダカが泳いでる

あのときに叩かれたのが良い薬

寝屋川市 宮 崎 菜 月

この春もイミテーションラブだった

金脈も人脈にも母ひとり

四畳半沈丁の香の通り抜け

兵庫県 西 井 つや子

最高の笑顔で朝の嫁姑

やじろべえ倅せ信じ揺れている

花生けて我が家すつかり春になる

鳥取県 山 内 芳 江

乗るまでは勇気がいった滑走路

鈍行に乗って長生き考える

焼く前に読み返してるラブレター

倉吉市 山中康子

春の陽にまどろむ気ままゆるされる

戻り道ときめく詩にやつと会う

B型に念を押しても知らん振り

岡山市 中嶋千恵子

つましい話は余所見ばかりする

すらすらと運ぶ話に含み針

平凡な妻の座明日の米を磨ぐ

大阪市 中橋恵美子

お雛様 男の孫に狙われる

ラジオ体操ソックス裏を穿いている

通帳を瘦せさせてゆく祝金

岡山市 福田辰江

飲めるだけ飲ませてやろうこのカルテ

おいと呼ぶ筈に温い風がある

親馬鹿が騙されてやる子の芝居

羽曳野市 徳山みつこ

ああしんど溜息きいた歩道橋

イヤリングきらきら元氣ぶらさげる

イエスノーこたえは五月風まかせ

富山県 高嶋五月

税金が戻りメロンを厚く切る

屋根裏の古い日記と小半日

敵のない男自慢ができますか

島根県 武島ちよえ

つくしん坊 袴を付けたまま生れ

申告へ年金気楽な顔で行く

どの芽にも語りかけたい春の土手

大阪市 勢理客 トミ子

カーネーション赤と信じている娘

雨の日のうつと向き合う黄水仙

何故と問うどうしてと問う震度七

大阪市 鈴木トヨ子

花薰り風まで花の色にする

遠く居て連翹の黄に母しのぶ

人生ツアー エンストばかりおこすなり

泉南市 坂根流水

病院の大部屋やはり主が居り

人の世は楽な往生難しい

病院の窓にも春の風があり

和歌山市 楠見章子

人生いろいろ歌うて気持ちひき立てる

アリバイに歩いて帰る駅ひとつ

お香焚いて軽い頭痛をやわらげる

羽曳野市 川田晋

定年の夫うるさくつきまとい

的を射た意見でいつも粋の外

姑達者 当てにしたいが今日も留守

松江市 浦 辺 静 江
やさしさが欲しくカーテン淡い色

お互いに小声を嫌う年となり
強がりですファイト燃やして見たものの

松江市 安 食 友 子

尼寺で護身の針は要りません

春よ来いわたしの鬱を上げるから

古い二人テレビにお守りされている

兵庫県 円 増 純 子

余震なお孫の怯えが治らない

わたしだけの抜け道がある小休止

一夜きり月下美人と月に濡れ

寝屋川市 太 田 藍 子

定年後のブラン女が元氣過ぎ

故郷の物産展に買い過ぎる

丁寧な電話そろそろ改選期

弘前市 今 生 恵 子

ハンドルを妻に任せて余所見する

人嫌いある日突然旅に出る

リストラの風に体よく追い出され

尼崎市 野 瀬 昌 子

消費税弱者はいつもおいとかれ

京巡りまだまだ生きる欲を持つ

地下街を方向音痴抜けられぬ

出雲市 浜 圭 三
流行風邪 彼岸までには治さねば
ボール抱く子を早春の風が抜け

境界を越えて芽を吹く猫柳

神戸市 向 井 泰 子

倒壊の家いたましやいたましや

鼻水をブランド物の袖で拭き

淡路瓦地震に耐えた亡母の家

尼崎市 吉 永 伊 三 郎

地震から夫婦の溝に橋が出来

酒タバコ小さな文字で二十歳から

走り書きの手帳に本音がちらり

松江市 松 本 知 恵 子

娘は遠く住めば都という電話

眠たからライトアップの樹木達

ぼんぼりの灯 女にあるように

島根県 松 本 聖 子

コンピューターにこだわり一日棒にふり

口数が多すぎますよ惜しい女

直線を歩けますかと医者言う

尼崎市 萩 原 し げ る

当てにした顔が出て来て安堵する

水仙のそ知らぬふうが時宜に合い

待ちかねた春の日ざしを歩に任す

千葉県 大川 晩翠
良いお店 困った時に安く売り

好い人は逝くまで人に気をつかい

高槻市 乙倉 武史

皆までは言わず酒をつぎに来る

頼られる内が花です頼られる

鳥取市 植田 一京

新聞と牛乳 朝に順があり

走るのは止めよう後はもう僅か

鳥取県 武田 照女

幸せは叱ってくれる人が居る

家族から実の福祉の芽が育つ

鳥取市 山口 しげる

末っ子へ兄全員の名が呼ばれ

X線に写らぬ胸の影ひとつ

島根県 安部 美恵女

せせらぎの小川の水も春の音

母さんと雛壇飾る孫娘

福岡県 本田 忠男

水涸れて隣に三日もらい風呂

約束を温めて一人日向ぼこ

出雲市 西尾 和子

歯切れ良く喋る友にはおくれがち

落椿 雪の白さを紅く染め

兵庫県 中野 とよ子
初出勤 心も萌えてベダル踏む

出来るなら願いを絵馬でかなえたい

酒田市 永澤 裕子

断りを言えず無い袖振る弱気

お若いと褒められてから軽い足

香川県 辻上 よしみ

振り向かぬ涙見れば負けになる

美人ではないけど笑顔自慢です

砂川市 武田 正美

円高の安いビールを飲まされる

父ちゃんが居るので老いも化粧する

兵庫県 倉垣 昌代

比較にはならないけれど節水す

最悪の年とも知らぬふきのとう

尼崎市 河津 正治

覗き見る春を余寒が邪魔をする

耐え忍び春を待つて福寿草

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ぼんやりとした灯の中のもの想い

恋う人の黒衣になってみたいもの

泉佐野市 河原崎 礼子

とれとれの若葉マークを見せたくて

被災地に行き交う肩の重々し

米子市 足立 由美子
考えが額あたりで立ち止まり
草も木も目覚めて春の景色なり

大阪市 乾 哲 静
ジョギングの汗をふきつつ寺もうで
そやさかい わてがあんたを好きな理由

熊本県 岩 切 康 子
思考力の低下を悩み手編する
あなただけ暗証番号教えとく

貝塚市 池 田 寿美子
反省をするたび鬼に笑われる
ガンバレと三途の川も平泳ぎ(前畑さん近く)

岡山県 国 米 きくゑ
嫁がせて話題ない老い春炬燵
初孫の部屋にやさしい音を吊る

鳥取市 近 藤 秋 星
雑草であつてもいとし春の草
なるようになる人生へ逆らわず

大和郡山市 榑 原 慧 心
子も二十歳 叱る言葉に綾がつく
偽ものも知らずとつてもお気に入り

島根県 菅 田 かつ子
ああ山河越す度ごとに白髪増え
残り火で芋がほくほく焼けてきた

堺市 志 田 千 代
紅を濃くひいて顔色かくす朝
猫の背と同じ形で退屈し

出雲市 園 山 かおる
無為無策 明日へ持ち越す爛さまし
水溜り引きずり込んだ千鳥足

堺市 谷 平 照
わたしまだ若いと思う会があり
かけめぐる恋も自由に句の世界

兵庫県 安 達 厚
道連れがよくて遠道してしまふ
この耳に聞こえぬことが多過ぎる

鳥取県 藤 山 弘 子
割引きのその上値切る主婦がいる
次々と花が咲き出す春が好き

枚方市 濱 田 良 知
入園式 母と女の顔がある
首タテに振らず本音を聞いておく

豊中市 藤 原 桂 子
子沢山今は昔の語りぐさ
退屈のひぎです孫を遊ばせる

米子市 服 部 朗 子
そっけない言葉に私かえりみる
お互いに助け合わねば老いの旅

島根県 福岡 博利

おめでとうだけではすまぬ子の新居
バレンタイン チョコチョココに攻められる

静岡市 中西 雅

新緑を見ずして遠い旅に出る
神渡りあるとは見えぬ湖の岸

羽曳野市 山本 たけし

被災地も春が来ましたランドセル
距離置いて見るから綺麗富士の山

交野市 山川 日出子

震災後防災頭巾枕元

うそ言つて旅に出たけど気は晴れず

和歌山市 和田 美寿子

ポケベルを買つてはみたが鳴りもせず
何となく出て行きたくて春の宵

豊中市 みき わきみ

戦争に地震に命冥加われ
世の中がどう変ろうと論語読む

熊本県 増田 一乗

人脈をたずねて孫の嫁さがし
春一番 棚の盆栽吹き落し

松江市 松浦 登志子

太ったな免許更新顔写真
下の子の卒業式に若づくり

寝屋川市 瀧本 八十八

よく遊びよく学ばずに無位無冠
お遊びのプロでピエロの太鼓持ち

兵庫県 森脇 和子

孫が来て笑い袋がはち切れる
笑う日を待っていたわるこぼれ種

和歌山県 村中 悦男

過去に生き愚痴に華咲く妻と居る
平凡に残る余生を送りたい

高槻市 執行 稲子

亡母花と名付けて偲ぶ肥後椿
窓際の椅子なぐさめのばら一輪

東大阪府 松山 隆

椿火まだ灰にはならず火種です
報恩へしぼった義理の証です

島根県 今川 三津江

み仏に供えるご飯おかず炊く
たらの芽やお前の武器は強すぎる

米子市 池尾 保子

据え膳が楽しみ一人旅をする
バーゲンにつられて買った粗大ゴミ

池田市 木村 一笛

手作りの弁当見せ合うローカル線
末っ子の味方に一人お婆ちゃん

松江市 佐野木 みえ
悩みごとまた一つ増え胃が痛む
逡巡をして病院の自動ドア

泉佐野市 大工 静子
送り出す孫の出勤嫁の留守
二ん月に月命日のない亡夫

大阪市 平井 露芳
ガス復帰お湯が踊って沸いて来る
休肝日ぐらいいはお酒止めなはれ

唐津市 野田 旭恒
肩書が多く傾く名刺です
流感が癒る間なくて花粉症

唐津市 松本 圭
寝ころべば背中をつつくつくしんぼ
生かされていたのを知ったかすり傷

唐津市 市丸 晴子
共稼ぎ外反拇趾に支えられ
待ちかねた電話家族は耳になる

唐津市 岩崎 實
約束の相手と会えた汽車の中
ぶり戻す寒に乘客ふくれおり

広島県 森川 抜智
警察と監獄もつとふやさねば
写生会 描かず花に見とれてる

鳥取県 権代 康女
なべ底にあった純愛物語
口止めをされて心がおちつかぬ

箕面市 木村 天弘
しみじみと離婚いきさつ聞かされる
鈴なりの絵馬に神様ノイローゼ

島根県 今若 章子
団結のこんなに固いにぎり飯
ブルドーザーねむるしかない冬の底

寝屋川市 井上 すみれ
地獄耳オーバーにして持て来る
気がつけば亡祖母の真似して生きている

鳥取市 津村 静枝
晩学の机静かに墨をする
志野茶碗ふところ具合折り合わず

岸和田市 井齋 一齋
重税と文句言うほど儲けたい
納得がいくまで覗く虫眼鏡

大阪市 中田 あい子
洩らしてはならぬ秘密に重い胸
書道展読みかねる字が賞をとり

弘前市 相馬 銀波
鯉 鯉 肴で春を呼ぶ津軽
答弁は重く受止めますと逃げ

尾張旭市 三浦きぬ
他人の振り見ても我が振り直せない
守り仏 勢至菩薩のはずなのに

出雲市 川島和歌子

東風吹けば天満宮も春の色

片足で老化現象 立って見る

兵庫県 北川とみ子

喪を脱いで女を捨てた振りをする

悔いること多くて母の手に還る

今治市 野村清美

赤い糸女が切った糸切り齒

疲れたら後ろ手組んで背伸びする

岡山市 山磨行子

初難へ見栄もちよつぱり添えて買う

愚痴るまいつかは花が咲くだろう

出雲市 加藤スズコ

手のひらに福豆のせて年の数

てふてふの言葉に笑う輪の仲間

尼崎市 中澤向西

責任を果たした庭に青い月

石段を登れば街がよく見える

和歌山県 藤井春子

鍋磨き母の仕草を娘におくる

スタートが爽やかすぎる空の青

泉佐野市 稲葉洋
少しだけ豊かになって争わず
鬼の首とった気分の還付金

島根県 森茂美

蛙焼きの煙流れて春はそこ

悪友と認め合つてる友と飲む

唐津市 入江喜久亭

受話器取る向うで僕の噂など

赴任地で一人花見のコップ酒

唐津市 江川青琴

妹を亡くして知った血の絆

佗しさを留守番電話突き放す

尼崎市 尾宮弘治

独り身の気楽が嘘の欠け茶碗

玉の興笑顔で隠す泣きボクロ

西宮市 岡本道子

うつ伏せの観音の胸張り裂ける

半眼の猫に読まれる女の手

宝塚市 黒台伊佐武

豆よりも余震に鬼が逃げ惑い

灯を点し貯めたお金は何のため

池田市 藤井計

活断層 猫も杓子も口ずさみ

お互いの心探して絡み合い

大阪府 頑固一徹ベテランらしく生きてゐる
澤田和重
やりくりはどうでも妻はしてくれる

寝屋川市 達筆の招待状はお寺から
坂上高栄
炊出しの笑顔に生きる夢が湧く

東京都 ボランティア考えるよりすぐに行け
松本冬虻
ばれたかなそろそろ地震来る感じ

兵庫県 ふところの隠した種を蒔きたがる
玉田三重
楷書にはやんわり返事できまへん

鳥根県 人類の眠り近づく低気圧
岩田三和
落ちこぼれ安全地帯にいる安堵

岡山県 節くれた指に秘めてる老いの意地
富坂志重
愛の字は憎しみという字にかわる

鳥取県 自信なく少し群からはなれだす
橋谷静江
ほめ言葉知らぬ姑へオシメ替え

大阪府 空くじ無し敬老会に行つてみる
中井正秀
国会にタレントの出る質疑聞く

和歌山市 電線が邪魔なわたしの奴唄
山裾かず子
菊の香にむせて涙がとまらない

鳥取県 極楽と洩らして祈る終い風呂
橋本多哥由
還暦へ過去はすっかり捨てました

寝屋川市 寒に堪え梅さりげなく咲き揃い
太田とし子
広い空 出入口どこやろか

河内長野市 お互いに手頃な夫婦だと分かり
妹背尽呂久
中核がいつの間にやら粗大ゴミ

出雲市 亡き兄を運ぶ重さとのつる愛
荒木恵美子
恍惚の祖母の目元に見る涙

八尾市 我ながら勤の鈍さに腹が立つ
與田明
実印を捺して四五日落ちつかず

鳥根県 派手かしら若さがほしい色ごのみ
槻谷仲子
真実と後ろめたさがからみ合い

岸和田市 婦人会寄れば男は要らぬ顔
亀井皎月
OB会しごいた奴は淋しそう

秀句鑑賞

— 4月号から

菌田 獭 沓

呆けられぬ浮世の義理が残つて

井上 すみれ

義理堅い作者の心がそのまま素直に出され
サラリとした中に、ある諺を思い出させる。
「義理と俤ははずされぬ」。それでも義理は
程々になさっては。

ブライドの椿 着地がままならぬ

平川 幸枝

椿の花は盛りにポトリと落ち、地面でもう
ひと花咲かせる程きれいです。でも時々、花
弁が下を向いて朽ち果てる花もあります。

向い風武骨な父が受けてたつ

山宮 愛恵

「子は親の背中を見て育つ」と言います。
向い風の時ほど、親は家族を守るため、「ド
ンと来い」とばかり受けて立つ。そんな家庭
から健康な子どもが育つのです。

ばあちゃんの土産話が終らない

太田 藍子

相当、嬉しかったと思います。一緒に行つた友だち、宿のこと、温泉のこと、初めて見たもののこと。土産物よりも、話が土産になります。ゆっくり聞いてあげてください。

七いろに足らぬがキレイ孫の虹

尾宮 弘治

虹は正確に言うところ七色ですが、幼児が虹を見て、三色か四色ぐらいで虹の絵を描いた。それを見た親は、ほんとに「きれいな虹」と思つたでしょう。うんと褒めてあげて下さい。

続編もあなたの貨車で山越える

大石 あすなろ

続編、つまり再び生れ変つての人生も、あまり乗り心地の良くない貨車だが、山坂越えて共に暮らしたい。夫婦愛の根元でしょう。

百点の靴がスキップして帰る

山内 芳江

低学年のやんちゃ坊主の姿が臉に浮かびます。たまに百点をとつた喜びを体全体で表わして帰る子が見えてきます。

胸の火をポストへ入れて待つ長さ

片平 静代

口に出して言うことは、照れくさい。そこで手紙。きつという返事が来ますよ。

便利やの私で他人につかわれる

山根 めぐみ

「器用貧乏村宝隣の阿呆につかわれる」という諺があります。尽しておけば、何時かは自分に返って来ます。結果を期待しましょう。母と言う灯台がある子らの海

杉山 精子

子どもたちは学校を卒業すると就職し、また結婚してそれぞれの道を歩み始めます。しかし、何時も心の拠り所になっているのが母であり、故里です。それはあたたかも、沖の船に光を送る灯台のようなものなのです。

縦結びで届くりボンもまた嬉し

藤井 高子

今の若い人は、紐を結ぶということをあまりやりません。それが自分でリボン結び、母や祖母に贈り物をする。その心がそのまま表現されていて、気持ちが伝わります。

友の声爽やかに聞く山の里

荒木 恵美子

私が山育ちのせいか、下五を「山の駅」としたらどうかと思いました。私はこの春休み中、毎日、友だちを駅まで迎えに来て、下車すると互いに大きな声で爽やかな声で呼び合っているのを耳にしています。情景が目に見えるような句です。

沙湖抄

小出智子選

水に放つ水のうれしさセロリ折る
 ストープ列車でするめが匂うなり
 リストラの中で鳴ってる鳩時計
 活造りの鯛と海遊館の鯛
 老人会中止大雪注意報
 人並みに老い人並みの死を願う
 まだ明日がある掌中の白紙
 夜は鉛筆を削ってから眠る
 スーパーの袋男の手に余り
 噂してくださる 桜さくらさくら
 白酒の前へお行儀よく座る
 大声で笑った旅を引き出しに
 お互いに親より長く生きている
 トネルの出口はきつと旅にある
 谷底に届く陽があり生きられる
 躰けばアホウアホウと飴する
 春雷や家族それぞれ鍵を持つ
 正論をはくと唇寒くなる
 新キャベツぎつくばらんな話する
 何度も消した極彩色の夢かたち

西宮市	龜岡	哲子
五所川原市	齊藤	島
青森県	田中	叶
大阪市	神夏磯典子	
横浜市	菱田	満秋
青森市	工藤	甲吉
米子市	林	荒介
米子市	田中	亜弥
吹田市	山本希久子	
島根県	松本	文子
和歌山市	福本	英子
米子市	澤田	千春
松原市	小池しげお	
京都市	都倉	求芽
鳥取市	小谷美ツ千	
鳥取県	新家	完司
尼崎市	田中	薫
寝屋川市	江口	度
和歌山市	古久保和子	
富田林市	池	森子

エプロンを外すところうそ寒い
 過ぎたこともう振り返らない踵
 金魚もう網をくぐるはなれたもの
 出来るだけ大きな的を探してる
 つつかい棒そろそろ力尽きる筈
 あたたかい嘘で長生き囲まれる
 眼鏡はずせば右も左も美しい
 静寂の中にわたしが見えてくる
 マニキュアが負ける苺をつまむ指
 コップ一ぱいの水に生命を考える
 わたくしの眼鏡と自問自答する
 石垣が昔話をしてくれる
 津軽風春一番を呼び寄せる
 自立してマリオネットは糸を斬り
 土仕事くれる四月の花の苗
 棘のあるバラとも握手してみせる
 ふるさとへ「春の小川」を聞きに行く
 ええとしよりになるにも金がいりますな
 図書館のアンニユイ ページめくる音
 多情仏心やがてやさしさだけ残る
 乳鉢で搗った薬はもつと効く
 またひとつ自慢にしたい木を植える
 可能性の差は縮まった揚雲雀
 湯豆腐を崩しあなたの肚さぐる
 おんなと言う重さを抱いて卵割る
 カプセル二錠 安定剤と降下剤

大阪市	西出	楓楽
和歌山市	玉置	当代
大阪市	藤田頂留子	
大阪市	本間満津子	
富田林市	片岡智恵子	
旭川市	朝倉	大柏
倉吉市	淡路ゆり子	
米子市	金山	夕子
八尾市	宮崎シマ子	
大阪市	板東	倫子
鳥取県	田村きみ子	
米子市	新	正子
弘前市	中山	雅城
和歌山市	福井	桂香
大阪市	日阪	秋子
鳥取市	美田	旋風
高槻市	守先	伸子
枚方市	前	たもつ
和歌山市	池永	正雄
米子市	白根	ふみ
吹田市	栗谷	春子
鳥取県	さえきやえ	
米子市	林	瑞枝
米子市	鹿島	蘭
倉敷市	小野	克枝
倉吉市	野中	御前

ひよいと出た本音あれがエリートだよ

童話から抜け出た少年の勇氣

雑草のころ私の鞭にする

春よ来い神戸の町は急ぎます

田高はまだ響かない路地住まい

謝ってごらん優しくなれるから

十一人生まれ残ったのは一人

一生のお願ひ耳にたこが出来

お世辞なら若く見ると言えばよい

春は曙わたしは深い夢の中

あいまいな日本に椿梅桜

愚夫愚妻なんと響きの温かい

消えるなよわが子渡らす虹の橋

身の程をわきまえて居る土ふまず

桃の実が子無し夫婦に届かない

自転車で散髪に行くお父さん

大天守庶民の暮らしまで見えぬ

ときめきを運んでくれる花子報

磨いたらきつと光ると言い聞かす

飲みこんだ針は死ぬまで吐き出さぬ

放物線描く子の夢親の夢

羽の重さを命のかさだとしても

やりくりの頃なつかしい紺紬

満月へひそかな恋を鬼瓦

タレントの黒い眼鏡の私生活

春なれや月火水木金

兵庫県 遠山 可住
豊中市 江口 明光
米子市 足立由美子
河内長野市 植村 喜代

阪南市 深日白光子
和泉市 中川 楓

豊中市 田中 正坊
黒石市 相馬 一花

海南市 三宅 保州
八尾市 高橋 夕花

箕面市 岩津ようじ
綾部市 藤田 芳郎

今治市 矢野 佳雲
岡山県 山本 玉恵

唐津市 浜本 治幸
羽曳野市 田中 透太

姫路市 大原 葉香
界市 山本 半銭

倉吉市 松本よしえ
西宮市 奥田みつ子

羽曳野市 吉川 寿美
和歌山市 木本 朱夏

和歌山市 細川 稚代
今治市 月原 宵明

鳥取県 西川 和子
八尾市 高杉 千歩

春の雷夫婦げんかはそれつきり

不言実行強情なのは親ゆずり

母さんのわたしコビーじゃありません

マイホーム小鳥も猫も来てくれる

ウインドの猫背にはつと背を正し

落し蓋母の苦勞が煮こぼれる

空想の自由離婚の次のこと

垣低う暮らし情けが行き来する

お守りのようにに老父はカード持ち

雪女が呼びに来るから眠れない

中心で無防備主義を押し通す

えびす顔許した事も多からう

どの窓も開けて秘密のない暮らし

落語から貰った知恵にあるゆとり

老農の素足に温い土がある

嗚呼とひとこと被災地から帰る

笑顔して待っているのに誰も来ぬ

蘇る魔法のようなランジェリー

古希が何さと妻のスイミング

繰り返すと本当のようになってくる

わだかまり春陽炎にみな溶かし

もう一度翔ぶ風にさせる風が吹く

何もなかつたように峠で見る景色

ホームレス大きな犬を連れあるき

咲いて散る花に掬というを見る

沖繩の心そのまま黒砂糖

守口市 結城 君子
藤井寺市 高田美代子

姫路市 丁坪サワ子
香川県 新川マサエ

広島県 田村 新造
和歌山市 山田 高夫

広島市 森田 文
岡山県 矢内寿恵子

奈良市 米田 恭昌
鳥取県 乾 隆風

和歌山市 桜井 千秀
高知市 桑名知華子

高槻市 川島颯云児
貝塚市 池田寿美子

出雲市 園山かおる
兵庫県 倉垣 恵美

大阪府 稲本 凡子
米子市 服部 朗子

京都市 松川 杜的
堺市 宮本かりん

大阪市 渡部さと美
米子市 中井 ゆき

米子市 茂理 高代
大阪市 上田 柳影

名古屋 藤井 高子
和歌山市 内芝登志代

生野にも名所があった御勝山
 傷薬減つてゐるうちが幸せか
 渋柿の甘さを鳥見逃がさず
 幸せを四肢に感じる夜の風呂
 煙たいがこの問題は老父が要る
 丁寧な言葉で攻めてくるおんな
 長いトンネルだった我が家に春が来る
 もう少し歩けばこころ決まりそう
 窓際でじつくり太い幹になる
 目覚しを掛けての方が起きてこぬ
 上段に構えて敵を寄せつけぬ
 恋心持ち合わせてるうちは花
 Uターン兎こぶなも代替り
 宇宙の中の一点となり亡母の星
 私に成りきれぬ日の鏡拭く
 マジックの鳩 喝采に慣れすぎた
 言い出しつべにまたなっている自嘲
 泣いた日もあったが続く日記帳
 桃咲いて子の合格を待っている
 もう一人のわたし宥めたりすかしたり
 この道をまっすぐ行けば明日になる
 入賞を褒めると肩で息をする
 幸せが時々あって生かされる
 桜散る頃に発ちたし終の旅
 ランドセル背負ってピッカピカのひとみ
 難関へとにかく額集めよう

大阪市 北 勝美
 熊本県 高野 宵草
 和泉市 西岡 洛醉
 枚方市 森本 節子
 唐津市 山門 幸夫
 静岡市 永倉 柳華
 静岡市 片平 静代
 大阪府 榎山 隆
 和歌山県 杉山 精子
 熊本市 遠山 夏生
 鳥取県 原 みさを
 米子市 小塩智加恵
 泉佐野市 稲葉 洋
 堺市 黒田 真砂
 尼崎市 長浜 澄子
 米子市 木村富美子
 寝屋川市 籠島 恵子
 鳥取市 西原 艶子
 鳥取県 鈴木 公弘
 出雲市 園山多賀子
 茨木市 堀 良江
 岡山県 富坂 志重
 出雲市 竹治かし
 今治市 村上久美子
 羽曳野市 徳山みつこ
 米子市 光井 玲子

特技持つ帰農の空を子と翔る
 暖かい家庭支えるこの笑顔
 運命を陽転させる高笑い
 溜息が発酵している夜の酔い
 セールの笑顔に家計くすぐられ
 火と水の立場で違う役どころ
 雛の日に少女にかえる桃の花
 悪いのは鬼ではないという説話
 顔ぶれでもう筋書きは読めてくる
 古希真近四季随順の弱い葦
 千羽鶴じつとはばたき抱いている
 夢抱いた時から花は彩を増し
 お二階に寝ようと言ってくれる孫
 ソロバンを捨てて周囲が見えてくる
 素顔ならなんにも怖いものはない
 孫誕生旗を出したい男の子
 自己主張花屋の花はくたびれる
 喫茶店いつも時計が進んでる
 回転ドアあなたの姿見失う

哲子さんの句。作者は西宮市で震災に遭われた一人。何日も飲み水
 さえず自由な生活に耐えられていた。蛇口から水の迸る嬉しさをこの
 ように素直に新鮮に表現されている。体験した者でなければの句であ
 る。磊さんの句。何でもない句柄ながら、ほのぼのと温いものが伝わ
 ってくる。東北説りの会話が聞こえてくるような風土性がある。その人
 でなければ、その土地でなければの句は得難い。叶さんの句。大きな
 機構の仕組の中で、行き着くところ家庭を思う作者の思いが「鳩時計」
 になった。非常に思い入れの深い句である。

福岡県 横地 東川
 香川県 田中なみ子
 和歌山県 山根めぐみ
 和歌山県 野々 圭子
 香川県 成重 放任
 倉敷市 田辺 炎六
 岸和田市 古野 ひで
 八尾市 山下美津留
 宿毛市 岡村 千鳥
 大阪府 池田 一男
 岡山県 福原 辰江
 和歌山県 藤井 春子
 姫路市 本上まさ子
 鳴門市 八木 芳水
 八尾市 村上 剛治
 茨木市 藤井 正雄
 堺市 谷平 照
 大阪市 松尾柳右子
 唐津市 市丸 晴子

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(53)

橘 高 薫 風

この時代の『川柳雑誌』は益々隆盛期に向
つていようで、柳論、随想、古川柳研究そ
の他の寄稿も多く充実しているものの、路郎
先生の執筆が影をひそめていて物足りない。
松盛琴人の「作為という事に就いて」は作句
の基本となるものだから転載する。

作句上に作為という言葉がある。若しこの
言葉が作品の上に投げかけられると、それは
作品の致命傷になる。即ち其句は「つまらな
いもの」だと没にされる恐れがあるからだ。
何故つまらないのであるかと言え、大抵の
答は真実の力に乏しい為、形の上に作為が働
き、つまり「作りのもの」という臭味が残るか
らだと。それは空虚、偽物、不自然等々の言
葉でも代言される。

併しベテランの、作句に注意深い作家なら
それは無からうが、未だ川柳に日の浅い人は
よくそれで失敗する。然も簡単にそう言い切
られただけでは概念は解った様でも「作為」
とはどんな臭味か、今一つ詳細に其正体が掴
めない。そこで理窟を付けて考える。例えば

如何なる川柳でも「作らない」所に川柳は生
れない。それにも不拘「作ったのでは」不可
と言うは訳が解らぬ。必然的な意味から川柳
はまさしく「作った」もので「自然」そのま
まではないではないかと。全く其通り作品は
作ったものに相違ないが、それは一を知って
二のあることに考え及ばさぬからで、川柳に
日が浅い故の迷いなのである。

そこで手取早く、どうすれば作ったものが
「作為」の臭味を除去する事が出来るかとい
う問題に触れながら、少しく作為の実相を、
手近の句を拾って例句として語って見る。

傘借りて濡れず済んだ春の雨
非常時も祭は祭盆は盆

足の豆びつこを曳いて痛いなり

といった調子のもの、これ等は所謂「そうで
すか川柳」燃焼不足、或は川柳の形だけが出
来ている拙い作り物でしかない。併し次の如
きは実に立派な川柳らしくして作為歴然、

畳屋は馴れた手付の肘でしめ
頂上と裾野を富士は雲で分け

歓迎の名士へ駅のこんでいる

等々、こうした句は如何にも川柳らしい川柳
で、然も中味はカラッポの句で、数も多い。

之等は作為の失敗に関心を持たず不知不識の
うちに作句するからで、年数を経た作家でも
折々この失敗を繰返す。次に優れた川柳とは

君見たまゑ蒨葎草が伸びている 路郎

赤松のみどりが僕を生んだ村 山雨楼

四疊半 三疊 父と子の冬を分つ 半文銭

凡人となれ一つすて二つすて 日車

新作旧作が混っているが、とに角是等の句
と一方の句を比較すれば、その優劣は判断が
出来るであらう。「一方は同じ作り物でも」つま
らないものか「拵えもの」という感じが濃
厚で、川柳をやる人なら決して上等とは思
まい。後の句にはそうした臭味もなく、一寸
詠み下しただけでも心の琴線に触れる何もの
がある。この相違点が直ちに句の詩価値を
定める分岐点でもあり「作為」の有無の実相
である。よく「作られたもの」は「作り物」
という臭味を残さず、内部より生れた純粹自
然な感じが句の上に躍動するからであると言
い得る。作為が充分に必然であるので魂と形
とが一句内に溶合しきるため、作為が目止
らず、渾然とした自然美、「美」の形だけが
光輝を発散させるからである。

荀香のむ

西出楓楽選

お花畑で迷ったことは内緒です

うぬぼれの帽子が少し大きすぎ

ふところが深くて嘘が通らない

ふる里の部屋では雪が温かい

踏切り鳴ってあたりに誰もいぬスリル

遠い日の春につながる糸電話

淋しくて魔女に時々電話する

猫の額に冬が残っていて 寒い

「お受験」の言葉にざらめ雪かぶせ

いざと言う時の輪ゴムが腕にある

思い出に何遍来ても立ち止まる

あやとりの縄は亡母に気付かせぬ

四月馬鹿かわい的にされておく

いろはから始めてみよう処世術

ひとからげ十把の中にある安堵

もう少し残りの喜劇演じよう

命綱すこしもつれできたようだ

黒少し混ぜると浮世生きやすし

呑みこんだ言葉が胸でこたまする

羽曳野市 芦田 絢子

羽曳野市 吉川 寿美

倉吉市 淡路ゆり子

米子市 白根 ふみ

米子市 政岡日枝子

大阪市 日坂 秋子

米子市 澤田 千春

米子市 新 正子

弘前市 肥後和香子

和歌山市 古久保和子

寝屋川市 宮崎 菜月

岡山県 矢内寿恵子

和歌山市 福井 桂香

富田林市 藤田 泰子

吹田市 茂見よ志子

米子市 堀江 美月

大阪市 稲本 凡子

西宮市 奥田みつ子

寝屋川市 籠島 恵子

幾度の曲り角ですりこんぐむく
忙しい人の便りが飛んできた

エプロンのポケット忘れた日が戻り

漕ぎ出せば元に戻れぬ潮だった

でのひらに來し方乗せて夕焼ける

こたわりかひがみか春に背を向ける

らしからぬかつこうをして肩がこる

跡かたも無くなった土地天に向く

鳩時計あの日の乱の痕刻む

あれからは隙間風にも身がまえる

神さまの結んだ紐がほどけ出す

許す氣にさせた静かな鎌の月

青汁の苦さ言い訳下手らしい

きのうの絵きようの絵すこしずつれる

亡母の声聞えたような水鏡

日がさしている遠山へ一歩ずつ

合掌する沖にむかしが甞する

あれこれと妻のアンテナからキャッチ

針運ぶ今日の倅せ綴じ込めよう

初恋は濡れた花火のままに過ぎ

おんなの拳入れるポケットさえもない

終点の改札磯の香りする

母小さく午睡の海を漂えり

頬杖のおんな他人を模索する

火の鳥を抱くと吊り橋揺れはじめ

和歌山市 内芝登志代

鳥取市 西原 艶子

寝屋川市 太田とし子

出雲市 園山多賀子

名古屋 藤井 高子

大阪市 板東 倫子

鳥取県 さえきやえ

西宮市 牧瀬富喜子

尼崎市 春城 年代

西宮市 門谷たず子

倉吉市 松本よしえ

倉吉市 最上 和枝

今治市 野村 京子

羽曳野市 徳山みつこ

富田林市 片岡智恵子

熊本市 永田 俊子

米子市 林 瑞枝

寝屋川市 平松かすみ

寝屋川市 井上すみれ

徳島県 安宅美代子

守口市 結城 君子

豊中市 辻川 慶子

弘前市 佐治千加子

兵庫県 北川とみ子

鳥取県 小西五十鈴

飢えている心へ選っている絵筆
ちちんぷいまだ治らない頬の傷
すれちがうとかすかに匂うお人柄
古里に我慢袋が干してある
残雪に罪の汚れが暴かれる
バーゲンの服で冒険してみよう
まだすこし女を残す三面鏡
啓蟄を待てぬ和服の梅便り
見るからに福相周りにまで温い
しんねりと自己主張する沈丁花
春の空に心をしばし遊ばせる
花の香を愛でて心の鬼に勝つ
無器用な愛をいただき静かです
手の内を読まれたらしい目が笑う
作り笑いで上手に逃げていた図星
紙コップの宴気楽に話し合う
ここだけの話が飛び火してたと
陽の当たる部屋では棘が抜けていく
藪椿見える門借る俄雨
余震まだ続く噂の震源地
凝り性の庭師へ怖い請求書
寝そびれてワインの量がまた増える
一心不乱 心底を問うために書く
招かれてもう一匙のメロン置く
皆無粋 私一人の蔭の臺

和歌山県	藤井 春子	和歌山県	石倉芙佐子
出雲市		米子市	木村富美子
米子市	米田 幸子	倉吉市	米田 幸子
弘前市	一戸 ツネ	泉佐野市	内田 倫子
八尾市	高橋 夕花	大阪府	津守 柳伸
鳥取県	石谷美恵子	和歌山県	木本 朱夏
米子市	鹿島 蘭	大阪府	町田 達子
香川県	高橋 たみ	宿毛市	岡村 千鳥
岡山県	山本 玉恵	宝塚市	丸山よし津
柏市	上鈴木春枝	米子市	足立由美子
茨木市	堀 良江	和歌山県	玉置 当代
和歌山県	福本 英子	吹田市	井上 照子
松江市	安食 友子	大阪市	大河未佐子
西宮市	亀岡 哲子		

男にも賞味期限があるらしい
窓あけてあなたの心射止めたい
じいちゃんと呼ばぬ私の父だから
残業と言う名目で会ってくる
一枚の辞令の糸にあやつられ
どの枝も惜しくて迷う花鉢
どんな日が待っているのか顔洗う
失敗を恐れ小さく生きている
夜ざくらへ遠回りする風呂帰り
ほつれ糸だんだんからむ深情け
掃いたあと散ってきた葉は見ぬことに
燃える血は持たないひなの目鼻立ち
極楽はあると信じて善を積む
樂觀的にいこうと話きり替える
安心の出来ぬ月日が経って行く

倉吉市	野中 御前
和歌山県	森口 美羽
東京都	山口 新子
米子市	石垣 花子
鳥取県	権代 康女
倉吉市	野口 節子
米子市	茂理 高代
鳥取県	羽津川公乃
八尾市	高杉 千歩
和歌山県	北山 好笑
吹田市	栗谷 春子
岡山県	富坂 志重
姫路市	中塚 遊峰
寝屋川市	森 茜
河内長野市	植村 喜代

一句目―思い出が甘美であればあるほど、人に話すと汚れてしまふような気がする。けれど、ひとりの胸に秘めて居れず、ちよつと聞いてほしい気持もある。その相反する心の葛藤が、巧みに詠まれている。二句目―“うぬばれ”を帽子に託した発想にひかれた。少しの風にでも、体の動きにもすつ飛ぶ程度であれば、愛すべきうぬばれであろう。三句目―この句のような人物にいつかなりたいという願望はある。しかし、川柳を作る上ではよくできた人より、未熟で煩惱をいっぱい持っている方が都合だとも思う。四句目―ふる里を恋う作者の気持が、雪が温かい”と断定したことによって率直に伝わってくる。

戦後五十年と私

同人特集

今年は、戦後五十年にあたります。こ

れを記念する企画の一つとして、同人のみなさんにエッセーの募集を呼びかけたところ、呼応するかのようについに十六人の方から原稿が寄せられました。

いずれも激動の五十年を生き抜き、その中で川柳とかかわった体験をつづられた貴重な原稿ばかりです。誌面の都合もありますので、本号から順次、掲載させていただきます。

(編集部)

あれから五十年

田村 新造

原爆砂漠 肉親探す重い列

原爆砂漠 恥毛を縄に晒されて

など、全編鬼気迫るものがある。

当時シベリアの語り部を自認して、シベリア抑留記などを書いていた私は心を打たれ、よし私はシベリアの悲惨、残酷を川柳で書き残そうと決意した。それが川柳とのつき合い

始めて、入門書を読んだり、新聞川柳への投句、薫風師選の『電波新聞』への投句、NHK講座受講、川柳塔社への参加などによって基本を学び、最近では書き貯めた「雪のシベリア」「興安嶺逃亡記」など、川柳小説として時系列的に発表してもらっている。

あのいまわしい敗戦から五十年、今年は節目の年にあたる。思えば感無量だ。当時、私は関東軍第六国境守備隊の一員で、黒竜江沿岸の瑯瑯という国境陣地で終戦を迎えた。八月二十一日であった。瑯瑯陣地はソ連戦車群に包囲され、猛攻を受けて玉碎寸前だったので、終戦を知り、ああこれで助かった、日本へ帰れるとホッとしたのである。

それが早速、シベリアへ連行され、アムール江岸の街アラゴエの収容所へ放りこまれ、抑留生活が始まった。厳寒氷点下四十二度、飢餓と寒さと戦いながら過酷なノルマ……筆舌に尽くし難い生活であった。最初、千二百人の作業大隊であったが、一冬を越す間に約半数が過労、栄養失調、発疹チフスの蔓延で

私と川柳との出逢いは、今から十年前に遡る。ふとした機会に、呉市の川柳家中津泰人氏の原爆を詠んだ遺句集『慟哭』を読んだ時に始まる。

それは殆どが原爆を詠んだ句で、一読、私は凄じ感動を覚えた。

原爆砂漠 屍を数にする手鉤

バタバタと死んだ。悲惨さは今考えても血が凍る。

五時起床、地獄の鐘で起こされて辛い一日が始まる。毎朝、飯盒の蓋一杯の水つばい粟粥を喰って、雪の中の作業に出る。昼は薄い黒パン一切れ、夜は朝と同じ粟粥で副食はなかった。

主な作業は、戦利品の荷揚げだった。北満から奪ってくる米粟コーリヤンなど食糧類、大砲・銃・弾薬類、鉄道線路など、おびただしい戦利品を積んだ船がブラゴエの港へひっきりなしに着く。その荷揚げが毎日、雪の中で続いた。ピストン運行で船が着く。荷揚げのノルマはきつかった。雪の中を日が暮れても続いた。

その内に過労、栄養失調、発疹チフスの蔓延で毎日数人が死に、四月までに約半数が死に絶えた。春までは埋めることの出来ぬ屍は裸にして屋外の空庭舎へ積み重ねた。梯子を掛けて幾段にも井ゲタに組んで積み上げた。無残であり、哀れだ。五十年前、こんな抑留生活で九死に一生を得て生還した、私はシベリアの語り部として、戦争の愚かしき無残さ、後の世まで語り継ぎたいものと思っている。

望郷の想い北斗の星に泣く
ハシゴかけ屍に屍積み無残

一本の蜘蛛の糸

桜井 千秀

車で出掛ける時、近所の奥さん方に「隆ちゃん、また、お母さん乗せてるの。いいひと

いないのかな」とよくからかわれた。この助手席にいつまでも、母の私が座っていられない。職場でも通勤電車の中でも、好感の持てる娘さんに心が動いた。けれど親がいくら気に入っても、それは息子自身の問題、その時が来たらあっさりこの座席を譲ればいい。素直に諦めがついてきた矢先、真夜中の電話一本で呆気なく息子の交通事故死を告げられた。「なぜ、なぜ」、いくら神や仏を責めたとして

詮ないことと知りつつも、神も仏も、世の幸せな人達すべてが憎らしかった。この苦しみから逃れたいために打ち込むことが欲しい。必死で刺繍を始めて丸四年、その間、刺繍額は百を越えた。夢中になることで現状から逃避したかった。一針一針にこめる祈り、でも虚しさはつきまとった。ところがその虚しさの中に、一筋の灯が見えて来た。ニュース和歌山社との出会いから始まった川柳である。

またたく間に、私はその川柳にのめり込んで行った。

息子にもそんな傾向があった。中学生時代朝比奈隆氏から「中学生として音楽に貢献……」との賞状を貰ってから、高校・大学・社会人となっても、作詩・作曲にかなりのめり込んでいたようで、生存していたなら、きっと何かをやり遂げていたに違いない。「母さんは音楽は解らないけど、川柳でお前に変ってやり遂げてみせるからね」。以来、息子に語りかけている。

戦時中は京都の片田舎で農業に従事していた、空襲の怖さも知らず、食糧難の辛さも知らずに過したと言えば大概の方から、「そんな馬鹿な」と一笑に付されそうだが、これは事実。あまりにも世間の苦難に無頓着だった私に振りおろされた鞭がこの逆縁と言う結果だった。当時、私を慰めてくれた老婦人は、夫と弟を戦死させていて「戦争はむごい。私に遺されたものはもう何もない。貴女の息子

さんも発展しすぎた現在の交通戦争の犠牲者
戦死者と同じ」と繰り返して涙ぐまれた。

今ようやく私も納得してきた。順境すぎた
私に降ろされた天誅なら甘んじて受けねばな
らぬと……。それから十五年、地獄の底から私

桜の咲く限り

を救い上げてくれた一本の蜘蛛の糸、それが
川柳。ならば命のある限り詠み続けて行こう。
息子が音楽に持ち続けた執念を受け継いで行
くならば、私の作句活動は果しく遠い。で
も私は頑張ると思う。

小玉 満江

「春まだ浅き戦線の湖上に香る梅の花」。夕
焼け雲を眺めて二人で歌ったっけ？そう、そ
れは五十年前のまぼろし、戦争は激しく酷し
く、私たちは軍の工場で働いていた。今にし
て思えば、とても粗末な木製の油タンク、こ
れを積んで目的地へ着けば帰途の油はなく、
飛行機もろとも敵地へ突っ込んで行く特攻隊
用だった。私たちは幾度、徹夜を重ねたこと
か、辛いともなとも思わなかった。ただ勝
つために頑張った。

そんな中にも、ふつと青春を取り戻す時が
あった。保科君枝さんと仲良しになった。君
枝さんと同じ検査課だった。夕暮れの寄宿舎
の庭に出て、俳句とも川柳ともつかぬ句を詠
み合ったり、歌を唄ったりもした。君枝さん

は声も顔もきれいで、歌のとても上手な人だ
った。君枝さんの歌声には、娘心を揺らせる
ものがあつた。軍歌もほとんどマスターして
いたが、やはり軍歌より「十九の春」「支那
の夜」にあこがれていた。

その頃作つた句(?)に、「連れだつて雁が
飛ぶとぶ秋の夕暮れ」があり、今も憶えてい
る。君枝さんは兄弟思いで、戦地のお兄さん
を案ずる句とか詩とか作っておられた。敗戦
の色濃くなる中、君枝さんは東京へ、私は京
都へとそれぞれ別れてしまった。私は十代で
親の決めた結婚をした。やがて終戦となり、
君枝さんは指を怪我されたと風の便りに聞い
たが、消息は分からなかった。私の主人は負
傷して帰還し、八年もの長い入院生活の末、

昭和三十三年、帰らぬ人となってしまった。
戦病死と認定され、私は二人の子供を抱えて
苦労した。

そして昭和五十七年四月、満開の桜咲く松
江城の石段を下りて来る人、それは君枝さん
だった。私たちは抱き合つて涙の再会を喜び
合つた。今は吉岡きみえさんとなられ、私の
家からそう遠くない所に新居を構えておられ
た。一度いらつしやいと言つてお邪魔を
したら、小白金房子さんも来ておられ、初対
面にもかかわらず、きみえさんの熱心な川柳
話に魅せられ、私たちが川柳をやってみよう
ということになった。思えば桜咲く城山での
再会がなかったら、私は川柳を知らなかった
かも知れない。

やがて故尼緑之助先生を紹介していただいた。
愚痴を聞いて下さるやさしい先生だった。
尼先生、良き先輩、良きライバルに恵まれ、
姉妹のように川柳に支えられて生きて来た。

尼先生も、「うん、よしよし」と、天国から
見守つて下さっていると信じる。私は今、民
生委員の四期目を頑張っている。息子たちも
それぞれ結婚し、幸せに暮している。孫も合
せて六人、亡き主人のお陰で安心して社会奉
仕できる今の幸せに感謝しつつ過ごしている。

結ばれた縁 桜の咲く限り

師 恩

藤 井 一 二 三

「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」との終戦の詔勅を、ただぼんやりと放心状態で聞いたのを覚えてゐる。昭和二十年八月十五日のことである。

あれから五十年、廃墟の中から見事に立ち直った、今日の日本を考えると感無量である。そして、「もはや戦後ではない」の言葉も生まれ、世の中も落ちついてきた昭和四十一年、私は堺市の成人学校で川柳を学んだ。その時の恩師川村好郎先生が、その後の私の人生に大きな影響を与えて下さったと感謝している。川柳イコール狂歌ぐらゐに考えていた私に、「人間陶冶の詩」と認識させて下さった。

「育つもの育てるものか人も木も」の先生の句を、今も襟を正して味わっている。金光教の敬虔な信者として、人を導くことを使命とされていた先生にお会い出来たことは、大きな幸せであつた。

昭和五十四年、句集『遍歴』を出された時私は病の床にあつた。わざわざ自宅まで見舞

つて下さった先生から、『遍歴』をおしいただし、「このご恩は絶対……」と胸を熱くして心に誓つたことを憶えている。

かくして私は二十年間、川柳を通じて好郎先生から、神仏への感謝と潔い生き方を学んだ。

それから清水白柳先生も忘れることは出来ない。川柳を学んで数年の、堺句会の時のことである。私は下五に「○○である」の句を提出した。選評の際、私の句を採りあげられ、日頃温厚な先生とは思えない口調で、「今後このようなアル、シカの川柳は絶対作つてはいけない。○○であると言ひ切るような、不遜な姿勢はよくない」と厳しく注意を受けた。名前には出されなかつたものの、多分、私の句とご存じだつたと思う。冷汗三斗、生涯二度とこのような句は作るまいと誓つた。

他に八木摩太郎先生からは、句を通して人間としての優しさを、また、勉強家で博識だつた菊澤小松園先生からは、生涯学生の態度

を教えられた。

本誌に「ひとこと」欄が設けられた当時、T氏が「最近の句会に入選句の発表だけに終つてゐる」という意味のことを述べておられたが、私たちが川柳を学んだ頃の本社句会では、必ず主幹の中島生々庵先生をはじめ、副理事長ら幹部の柳話が、毎月交代で行われた。そして川柳をはじめ、体験談や教養になる話など伺つた。たとえ全没の日でも、素晴らしい柳話を聞けたよろこびを、帰りの車中で味わつたものである。

いま私も古希を身近にひかえ、川柳を学んだ頃の恩師の年齢に近くなつた。そしてつづく逝かれた四人の師の偉大さを、思い知らされている毎日である。

全国川柳作家年鑑参加要領

句 稿 作品7句(所定参加用紙あり)
参加費 3000円(小為替・振替)

締 切 7月末日

刊 行 10月下旬予定(年鑑1冊送付)
投稿・送金先 〒651 神戸市中央区野崎

通2丁目1-15 伊佐次無成

ふあ、うすと川柳社

大太鼓打つ根っからの祭り好き

三浪へとうろくママの応援歌

忠告が胸にとろく苦い酒

反対のとうろきよそに杭を打つ

千年の太古とろく滝の音

海鳴りのとうろき一人聞く失意

被災地へとうろく若いボランティア

地球儀を回せばとうろく銃の影

再会に胸とろくかせまだおんな

とうろいたわりには人気無いまつり

祝砲のとうろく中を両陛下

お名前は本屋の棚で知ってます

冬眠を醒ます春雷とどろいて

とうろいた父がバットに重すぎる

あれも夢 闇にとろく雪崩音

住

税務署であえてとうろくことはない

滝壺の轟音に似て耳が鳴る

君の手に触れて雷鳴とどろきぬ

天と地をとうろかせた地獄絵図

いつまでも父の太鼓をとうろかす

人

とうろきが聞えてきそう桜員

地

とうろきの真只中に居て孤独

天

一喝がとうろきそうな父の墓

軸

とうろいた人気スターの成れの果て

隆

典子

正雄

帆雀

洛醉

正剣

雄々

たもつ

たず子

狸村

白光子

みつこ

希久子

寿美

洋

美代子

保州

正子

照子

しげお

京子

杜的

玉置重人

女々しい

都倉求芽選



女々しきで人気をあげて男優賞

負けは負け今更女々し たら話

女々しいと叱った相手はニューハーフ

均等法 男ビースをして歩く

進化とか男女々しく化粧する

肩バット女々しい女 死語になる

二代目の女々しき嘆く鬼瓦

女々しいと思われたくない明日がある

万感の迫る涙はめめしいか

政治家の女々しき金にしがみつ

総理さま女々しい言葉吐くでない

秘書という女々しい役に懲りごりだ

女々しいと石投げられた復員日

女々しさを隠し戦に散ったひと

兵隊で女々しく泣いた夜もある

笑われた女々しい兵が生き残り

雑草に女々しい男挫折する

女々しいと叱った母も泣いてくれ

女々しいが一人倍の思いやり

家事をする夫を女々しいとは言わぬ

引き際の美学 女々しい心切り捨て

洋

洋

主一

勝巳

たもつ

よし津

正剣

照子

勝美

武史

多哥由

蟹

波留吉

ミツ子

新造

宵草

よしみ

和重

實

倫子

秀夫

先に判を笑顔で捺したのは女

女々しくはなし母の死に泣く男

女々しさは亡妻に対する供養だよ

円満に女々しい夫演じてる

女々しさに慣れ年金に養われ

性根まで女々しくさせぬ女親

実を抱いて女々しき捨てる梅の花

男泣きしても女々しい背は見せぬ

紅椿 落ちてても未練まだ残し

しがらみに女々しく負けて伸びた蔓

女々しいが一円のお釣りもいらいます

裁ち鋏 女々しいことを言わせない

女々しくて手の鳴る方へ向きたがり

女々しさを隠す眼鏡を黒にする

女々しくはないかと妻に聞いてみる

佳

女々しきの夢二の女うけている

家裁出る男の肩が落ちてゐる

妻逝つて女々しい男になりました

娘のことになると女々しい父である

女々しさを女は山へ捨てにゆく

人

女々しきは拳を上げる癖がある

地

女々しくなった男をなげく葱坊主

天

女々しさを墓は静かに聴いている 牧瀬富喜子

軸

ポケットの女々しい鬼を持てあます

芳郎

希久子

典子

俊路

南奉

白光子

英王子

高夫

英子

ただし

杜的

しげお

彩子

富喜子

正子

狸村

重人

たず子

保州

サワ子

雅城

俊子

初歩教室

題一花

吉岡美房

川柳は省略の文学と言われるように、十七

音字ですべてを表現しなければなりません。

そのため一句の中でもこれも言おうとせ

ず、出来るだけ凝縮された思いを絞り込んで

表現することで、奥深い力強い句が生れるも

のです。それでは添削句から発表します。

誰の手も借りず咲いてる花がある しのぶ

(野の花のひとりで咲いてひとり散る)

花一杯妻七十の誕生日

(古希の妻花一杯に祝われる)

日向はこ沈丁花の香りつつがなく 秀夫

(沈丁花香り余生のつつがなく)

葵の葉花のようです真つ赤な花 たみ

(葉も花も蝶を惑わす葵咲く)

あてどなく歩き野の花呼び止める 三重

(野の花に呼び止められてハイキング)

花の種いつかいつかと夢を見る 笑

(花咲く日夢を見ながら種を播く)

寝たきりへ甘い香りのスイトピー 君江

(寝たきりへ春を届けるスイトピー)

花好きの夫へ添えず半世紀 美恵子

(花好きの亡夫に咲かせ半世紀)

満開の椿丸ごとボタリ落ち 一乗

(参道の足止めさせた落椿)

耐えて立つ水仙凜と風の中 蘭幸子

(水仙は春を先取りして耐える)

次々と花が咲き出す春が好き 蘭弘子

(春が好き私のために花が咲く)

お別れの花束も泣くピアノ会 日出子

(卒業の女子大花を抱いて泣く)

仏壇の花にも春の彩を添え 八重子

(仏壇も花の彩り添えてあげ)

徒花の蕾へ今日も手塩かけ 孝男

(徒花にしない蕾をいとおしむ)

病室が花の見舞いで埋まる友 仲弘子

(病室を花で埋めてる人気者)

切られても花は花瓶で咲きつづけ 美寿子

(選ばれて花の命が活けられる)

野の花を見てほしい人あるだろに 太郎

(野の花も会いたい人がきつとある)

狭い庭花を咲かせて母の趣味 ますみ

(母の趣味花一杯の庭にする)

菜の花の塩漬け美味い里便り 志華子

(菜の花を漬けて受け継ぐ母の味)

残雪に花はあしたを誘いあう 義子

(根雪ある辺り椿は明日へ咲く)

秘めごとを静かに抱いた寒椿 ツネ

(寒椿燃える想いを秘めて咲く)

二月の山かたくりの花凜と咲く 尚正子

(かたくりの健気に咲いている二月)

四季毎に根限り咲く野辺の花 閑静子

(根限り命の限り野辺の花)

考える人の背中中に花の雨 幸枝

(考える人の動かず花吹雪)

山桜古墳の主が花見ちゅう 半畳

(大王の古墳を包む山桜)

花見酒きっちり雨にたたかれる 克美

(花見酒天を仰いで片付ける)

ひらひらと花もお酒に酔って来た 宏幸

(はらはらと花も宴に酔って散る)

色褪せず落ちた花びら掃かず見る 因静子

(しばらくは落花は掃かず風と居る)

花便り聞けば旅へと氣も跳る 侑里

(旅心しきりに誘う花便り)

花吹雪飛び込む程に口を開け タミ

(口あけて見てた降るよな花吹雪)

散り急ぐ花は哀れをさそい来る 郁子

(散り急ぐ花に重ねて想う人)

陽だまりに咲く一輪が語りかけ 鐘造

(一輪の梅とゆつくり春を待つ)

絵手紙に描いて託した花言葉

強 一

(絵手紙に想い託した花言葉)

多哥由

人生の花の二十は美しい

志 重

(人生の花の二十に夢がある)

勝 巳

花を書く花の心を問いながら

三津子

(花描く花の心に触れながら)

カタカナの花の名前はすぐ忘れ

義 男

カタカナの名前で花が威張り出す

桃の花一枝七夫に持ち帰る

桃の花供え七夫と春分かつ

見て見ない花も実もある年の功

(花も実もあつて見て見ぬふりもする)

老後の夢を咲かせる種を買う

(老い込まぬ夢を咲かせる種を播く)

春風へ義理チョコ一つ花芽つけ

(義理チョコに花芽をつけた春の風)

薔薇になれ大和撫子脱皮して

(脱皮して春の女は薔薇になる)

無器用な男に似合う花がない

(無器用な男励ます花が咲く)

男性に花を持たせたのは昔

(当分は女性に花をもたせとく)

花好きの花談義より友となり

(お互いに花好きだけで友となり)

散ることを知らぬ造花で色あせる

(散ることを知らぬ造花で眠られず)

花言葉信じるための花を買う

三重子

(花言葉託するための薔薇を買う)

花咲かじいじ神戸の町が期待する

とし子

(復興へ花咲爺期待する)

散り急ぐ友を偲びて花に酔う

露 爺

(先逝つた友を偲べば花が散る)

いい事の続きがほしい花言葉

一 壺

(いい事の続いてほしい花言葉)

水仙の花瓦礫の町を和ませる

ふゆ子

(起ち上がる瓦礫の町に花が咲く)

坪庭のカレキの中で梅花咲く

俊 一

(震災を励ますように梅が咲く)

花 野菜世界の国からこんにちわ

方 子

(閑空へ世界の花がこんにちわ)

栄華果て花と散るらん知事の職

真 一

(満開の桜一夜で散つた知事)

花に蝶人は利権の蜜を吸う

黎之助

(花に蝶人は利権に群れたがる)

着想・表現ともに立派な句

山間に山茶花ひとり燃え尽きる

秀 夫

花便り酒の香りを連れて来る

一 典

老木の花は疎らで孤高なり

辰 男

花よりも団子横目にタイエット

かず子

裏切らず咲いてほしいと種を播く

りつ子

踏まないで野辺の花芽がいじらしい

文 子

梅どころ今満開のバスツアー

高 栄

花を待つ心を空に遊ばせる

姫 女

花を贈う愛が涸れたりせぬように

春 枝

花の私語途切れず花屋草臥れる

絢 子

亡夫の忌を待つてたように花が咲く

志 重

追伸に見頃と母の花便り

武 春

散歩道語りかけたい花ばかり

幸 夫

きつと咲く花を信じて生き延びる

芳 水

冬眠が覚めてときめく花の精

さち子

届かない高嶺の花でなご欲しい

ミツオ

おしゃべりの好きなあやめと小半日

碧

春風に花のブレーキもつきかぬ

(中)章 子

紅椿ぱとりと落ちて愛終る

トヨ子

唇に思い出があり花風

瑠 美子

露天風呂こんなところにチューリップ

忠 男

白椿活けて無風の中に居る

めぐみ

椿落ち春がゆつくり前に出る

ミツ子

花の名の部屋でくつろぐ旅の宿

キヨエ

童謡がとっても好きなチューリップ

君 枝

私の句

春雨に一気一気の花が咲く

菜の花の一畝残る遍路道

◇

題「傘」 5月15日締切(7月号発表)

宛先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

柳界展望

会員の部に香川水聲の両氏が選ばれた。

★第13回ひなまつり句会が

3月12日、大阪府私学教育文化会館で開かれたが、本社同人の河内天笑氏が秀句に入選した。

みくじ握って小走りに花屋へ

★第8回但馬川柳大会が3月18日、山陰国立公園豊岡かんぼセンターで開かれたが、選者として参加した河内天笑氏は、課題「八」で天位句に選ばれた。

煩悩の鐘は百八つで足りぬ

★NHK大阪放送局の川柳作品選者が5月から橘高薫風氏にかわって河内天笑氏が担当することになった。

★岸和田川柳会は、句会の開催、各地川柳大会への参加や句報「きしせん」の発行など、川柳の普及に努め地域文化の振興に貢献した

ことにより3月31日、大阪府知事から賞状および賞金（十万円）を授与された。

★北海道川柳研究会は新たに「道産子賞」を制定、平成6年の同賞に次の2句を決定した。

北風よ君も女房に勝てないか 塩見 一釜

戻れない道をここまで来てしま 福島 巖柳

★NHK学園川柳九州大会は6月4日午後1時から大分県・湯布院町中央公民館ホールで開かれる。宿題と選者は、勇氣▽吉岡龍城▽拭く▽坂本柳峯▽いのち▽外山あきら。宿題事前投句の締切は5月1日。

なお、同根上大会は7月16日、石川県根上町総合文化会館、全国大会は11月19日、東京都国立市・くにたち市民芸術小ホールで開催

災害見舞金御礼とご報告

阪神大震災にあたりまして、全国の柳社、句会および同人有志から本社に対し、見舞金を寄せられ、四月一日現在で四十二万一千五百十三円に達しました。本社では見舞金の趣旨にもとづき、三月号でも予告しましたように、全額を被災同人ならびに被害の大きい柳社に見舞金としてお届けいたしました。ここに御礼とともにご報告申し上げます。

川柳塔社

〈大賞〉
慈悲無用蟻の骸は蟻が曳く 倉富 洋子

〈準賞〉

不確かな包みを懐き母になる 岡田千加子

一面の雪無実とは限らない 高瀬 霜石

土踏まずわがげんげ田に帰りませ 徳住八千代

非は吾にあり塩豆の塩辛さ 小池 楽人

ほがらかで煮物上手で嫌な人 鈴木真紀子

★第19回川柳えんびつ社賞の同人の部に鈴木やす子、

き春の川柳大会」を開いてきたが、今年は会場確保が困難なため、中止することに決定した。

★第17回津山川柳大会は6月4日、津山市総合福祉会館（JR津山駅下車）で開かれる。会費1000円、兼題と選者は次のとおり。

蜜▽松本藍▽破る▽瀬川瑞紀▽魔法▽後藤正子▽田川勝▽傷▽谷口光穂▽機

先は〒956新津市金沢町3-1-46・石山誠、新潟川柳文芸社主催。

嫌▽吉原辰寿▽やさしい▽寺尾俊平▽情け▽岩井三窓

各題2句、締切11時半。

★第16回「北夢之助賞」の作品を募集している。雑誌

2句（未発表作品）応募料は千円、締切は5月31日。

10位まで呈賞、審査員は去

来川巨城氏ほか8氏。投句

全日本川柳誌上大会特選句

第二回全日本川柳誌上大会は、社団法人・全日本川柳大会の主催、文化庁・日本放送協会の後援により、二、五二五人の参加によって実施され、このほど次の作品が特選句に選ばれた。同大会の入選句は4月20日発行の『平成柳多留』第二集に掲載され、特選句の表彰は6月の日川協長野大会で行われる。

平成柳多留賞（最優秀賞）

半世紀いくさをせずに来た重み

五十嵐 修

川柳大賞（準優秀賞）

知恵の輪がいくつも解ける空の青

仁木 弘悦

NHK会長賞

責任のあるときめきで父になる

土居 哲秋

経済広報センター会長賞

少年と話すりんごを割るように

西山 金悦

全日本川柳協会会長賞

ユーモアが少し足りない五十肩

藤原 和平

全日本川柳誌上大会賞

最後まで城を守ったのは女

澤 啓司

五十年前は死ぬ気の二等兵

広村 悲子

おくれ毛の先まで燃やし逢いにゆく

伊藤 岳央

快食快眠少し鈍いのかもしれん

江川 美栄

席譲る少年ぶつさらばうに立ち

大森 昭恵

★第18回鳥取県川柳大会は3月26日、鹿野町営国民宿舎で開かれた。各題天位句は次のとおりで、土橋睦子さんが特別優秀作品賞に選ばれた。

脳死論 神の許しはまだ

出ない 岸 桂子

にんげんが桜の下に捨ててある

江原とみお

量になり晩になりして禿びてゆく

但見石花菜

萩すすき古い館にははを置く

林 荒介

かはい合つて河を下って行った葦

内田 久枝

ふところの広い男に矢が射てぬ

土橋 睦子

たんばががとも威張つて来た野道

石垣 花子

役どころ 小池しげお

なほ、総合成績の順位は第一位の鳥取県知事賞以下次のとおり。

①貞岡信太郎②長谷川博

子③木本朱夏④山本礫⑤門脇かずお⑥政岡日枝子⑦但見石花菜⑧新正子

▽出版版△

■「私の百句 朝日なわ柳壇入選句」（藤井正雄・B6判・68頁・頒価500円）橘薫風・片岡つとむ序文。約7年間の成果。そろばんの名手鉛筆放さない

■川柳集『悲苦を超えて—阪神大震災』（時実新子選）曾我碌郎編集・発行・B6判42頁・頒価500円）震災直後に呼びかけて作られた二十七人の二百三十句を収録した記念碑的な合同句集、3月15日発行。

裂けるなら裂けよニッポ

ンさようなら 曾我碌郎

■「流されて漂つて」（森下愛論著・B6判100頁・非売品）終戦五十周年を記念して先に刊行した「自伝風兵隊史」を抜粋し再発行し

町光台6—32—1—1

■4月号P101上段9行目「別姓で呼んでも…」の作者「寿子」↓「房子」

■4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

〒619-02 京都府相楽郡精華町光台6—32—1—1

たもので、すべて手製の本。

▼計報▲

■岡田ふみさん（元同人・城北川柳会会員）2月28日心不全のため死去、82歳。

■鶴飼蟻朗氏（大阪川柳界の長老・元豊中川柳会員）3月18日死去、93歳。

▽芳志△

■工藤甲吉氏（参与・青森市）から句集「甲吉川柳」出版を記念して金一封を拝受しました。

▽川柳塔碑基金△

■世森幸雄・飯田昇両氏から提出いただきました。

4月号P101上段9行目「別姓で呼んでも…」の作者「寿子」↓「房子」

4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

〒619-02 京都府相楽郡精華町光台6—32—1—1

4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

〒619-02 京都府相楽郡精華町光台6—32—1—1

4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

〒619-02 京都府相楽郡精華町光台6—32—1—1

4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

〒619-02 京都府相楽郡精華町光台6—32—1—1

4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

町光台6—32—1—1

4月号P104（柳界展望）「住所変更」の稲葉冬葉さんの新住所に誤りがありました。次のとおり。

繩をなうゆとりをくれた春の風
溺死した刻を忘れた水中時計
少しぐらい手抜きをしと貨車に言う

億光年空からの使者をまばたいて
折れた矢をつなぎ合わせたいる少年
遊ぶことばかり無職の予定表

まな板にのせられ友の非を許す
虹になる夢で飛び出すシャボン玉
限界の我慢へ崩れる砂の城

なにげないひと言今日は突き刺さる
この道の遠さ厳しいメモがある
緑日が疎遠の友を呼び寄せる

耳貸せば打算が先に躍り出る
薬まで疑いたくなる春温む
節分の猫は寒さなど知らず

また来いよ背なで見送る父の愛
石仏に軽い会釈をする枯葉
花屋では花のつぼみも膨らみて

答えを欲しがるとうんわり海はひいてゆく
岩美川柳会
羽津川公乃報

トンネルをぬけて真実突く俺だ
天を突く夢をあすなろ抱きつつけ
ひと突きて止めを刺されそうになる

脳天をやんわり突いて戒める
突き放すこれも子離れ親離れ
突き止めることはよそと茶を注ぐ

善人に突かれた胸が病んで来る
手を広げ過ぎた弱点妻が突く

正秀

義親

道博

佐加恵

拓治

哲郎

健一

照路

桃風

幸子

文平

金吾

たけ志

博友

美智子

言葉じりとなえ毒舌突いて来る
弱点を突かれてやつと泥を吐く
弱点を突いてライバル柄じ伏せる

突くことをせず竹槍は朽ちにけり
悲しみのころにマイク突き刺さる
押し突いて崩れぬ豆腐買ってくる

南大阪川柳会
金井

居直つてからの答弁どもらない
ちっぽけな面子大局見失う
旅先の絵葉書匂う湯のけむり

大物か梓にはまらない園児
冷淡にされたくやしきバネにする
道草の園児へ蝶も来て遊ぶ

冷淡に見える役所の簡条書き
冷淡な素振りの背なが泣いてる
返答は算盤はじいてからにする

絵葉書に釣られて雪の露天風呂
園児もつ英語ビアノにスイミング
赤字でもすぐ廃業はせぬ面子

二三人入園式に泣きどおし
負の思考面子ばかりを考える
冷淡に窯の戸閉める火葬場

絵葉書が形見になった冬の山
返答はさけて女将の如才なさ
返答は電話の向うで困ってる

両親の面子がかかっている受験
金持ちの面子で包むのし袋
絵葉書へ私を載せる句を添える

孝原

公乃

蜚

きみ子

嘉津江

單車

芳江

孝男

喜与志

忠良

大漁

文秋報

良度

憲太郎

庸佑

楓楽

寿美

勝美

柳宏子

悟郎

面子さえ立てれば男御しやすい
返答は秋の案山子がしてくれる
冷淡な笑顔に変わる札の束

ストレスのたまる面子でもてあまし
絵葉書と電話で甘い旅続け
答なしそれが返答だと思っ

雷が落ちるハイハイハイと逃げ
返答に困る質問攻めの孫
川柳東大阪

森下

欲出して掌中の玉が逃げた悔い
蓮の葉に落ちそうになった水の玉
目玉のない折角の陽を土偶知らず

骨身惜します気張る顔に玉の汗
七十は七十なりの夢を追っ
佳句地十選

（4月号から）
河内月子

一月十七日晴 街がつぶれた
世界中探してごらんうちのパパ
家族みな行き先違う日曜日

春風に便乗しての杉花粉
ベテランのミス人間味と思っ
道草をして新しい風に逢う

山奥にやさしい熊が住んでいる
甲斐性が少うしあつて怪我をする
どうきんがきれいになった新学期

釣り上げたつもりの妻に泳がされ
中千枝

早苗

栄恵

克子

菜々

三男

トミ子

信博

千梢

久子

シメ子

憲祐

公一

愛論報

庸佑

東雲

隆

たもつ

頂留子

子

これ以上追うと未練と言われそう
活断層を追うプレートに策がない
夢をすてまた新しい夢を追う
轍をば踏んで未完の夢を追う
やりくりの裏は見せない妻がいる
吉本の楽屋でアホになっている
楽屋では煙草くゆらす馬の足
旅役者楽屋で怖い話する
地下鉄の客がわき出て来た出口
バスと地下鉄上手に継いで医者通い
初顔合わせ上位に負けぬ面構え
名優の演技初心を忘れない
出初式梯子の法被汚えている

三幸川柳教室

三宅

保州報

槍玉に挙げられている真正直
鉄砲玉まだ帰らない夕餉時
しんみりと玉露味わいひとり言
一円玉身につまされて拾いあげ
玉砕を覚悟で飛んだ生き残り
毛糸玉ころり転がし愛を編む
遠い日の記憶を辿る手鞠歌
火の玉になれば世間もなんのその
切り札は出さずにおこう玉手箱
鉛玉と鞭がほどよい処方箋
玉ゆらの命をせめて光らせる
変らない暮らしの朝の目玉焼き
掌中の玉は見せずに聞き上手
開発の波におびえている毬藻

度 元紀 恒明 愛論 孤舟 湖風 真柳 太一 文子 勝美 高美 晋吾 猪太郎 章子 美智子 信子 正一 武春 鉄治 三千子 公子 町子 保子 浩子 靖子

玉の汗流す男に嘘はない
人生の最初に聞いた子守歌
ウェディング長持歌がもう聞けぬ
カラオケのない居酒屋のうまい酒
余裕などないが心に歌がある
シャンソンを聞きにコートのかを立て
歌唱力どうある孫が寝てくれる
舟木一夫と同じ青春した私
軍歌なら男一匹声枯らす
リンゴの歌を踏み台にして今がある
高砂や一父泣くまい泣くまいぞ
吉宗の駕籠へころがる手毬唄
擦り切れた歌が酒場の隅にある
咲く花も落ち葉もみんな歌になる
窓際の男に似合う浪花節

川柳たけはら

時広

一路報

逢いたいと思えばいつも雪が降る
ちよとだけ冬のスイカにあこがれる
好きなことしている寒い風景だ
子の寝息外は木枯しふいている
美しく化けても鼻をすすりくせ
鬼仏どちらでも己が主体なり
この寒波リズムが狂う春を待つ
一二二リズムに乗った万歩計
夫唱婦随こわしたくないこのリズム
二十一世紀が見える眼鏡を買いにゆく
私の能力を買う人がいる
人生の余白を埋める辞書を買う

高夫 さち子 初子 良治 秀男 茜 みね 和子 親路 当代 千秀 桂香 朱夏 正雄 百合子 中3史 千枝 蘭幸 比呂子 淑子 清水 夏喜 節夫 笹舟 静風 正宏 喜美子

パン買うか毒薬買うか冷える夜
年金で孫の笑顔を買いにゆく
大皿を買って食費をきりつめる
靴買って靴も買ってどこへ行く
亡母が戸を叩く音して凍てる夜半
燃えつきた椿の寒い顔をみる
寒空へ鬼さ豆に追い出され
スピードの分だけ寒い風に合う
黄梅の開花寒さの緩んだ日
退職をして寒がりになってゆく
街で逢う友みな風邪の話する
愛し子の合格祈る寒参り
寒い心で嘘の一つが語られる

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

感激の花がいっぱい咲きました
避難所の空気を救う花の鉢
核心をつかれてからの揺れる癖
春めいて浜辺の波が揺れている
疑心暗鬼胸のどこかで揺れている
木が揺れる大地が揺れる激震禍
揺り起こす子が近頃は手に余る
故郷への想いが揺れる柿すだれ
被災地の飢えを救った握り飯
溝口町川柳会 小西 雄々報

夢之助 弘治 定人 十四郎 六浦 向西 尚利 鹿太 勇次郎 弘子 久子 信敬

白狐 規代 ちかえ 笑子 静佳 一枝 房子 勲 臣子 菁居 栄恵 蛸牛 一路

割引のチラシ眺めて夢を追う
バーゲンの売場に主婦の目が光り
五割引女のまなこ輝やいた
折り込みの割引の字に吸いこまれ
二割引まだまだ腰は上げられぬ
割引で客を踊らす弁達者
割引も価格破壊というチラシ

川柳ささやま社

酒井 靖子報

豊枝 鈴枝 康女 正光 静江 智恵子 雄々

丹念に自分の城を塗り立てる
ぬけ道に会わぬ六十路の坂登る
なるほどと思うぬけ道ぬけて出る
したたかに生きて油断の多いこと
世渡りの中味に忍の一字秘め
宅急便中味は母が詰ってる
涙腺の弱い女に油断する

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

おみくじの中味は鬼にも分らない
一期一会油断はきびしき老い一人
目覚しを五分進めて油断する
成りゆきによってこの首さし上げる
成りゆきでひよいとへそくり顔を出し
味方だと今のいままでいた笑顔
ひと波乱ありそう笑みが見当らぬ

遠耳で好いことばかり聴いてます
一人旅未知の世界に憧れて
家計簿を見つめふくれる妻の顔
親戚の端くれですと選挙戦

紀一 治幸 喜久亭 ふさ子

草や木が芽吹いて春が笑みかける
泣きわめく大の男の意気地なし
軽く見た風邪熱続き薬漬け
初雪も子供は家でファミコンか
柄のとれた庖丁酷使しすぎかも
火も水も途絶えて善意燃え上がる
疎開先北帰行の鶴仰ぎ
野仏の欠けたる鼻を風なぶる
ガラス戸の向うの雪は美しい
ジャジャ馬が恋に目覚むる春の風
佐用姫のように飛べたら世界新
四コマに世相のギャグを映し出し
大好きな雪はTVで見てるだけ
有効期限三年とあり受験絵馬

川柳塔みちのく

小寺

花巻報

失語症思いが喉を突き破り
七転び八起きの先に見える道
頂点の椅子で故郷の風を恋う
焼き芋がばっくりわれて雪が降る
カルチャーでくらしの垢を濯いでる
カルチャーへ通い綺麗な風に会う
最好調あしたの風を疑わず
思慕深く秘めたおんなは昏れていく
月落ちて綴り切れない我が思い
いろは四十八文字思慕の語を探す
カルチャーに私の老いが無限です
すくすくと元気に育つ母子手帳
祖父母逝き両親死んで我れの順

青琴 ちよ 朴竜 圭一 タミ 晴子 幸夫 四郎 久仁於 高明 虹汀 正剣 五楽庵 龍人 きん子 柳々 祥子 北歩 善保 アサ 銀波 しげる 果林 順三

春なのに瘦せてゆきます片思い
人の世もあの世もみんな思慕の中
雪花やははの声聞く北帰行

川柳岩出

小倉 アサ報

たくましく生きる女の窓開く
ひと言が大志の窓を開かせる
窓開く風の情けを知ってより
うっかりと忘れた事にして平和
いばるやつ支える人の顔見たい
うっかりとボケとは違ふと言いのがれ
うっかりとこぼした言葉拾われる
深夜まで窓に明りが受験の子
自分史の窓開けてみる古日記
相寄って再起を祈る支援の輪
うっかりがまたやらかした消し忘れ
薬指支えきれない愛もらう
身を粉にぬくもり運ぶボランティア
石段を背中押されて登りきる
うっかりは専売特許うちのママ
サバ読んだ年しか言えぬ若作り
子の世話にならぬとうっかり言つてまい
うっかりとしまい忘れた噂かも

富柳会

池 森子報

幸福をつかむ我が手は小さすぎ
余震なおはだしの児らを抱きしめる
古希迎う祖父に届いたチョコレート
川の名も流れる地区で名が変り

ツネ 踏青 花匠 幸子 智恵子 アサ 和子 重徳 悦男 春子 昌子 綾子 千鶴子 保子 正直 愛子 正義 良一 忠雄 与呂志 紅月 アキ 喬之 恒雄

笑うこと少なくなってきた余生

三十年余韻を残す文庫本

喜怒哀楽川に流して海に生き

達筆の手紙苦戦の末に読む

あたたい文面だから読み返す

読み切りの短編に味ある作家

川の字に寝ているだけの幸せで

寝たふりも本読むふりも自己主張

ゆれ戻す大地へ小さいわたしの背

ハーマニカ吹けば故郷が近くなる

奔流を下る船頭信じきり

余震来ぬようにと神に祈るだけ

顔色を読んだり歩幅合わせたり

織姫の裳裾が揺れる天の川

春を読むときの心で鳴る音符

いま佳境マンガは腰を上げて来ず

川のある街で初めて恋をする

俵せを掴みそこねている両手

早く遺書書かねば風呂が沸きすぎる

ふるりの小川へ流れ着く童話

京都塔の会

松川

杜的報

なまぬるい粥だが私生きている

芋がゆの味なつかしい我が青春

生きている欲捨ててお粥のうまいこと

こころ汲み合せて二人三脚転ばない

有機栽培祖父一徹な肥を汲む

汲むと直ぐカラッポになる我が詩囊

傷ついた心汲みとる寒椿

諷云児

扶美代

鐘造

方子

美代子

晋

宗一

登子

絹子

昭水

智久

トシエ

(四) 勇

維久子

欣之

柳太

文次

花梢

岳人

森子

汲んでも汲んでも愛が尽きない母の井戸

灘の酒憂い残した汲む水に

水を汲む苦労を知ってからの水

縁切りの絵馬懸け神の指示を待つ

椿落つ絵馬のかなしみ知るように

絵馬堂にひいじいちゃんも吊った絵馬

達筆な絵馬合格と決まらない

絵馬多く神が間違っ縁結び

ライバルの少うした上に絵馬を吊る

芋粥がご馳走だった飢えていた

断水の街で柄杓が目覚まし

宗匠の湯を汲む所作に目をこらす

神様も居留守つきたい絵馬の数

三食をきっちり食べて老いの春

猪の強さを頼む年が明け

乾杯の音頭を決める阿弥陀くじ

人間の心が日本のあちこちから

はびきの市民川柳会

櫻本

大地震鬼のせいにし豆投げる

被災者のスキ間を埋めるボランティア

ハイテクをせせら笑った自然の威

地震跡に若人の意気震度八

ハイテクの安全神話崩れ去り

帰着駅主婦にもどった旅カバン

あちこちを背伸びしてでも見た春

葬送の列に影なき寒さかな

老人の顔がほころぶボランティア

老人のはなしを聞いてやるゆとり

諷云児

友照

芳子

百合子

礫

紫香

白溪子

龍小

杜的

飛鳥

ただし

庸佑

英一

達子

笑女

水客

吐来報

昭平

聡

かつみ

一貫

敏

りつえ

さとみ

絢子

厚子

昭子

淋しいのだらう電話を切らぬ老母

褒め言葉聞こえぬ振りし訳返す

昔話聞いてくつろぐ置きこたつ

聞こえない事にしておく苦勞人

路のとう確かに春を聞きました

雑学を聞くことだけの耳二つ

気心の知れた主治医の町にいる

バスト九十 圧倒される聴診器

医者通い暇つぶしにはもってこい

仏とも鬼とも見える医者の顔

風呂敷を広げた名医誤診する

名コンビ夜は無縁の下戸上戸

狒犬も仁王もべアで立っている

ちよつと寄ろそれで通じているコンビ

叙位叙勲などには縁のないコンビ

手応えは黙ってとった袖の下

手応えをつかんだらしい笑い顔

手応えに心が踊る電話口

手応えは確かにあった赤いバラ

手応えの割に小柄な鮎が跳ね

川柳塔わかやま吟社

宮口

お喋りの輪に馴染んでる浅い皿

春の街ミニスカートが闊歩する

正論を吐く風船は宙に浮く

駅までぐらひ歩いたらとないです

歩き出すと小走りになるおばあさん

一人歩きの噂に私泣かされる

歩いたよ初孫三娘の電話

みつこ

辰子

シマ子

扶美代

金太

悦子

与呂志

洞庵

二南

一壺

利武

吐来

美代子

ダン吉

美津留

晋

重人

たけし

泰子

志洋

克子報

輝子

紀久子

稚代

金太

三男

和重

誠子

真直ぐに歩いてくれぬ娘の袂
ふんぎりをつけて一氣に橋渡る
吊り橋を揺する程度の浅い知恵
妖精が渡る森から虹の橋
紙風船持つ妹を連れている
山越えたゴム風船の返事くる
風船を困らせている向い風
風船の夫を斜めに曳いてゆく
風船もやる氣もやがて氣が抜ける
風船へ針一本の重さかな
底浅い政治家たちの政治劇
五万発の核に眠りも浅くなる
浅瀬にも母の氣配り行き届き
漱石を浅く読んでたなと思ふ
浅はかな駄洒落男を軽くする
浅知恵をつけているのは妻らしい
浅くふかく覚悟きざんで母になる
正面の浅知恵會議進まない
浅知恵を黙って庇う手の温み
浅漬けは真似の出来ない母の味
愛されてから浅学を恥じている
まだ未練あつて吊橋ゆれ続く
風船を淋しい森が引き止める

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

美羽 正博 利治 裕美 紫香 豊太 武春 賢二 君枝 公子 淳太郎 丹吉 柳宏子 萬の 狸村 寿子 千寿子 光代 美子 英子 まさ子 克子 玲子 保子 紫布 千春

多少なり明るい話聞いている
趣味揚げボケの魔の手をのがれている
カロリーが多い糖分控えめに
紫陽花の多恨を許す雨になる
多年草いのちたしかな芽を抱いて
多数決いつも正しいとは言えぬ
多い数だけ十の指からもれだした
かなり多くのクラスを飼つて生きている
リサイクル多くのゴミが役に立つ
切手一枚多すぎましたポストさん
冬されや多感な夢はもう追えぬ
多数決に慣らされてゆく無人駅
花輪が多い霊は安じたらうか
多目的ホールが持つている操

川柳大坂

坊農

柳弘報

八重子 春枝 寿々子 美月 ゆき 富美子 亜弥 千代 恵子 花子 瑞枝 荒介 より子 正子 醉照 末坊 叭笑 良花 和子 司 かよこ 本蔭棒 まつお 美花 須賀夫 太元 青道

母となる喜び溢れ肌着縫う
優しさにふれて本音をのぞかせる
三寒四温パッチ脱ぐ時期悩ませる
氷柱から春とけて来る町便り
水割りをつららでやれば旨からう
お見合いでいつも脇役太鼓持ち
肌着とは見えぬ入れ墨咲回きる
ポトポトと氷柱が落ちる春の音
くだいおれ太鼓たたいて客まねき
太鼓腹鼓の鳴くような話しぶり
選抜の太鼓も消した震度七
少しなら優しい酒と妻の愚痴
吊し柿明日の甘さへ冬を耐え
選抜をやる朗報にホツとまる
復興の槌音センバツやりますせ

ほたる川柳同好会

井上

直次報

柳昌 重人 推高 与呂志 金太 信醉 しげお 笑風 河南子 鉄心 あきら 美津留 洛醉 柳弘 歩 佳秋 福一 博史 螢柳 眞郎 馬洗 善守 英子 保子 桂子 吉太郎 正安

甲種合格そんな男も古希となり
大島の袖が似合う粋な女

以心伝心合せ鏡にうつる影
目撃者かなり居たから助けられ
かなり手を抜いたかこんな子が生れ
かなりとはどの限度を指すのかな
対局の時刻はかなり夜も更ける
地図を見て歩いて来ればかなりある
はた目にもかなりとわかる深い仲
つまりいてふとよみがえる過去の地図
紙一重弥陀のご加護にふと気付く
ふともらす一言妻に責められる
踊りの輪自分の年をふと忘れ
ふとうしろ見えないものにある視線

城北川柳会

吐田 公一報

噂する声洩れてくる襖越し
もたもたとしている時も陽は沈む
的を得た話を聞きに寺へ行く
年明けに投句さそれれ初一句
的がよく見える眼鏡とかけ変える
講師まだ見えすもたもたする司会
見合いの日もたもたする息子親案じ
尻をひつて叱る妻なく初読経
人生ツアーエントはかりおこすなり
放つ矢の一桁違い宝くじ
読めるかと短冊の字が笑いかけ
未来図へ飛び立つ主婦の英会話
洩らしてはならぬ秘密に重い胸

竹二 清史 瀧小 明光 直次 祥風 一笛 恭子 昭子 ただし 純次 方郎 喜美子 幸子

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

早朝の二十秒人生狂わせる
かからない電話にすぎる身の安否
振り向けばまだ見つめてる母の顔
あるじもたもた妻がリードの新世帯
読めもせぬ文字を褒めてる書道展
紅一点一人力んで的にされ
紆余曲折のはきつちり決めてある
母より妻よ遺骨はひとにぎり
もたもたとしては居れない被災跡

海になる本を探しに沖へ出る
漫画本息抜きと言う受験の子
花が散るまでに詩集を読んでおく
心地良い眠りに誘う本を置く
本も好きテレビも好きで老いの日々
本が好き本屋へ嫁に行くという
手のひらに約束ごとがふえてくる
約束ごとと終えて静かに花は散る
約束を覚えこませる箸袋
札束が時々約束間違える
約束をした手と違う手で別れ
好きだからすぐに約束してしまふ
輪になって身内の傷をひたかくす
いやな事身内だからと聞かされる
社長以下身内すんなり決算期
離れ住む身内時々長電話
芋蔓へ身内をさがす選挙前
身内から候補者が出る選挙戦

登美子 昭子 高栄 静子 白峰 八重 柳影 倫子 公一 久枝 多賀子 螢 邦代 登美子 一葉 日出子 きみえ 静江 義良 茂美 佳江 博子 登志子 早笛 静恵 雄々 清子

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

身内から崩す哀しい罫もある
別れても余韻が残る沈丁花
ふきのとう別れのときはすぐそこに
別れて久し今も私の胸に
新しい出発点になる別れ
土筆つんで戻り別れが言い出せず
ど忘れが別れたあとで思い出す
ころあいにゆっくり釘をさす長老
ゆっくりとしそいで米を研ぎはじめ
何事も八十路の母はスローモ
ゆっくりと作戦を練る妻の留守
三分咲き男ゆっくり風になる

好きの二字指で書いてるカフェテラス
風花の責めを真冬の指先に
不器用な指でコツコツ鶴を折る
動く指みなそれぞれにある役目
まだ陽は当らずベンダコ堅くなる
美しい平和が人形の指にある
昼の酒男の本音よく解り
母さんが片目つむると貝になる
理解したつむりの鼻緒きつくなる
理解した深い瞳を裏切れぬ
活字より理解が早い漫画本
まだ理解できると傘寿へ歩き出す
天を指す少年の芽は無限
義理堅くいつも芽を出す露の臺
じゃがいもの芽が伸びてくる倦怠期

房子 みえ 桂子 寿美子 午朗 鶴丸 煩惱児 与根一 米子 太泡 章峰 恭昌 森子 柳宏子 ますみ 恒明 美幸 一風 度 柳伸 年人 和子 東川 欣之 春堂 祥文

経緯を流せばやわい芽がのびる
全壊の瓦礫の下に芽が覗き

シマ子
泰

じやがいもに芽が出る妻の長い床
いやすべ手だても知らず闇路ゆく

信博
弘直

針灸で治すと祖母は医者きらい
齒を治す時間ノルマに奪われる

頂留子
とみを

匂いまだ染みてる妻の愛読書
ユトリロにバリの匂ききにゆく

三男
隆

幸せは朝の匂に起こされる
歟ふる父の野良着に土匂う

かつみ
美津留

白梅の匂こばれて娘は巣立つ
單身赴任のリユックに男の匂つめ

春子
たもつ

翠洋会

渡部さと美報

じゃんけんばん鬼はとくに帰つてた
見てくれは悪いが旨いおにおこせ

千梢
英一

信頼の部下には敢えて鬼になる
たくらみへ鬼は仏に身をやつす

佳秋
楓楽

人間の知恵に鬼ども眩暈する
不老不死の夢始皇帝ならずとも

東雲
澄子

ほんわかと色づく桜夢を見る
復興の槌音夢をかき立てる

会美
久峰

しばむ夢活入れに行く匂会
地が裂けて夢は瓦礫の下になり

綾子
照子

就職の夢震災が奪い去り
明日という夢があるから生きられる

志華子
さと美

エンゲージはすず決意のむずかしさ
白魚のような手だった亡姉の指

真砂
たま子

年金にそろばんの指持て余す
以心伝心指をまるめた子の無心

みずき
恭昌

指差した方へ行くとは限らない
政治劇裏を操る太い指

蛙
正雄

高校入試瓦礫の孤児へVサイン
包帯の指に甘えがのせてある

ひろ子
凡子

北浜の指が動いて億の金
取引きもピアノを弾くも同じ指

春子
兼治郎

人さし指反省をするのは私
先走る癖が直らぬ親ゆすり

宣司
みつ子

ただ走る許りで生きた戦後
回廊を走る松明春を告げ

光子
英千子

先頭を行くランナーにある孤独
夢を見る動物園の灯が消える

正坊
鬼遊

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

この歳でもらった福です放さない
大空へおよばぬ夢の竹トンボ

聖子
好栄

福の神出て行つたきり沙汰がない
堂々とアメリカりんこの初舞台

ちよえ
恵美子

竹やぶの雀は遊びにいったまま
その先は言わず私の部屋へゆき

はるみ
英子

初恋を思い出させる南風
お多福の笑顔に心あずけよう

鈴江
かつ子

お正月集まりました二十人
春霞あなたはすこし太りすぎ

蔵栄
民子

ささやかな幸福朝のパンの味
万歳三唱虎の威を借りる

清利
博利

老梅を初心にかえず雪が降り
老梅を初心にかえず雪が降り

白汀
清利

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

柔らかな感じだったが肘鉄砲
空気をまで襖で区切る宴会場

玲坊
一浪

柔らかくかみついては骨しやぶる
一応はなるほどと言ひ反論する

松盛
善政

なるほどと頷きながら金貨さぬ
すじ肉もオテンになれば柔らかい

喬水
博丈

なるほどと親父あきれる子の理屈
この命区切りつけたら大事だ

喜与志
佳女

村山さん自社の区切りがわかりません
笑い声なるほど譲り合いがある

信子
野草

なるほどと親父あきれる子の理屈
柔らかい七草がゆで息をつく

野草
佳女

青信号人の動きは束になる
若者の意見なるほど理に叶う

季芳
玲子

なるほどと思う器に落ちついた
なあるほど菟蓐さんにかすがいだ

幸子
節子

豊作貧乏なるほど米の売れ残り
一区切ついたら私貝になる

とみお
勝見

出世欲だけはなるほど持っている
柔らかい肌にならずに老い進む

雄々
宗光

柔らかいわりに気になる言葉尻
被災人形悲しみ結めて加太の海

弘朗
宗光

日向ぼこ猫と明日の話など
半壊の隅に紅梅咲き誇る

美智子
十四郎

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

被災人形悲しみ結めて加太の海
髪染めた妻に見とれる冬もり

向西
勇次郎

日向ぼこ猫と明日の話など
半壊の隅に紅梅咲き誇る

美智子
十四郎

地震後の壁に幾何学布テープ
肩書の大きい方へ味方する

肩書の数ほど寄附ははずまない
足元の春に気が付くスニーカー
安否問う電話へ鳴咽だけ残り

刻を止めた五時四十六分の悲劇
覚悟する程の事なし露の臺

一喜一憂負ける覚悟のバチンコ屋
覚悟して離れた故郷の灯が恋し

覚悟したようにポロリと椿落つ
苦勞する覚悟あんなに惚れている

岸和田川柳会

田中 文時報

次の世は愛の配給頼みます
配給に簞笥を空にして育ち

天国を地獄に変えたガスと水
引き抜いて見たがやり場のない穂先

思い出につながら糸を引いてみる
だんじりは母のおなかで引き始め

傷だらけ引き際悪い僕がいる
干潮を待つて出かけることにする

線引きがうまくゆかない夫婦です
五割引きしてももつけはとてある

灯台のあかりも溶けて霧笛泣く
山歩きりーターの笛こだまして

自問自答ひとりよがりの笛を吹く
口笛がひとりでも出るよい知らせ

激震へ鳴りをひそめた父の笛
平均を誰にするかでもめる寄付

平均を誰にするかでもめる寄付

弘治 夢の助

尚利 鹿太

澄子

正治

昌子

六浦

まさ

紫香

歌子

路子

浪速子

白光子

朝一

倫子

呂万

ダン吉

月子

一弥

狸村

盛之

節子

翠子

甚一

柳宏子

洋

洋

平均の寿命超えたか友が逝く
平均に叱って欲しい長男坊

平均に漕ぐブランコにないきしみ
平均点だけは取りたい追試験

年金で平均点と言ふ暮し
報告が遅れた上に無為無策

報告をしつかり受ける若社長
報告が遅れ対策後手になる

春の風いい報告を待つてます
川柳ねやがわ

家を出る確かに持っていた帽子
一坪の庭があります我が家です

累代の家を守つて過疎の石
礼服の家紋が重い三代目

家あつて温い家庭のない不運
家の方へ向きたがらない靴の先

家あつてじっくりものを考える
二世帯をとりもつ嫁のいい笑顔

家がある子供も親も妻も居る
ホームレスじつと見ているかたつむり

したたかに生きて寡黙なホームレス
ホームレス母へはちゃんと手紙かく

哲学書しつかり読んでホームレス
仕尽した果てだと笑うホームレス

夕日浴び聖書読んでるホームレス
砂の器の脆さを思ふホームレス

ホームレス我が身の老いをだぶらせる
焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

焼跡に親類だろろう立ちつくす

けい子

一齋

信博

二南

萬的

文時

昭二

通彦

金太

冬葉

良知

時弘

吉之助

庸佑

礫

とし子

一風

黎之助

度

勇太朗

シマ子

かすみ

頂留子

波留吉

良三

ルイ子

親類のはしくれですとあがりこみ
親類と思うからこそ腹が立つ

とどのつまり責任をとる身内
親類の方程式に悩む嫁

水蜜桃ときどき唸りながら喰べ
いたい痛いときと唸る甘えが見えている

もういいかい唸る大地へ問うて見る
留処なく瓦礫に唸る自責の念

親方を唸らせているかなん層
震災に気がひけますねお難さま

あの日から日本標準時が止まる
そこそこに貯め老成の仲間入り

難病とたたかう初診料払う
二度の職慣れて人間くさくなる

駅弁が旅の楽しみ倍にする
ど忘れに慣れて辞典と仲がいい

手弁当の善意に神戸立ち上がる
初恋のころは素敵な夢があり

一病を慣らし仲よく老いの日々
職場にも慣れて仕事怖くなり

弁当も子供の口に合わされる
初心など忘れた方が楽になる

ふるさとの水になじんで黄昏る
岬川柳会

岬川柳会

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

八十洞庵報

弘直 高栄

一笑

英王

文秋

藍子

菜月

恵子

亜也子

たもつ

小路

由多香

俊路

余志身

奨

みさを

佳子

崇

宏章

孝子

真一

艶子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

釣り人の希望は竿の先にある
子に託す希望だんだん剥がされる
何事も孫のすること笑い種
初孫で買いに走ったおひなさま
耳遠い隠居に孫のベル長く
糸揺すり孫に渡して怒る風
余震ごと荷造り増えて手に余り
癒えつつも不安と希望混じり合い
ど忘れがボケと見られる年となり
野良犬と目があつたまますれ違ふ
ふんふんと孫の耳打ち聞いてやる

川柳藤井寺

高田美代子報

破れ鍋にあるとじ蓋のブライドで
鍋の蓋ことごと亡母を語りつく
落し蓋ただそれだけの役目なり
蓋開けておでんの匂さす屋台
主張する力が蓋をもち上げる
バンドラの蓋が綻びかけている
金に心を動かす政治家を見張る
動かない石を抱いてる反抗期
三男坊ちよつと小粒で良く動く
大地震大樹は木の葉ゆれただけ
世話やきが動くところくなことがない
へソクリを隠した位置がずれている
反対の一軒だけが動かない
石ひとつ動いて勝敗が決まる
春祭り母の出番で五目寿司
お雛さん今年はお番どつします

晶子 みつ子 良平 とみ悦子 正美 いと 春江 ヤエ 年子 洞庵 絹子 吸江 智久 利武 美代子 射月芳 みのる 治子 三郎 恒雄 志洋 一屯 晋 和子 昭水 敦子

あなたが主役出番待ってる胸のバラ
定年が俺の出番を待たず来る
左手の出番右手は五十肩
こだわりが解けて出番のモカ匂う
さあ今日もシナリオ無しの出番来る
ゴホンゴホン出番が続く保険証
さあ出番剥がしておこうサロンプス
かんじんな時寝過ごしたナマズ達
一揺れて安全神話崩れ落ち
能役者鏡の間に一呼吸
震災が近所の絆強くなる
持て余すゆとり今更気にもせず
他所ごとでないトリュックをぶくらます

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

心眼を開いてほぐすもつれ糸
絹糸のやさしさ強さ大好きで
糸が絡んで安定剤をボケットに
ノルマまだ残し冬の日暮れ急ぐ
一直線に急ぐヒルの炎背に寒い
急がなくてもお水取りから春は来る
急流に棹さして知る水の冷え
水平線の夕日へ懺悔急がねば
もう少し急いでほしい大太鼓
三浪の手垢 六法書に賭ける
調子みて今日のプランを組み替える
老いていく調子がやつと判り出す
手拍子を打てば調子も出るリズム
補聴器に囁く調子よい話

正一 美房 トミ子 政代 愛子 六点 和樹 扶美代 史郎 宗一 キミ子 与呂志 悦子 波留吉 栄 薫 英一 稲子 武庫坊 ひでお 佳秋 しげお 静江 庸佑 艶子 よ志子 道胤

調子よい口で転んでばかりいる
ほどほどに調子合わせて同居する
調子づく男がすこし軽くなる
女房に頭あがらず生きている
雑草の強さを知った焦土から
前向きに生きてつまずくことばかり
妻だけが味方と思い生きている
生き返る日待ち侘びる仮住居
少し汚れて生きたお僕の影法師
冗談が分からぬ妻でやりにくい
被災地に申し訳ない湯が溢れ
もつと助かる三日遅れのスイス犬
川柳せんりゆう浮き世ドラマが字に躍る
ロボットに男一匹使われる
陽の当る舗道の友は饒舌で
風花のひとひらごににる仏

川柳塔鹿野みか月

土橋 螢報

虞美人草キラキラ美人髪につけ
茶番劇腹を立ててる暇がない
袖の下から生まれる疑惑断ち切れず
ありがたい日本に生まれ伸びてゆく
温泉で産湯かつた美女ばかり
不器用な夫婦で五人子が産まれ
生まれた仔猫器量よしから貰われる
湧くように生まれる知恵を生かして
生まれたらもう鯉のぼり売りにくる
眉毛から茶の湯の秘伝はめかす
無器用だが太い眉毛は温かい

節子 マツエ スミ子 彰一 澄子 伸子 芳子 二南 森子 克治 かおり 東雲 ふみ あきら 瀧小 恵美子 多哥由 明美 隆風 久枝 昭恵 節子 信子 茂 よしえ 菊野 みさ子

にぎやかに谷のせせらぎ春を呼ぶ
 いい話だから聞こうと呼びかける
 上役をオイコラと呼ぶ夢の中
 木々の芽が風が光が春を呼ぶ
 呼びつけただけで無口の父だった
 また一つ春雷聴いて花になる
 蓄から一人前の真似をする
 乗り越えて輝きだしてきた蓄
 蓄いま明日のさびしさなど知らず
 いつ咲こう主張を秘めてまだ蓄
 予想外だった蓄の頭数
 終章はつばみの顔に戻りたい
 偏差値の順に並んで咲く蓄
 春うららつばみそのまま一途です
 むんむんと匂う蓄の男の子
 疑えば蓄も硬く開かない
 師の声は朗々として論語を語る
 師と仰ぐ彼の後ろについている
 薬つかむ思いで医師の目にすがり
 すり切れた筆で師匠の絵が生きる
 生きてゆくささえになった師の言葉
 師たるものいかなる事も許さない
 この先は雨が降るまで待ち給え
 先を読む苦勞の絶えぬ母である
 母のしぐさひとつひとつを師と思う
 生け花のお師匠さんの運転手

堺川柳会

河内 月子報

灰皿に種子をコトリと桜んぼ

春蘭

正倉院の皿を並んで見えています
 高い評価されて仮面をはずせない
 吊橋を渡る時だけ頼られる
 ちぎり絵の梅が笑顔に見えてくる
 薬師寺の塔天に抜け鳶舞う
 スカイヒルわたり雲雀になりました
 大皿へ山盛りにした家族の和
 皿小鉢一つ買うにも二人連れ
 死ぬ程の想いはとても絵に描けぬ
 背の高い妻にもたれてしまふ癖
 飢えている絵皿の赤に身を沈め
 十年も前から同じカレー皿
 変哲のないお皿だが手に馴染み
 春めいてまた欠け皿が夢をみる
 染付の藍は薄色女と皿
 高尚な話とうとう聞いてます
 絵の中に消える神戸を残してる
 ゴーギャンの女を見れば瘦せられぬ
 橋脚の手抜きあばいた震度七
 似顔絵の皺はこっそり消したけど
 千円の花に安らぐひとり部屋
 魯山人の皿だと聞いてからの味
 裸婦の絵が私に流し目をくれた
 千両箱の中は富山の置き薬
 千羽目の鶴に望みをかけて折る
 イヤイヤをして皿回しの皿とまらない
 ソブラノで妻は不満をまきちらす
 とっておきの味を高いとは言えず
 目玉焼皿を並べる母が好き

美代子 昭子 照子 泰子 梓 みつこ 紀美女 頂留子 美子 途子 勇太 彰 小雪 かりん 半銭 楓 春香 文 狸村 摩耶 みずき ダン吉 金太 完司 道胤 栗 花梢 森子 維久子

とつとり川柳会 武田 帆雀報
 瓦礫の下に積もる哀しみ数知れず
 爪に灯をとばし積もって土地を買う
 恋語り積もる心は美しい
 コップ酒積もる鬱憤はらしてる
 飲み代が積もり月給日が恐い
 春こたつ積もる話を食べている
 ワンカップ積んで亡夫の一周忌
 失敗の度に後悔ばかり積む
 雪女積もる話を持って来る
 泣き声で赤ん坊にもある主張
 地の霊の主張なのかと跪く
 また主張通らぬままに会が済む
 八分主張が通り妥協する
 原爆碑平和の主張世を照らす
 孫抱いて主張くずれる音がする
 髪を切ることで女は主張した
 雑草の主張は空地攻めて来る
 正論の主張が陰で泣いている
 魚盗猫は足音消すように
 夕焼け子等の足音散ってゆく
 大腿の足音父だとすぐわかる
 足音のしない二階にいつ慣れる
 足音をたててノルマを科せに来る
 人ひとり救う見事な足音だ
 直下型の足音神戸から走る
 ついて来る我が足音にふり返る
 足音を殺し目隠し誰でしょう

和歌子 よしお 多哥由 喬水 銀嶺 きみ子 揚芝 睦子 光一 光子 しげる 一枝 粗粒 黙光 静生 山人 舍人 圭一郎 輪多朗 行男 孝男 悦子 帆雀 明美 螢 崇 侑里

5 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	4 日(木)午後 1 時から 虫・粗食・乗る・裏・女	〒593 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑宅 投句先は同上
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 1 時から 蹴る・扉・雑詠(A・B)	尼崎市中小企業センター 阪神尼崎駅北東 5 分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
川 柳 塔 ま つ え	6 日(土)午後 1 時半から 無 ・ 奥 ・ 踏 切	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町 1686 恒松町紅
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後 1 時から 族・のびのび・スマート	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ 150 米 〒560 豊中市釜池中町 3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	10 日(水)午後 6 時から 急ぐ・比べる・告白・気まま	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北 1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	14 日(日)午後 1 時から 青い・舌・伸びる	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	14 日(日)午後 1 時半から リズム・逢う・たくさん・自由吟	なるお文化ホール 阪神鳴尾駅から徒歩 10 分 〒663 西宮市段上町 6-6-2-202 奥田みつ子
もくせい 川 柳 会	15 日(月)午後 1 時から 男・流れる・買う・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩 5 分 〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番 5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18 日(木) 正 午 か ら 傾く・機嫌・応える・自由吟	高槻現代劇場 306 号室 阪急高槻駅徒歩 5 分 〒569 高槻市宮田町 3-8-8 川島颯云児
南 大 阪 川 柳 会	19 日(金)午後 6 時から 哀話・顔色・賛成・他家	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分 〒544 大阪市生野区生野西 1-5-2 金井文秋
京 都 塔 の 会	20 日(土)午前 11 時集合 竿・撫でる・親切・当日雑感	春の吟行句会 本文 P107 参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
岸 和 田 川 柳 会	20 日(土)午後 1 時半から 非 常 ・ 袋 ・ 紅 ・ 奉 仕	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩 5 分 〒596 岸和田市上松町 610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	21 日(日) 正 午 か ら 留守・体操・狂う・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉
富 柳 会	25 日(木)午後 1 時から 奇 跡 ・ 利 用 ・ 自 由 吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584 富田林市南大伴町 4-1 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	27 日(土)午後 6 時から 進む・公園・すんなり・昼	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉 3 丁目 3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28 日(日)午後 1 時から 照れる・ロビー・好奇心・責任	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲 8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、田中正坊(06-336-3395)へご連絡ください。

本社 四月句会

四月七日(金)午後五時半

メンズフアツションセンター

ライトアップされた大阪城西の丸庭園では満開の夜桜を楽しむ人でにぎやかな七日夕、八十二名の参加により四月句会が開かれた。

お話は板尾岳人氏。昨年十一月にはじまり氏の身边で四つの事件が起る。紙面の都合上全部記すことはできないが、イタリア旅行中連れの老人が少女の三人組りに執拗に狙われたこと、氏のケーキ店で女子高生に万引き、目撃者に捕まったが女生徒の態度があまりにも悪く、意に反して警察沙汰になってしまったことなどである。話は最近日本中を震撼させたサリン事件に及び、日本の安全神話は崩れつつあると結ばれた。また、薫風主幹は震災の作品について被災者とそうでない人との切実感に差はあるものの、井上剣花坊が関東大震災の句を残したように川柳人として震災の句を残すべきだと被講の前に話された。月間賞は久保田元紀氏(堺市)に輝く。

(司会―岳人) (記名―射月芳・月子)

(受付―しげお・たず子・房子)
席題「世話」 上田佳秋選

桜さくら今年も世話になる四月

森子

世話役の耳は苦情の保管庫だ

金太

世話好きで老人会の旗を振る

隆

一生に三組の世話がまだ出来ぬ

三男

世話をしてやった話で聞きあきる

美房

付き添いさんお喋りしながら下の世話

典子

世話やけた下の子面倒みられる世話

正雄

世話をする話がもつれ世話をかけ

武庫坊

世話やきが仕事を終えた日の孤独

由澄子

世話をやくだけの一生だった亡母

由澄子

世話をかけずにサヨナラ出来たらなと思ふ

美代子

臨月になつても世話好き口を出し

天笑

世話焼きが豆の炊き方教えるに來

萬的

世話ばかりやいて冬彦さんにする

たず子

世話になる前に遺言状を書く

智子

世話かける日は確実にやってくる

典子

世話好きはきつとさびしがりなんだ

寿美子

世話やいたなどと世話焼き思つてず

柳宏子

世話好きなくせに女に縁がない

風云児

世話になる方がいばっている同居

狸村

世話やきが一人いるから座がしられ

武庫坊

世話好きの妻が時どき勇み足

ダン吉

僕の世話してると言うていろいろしい

ダン吉

世話好きも過ぎると困るさじ加減

義人

世話好きと九官鳥も知っている

岳人

ちよとした世話はいとわぬポールベン

楓楽

雀百までまだ世話好きがなおらない
塵積もる家を世話好き今日も出る
世話好きな男が翔んでいます春

稚代文

輪廻とやどなたの世話になるのやら

金太

世話やきが大きな声を出している

智子

世話好きで頭が丸い辻地蔵

落児

佳

臨終へ世話のし甲斐をかみしめる

笛生

小休止ばかり世話役 花粉症

英子

世話好きは亡母ゆすりかも花筵

千歩

秀

わたし一人を世話してくれる銀の匙

森子

軸

全壞の我が家語らずひとの世話

佳秋

兼題「妬く」

三宅保州選

旺盛な食欲妻が妬いている

鹿太

愛に飢え愛を妬んでいじめっ子

射月芳

妬きもちもすこし入ったのし袋

天笑

双方で妬いてるしまらない話

鹿太

うっかりと妬かされました四月馬鹿

美代子

人前で仲良くしない方がいい

鬼遊

嫉妬心隠す化粧を厚くする

しげお

二三日過ぎて化粧の濃さを言つ

典子

やきもちはやさうよ花も咲いている

重人

妬くことも忘れ桜の下に付つ

武庫坊

長電話酒のみなが妬いている

鬼遊

これしきを妬いた度量を自省する

庸佑

母の日に父の妬みが少しある

勝美

妬くほどでないライバルと軽く踏む

春を妬く北風たまに吹き返す

ジェラシーの噂運んだ春の風

妬いたこと妬かれたこともなく風に

思い違いで妬いたら溶けた春の雪

黄色のバラ贈って少し妬心見せ

幸せへ神の嫉妬がこわくなる

花の首落とす鉢にある妬心

妬いとけばよかった傷の浅いうち

ジェラシーの果て三日月も赤くなる

エンゼルが妬いてその夜はすれ違い

ライバルを妬いてた頃のネジ回し

無職無収入妬かれるものは何も無し

慕情から嫉妬に変わる不眠症

妬いているわけではないが不眠症

妬くことを忘れてドライフラワーに

狂おしい妬心蛇の相 夜叉の相

金魚の朱妬む目もある羅漢の目

マシユマロの一つはきつと妬くだろう

住

絵にならぬポーズで男妬いている

妬心ふつふつ隣の花は赤すぎる

蘭と薔薇嫉妬した方から枯れる

ドリンクより妻の妬くのが効くんだが

嫉妬めらめら髪の手まで女です

人

嫉妬かも切手が逆に貼ってある

地

妬くほどのことかと石を蹴つとばし

庸佑

シマ子

ルイ子

ダン吉

美代子

房子

楓楽

たず子

英子

みつ子

天笑

しげお

かすみ

英子

萬的

森子

隆

勇太

元紀

美津留

美房

楓楽

昭子

寿美

風云児

寿美子

天

三人の中の一人が妬いている

軸

仁王様の男らしさに妬けている

兼題「惜しい」

福本英子選

お年寄りに言葉惜しんではならぬ

よくできた婿殿 下戸が玉にきず

秘書嫁ぐ惜しい惜しいと耳ざわり

惜しいなと合格点は教えない

惜しまれるうちに散りたいなと思う

発車ベル窓にあしたと指で書く

女には惜しい修羅場の腕の冴え

ためらって逃がした惜しい恋だった

前向きに歩む惜します過去捨てて

商談の惜しい処で酒が切れ

沈む陽を惜しんで農を急ぐ母

春惜しむ窓辺新芽は天を指す

口惜しい涙相手の校歌聞く

惜しいものの割れてがらくただけ残り

筋通す父は惜します椅子を捨て

捨てるには惜しいがらくた持て余し

キャンパスに遺影を惜しむ卒業証

勿体ない勿体ないと溜めている

見落とされ原石のまま埋もれる

死んでから惜しい人だと言われても

ダルマさん次点じゃ片目のままでっせ

端切れ箱明治を惜しむ母と住む

口惜しい文字が吸収紙に残る

悟郎

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

保州

惜しいこと土手のよもぎが伸びている

惜しまれて去るうちが花生き字引

束の間の出会いを惜しむ発車ベル

捨ててゆく簾の傷もなつかしい

哀惜の涙は濁れずまとう黒

愛惜の人と重なる花吹雪

一気寄り勝ちを焦った勇み足

葉桜に惜しい人影だけ残る

遺すのが惜しゅうて持って逝きはった

惜しい人唄んで長い列に立つ

骨惜しみなどは知らない父の汗

口惜しいが負けるが勝ちと折れておく

惜敗のダルマを誰もふり向かぬ

惜しまれた人だが日々に疎くなる

惜しかった話はしない方がいい

惜別へ無情な駅の大時計

惜しい鯛逃がす取材がしゃべるから

惜しまれるうちに訣れを落ち椿

兼題「立場」 奥田みつ子選

立場変えると味方の隙がよく見える

立場変え見えないとこが見えてくる

立場上何も喋らんことにする

花の下立場忘れる酔い心地

かすみ

憲太郎

稚代

たず子

ルイ子

ルイ子

柳弘

元紀

天笑

庸佑

昭子

三男

重人

文秋

美房

しげお

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

英子

立场上雀と遊べない案山子
夫婦茶碗の一つが立場主張する
立場逆転エブロン着けてます
立場上財布に余裕もたせとく
ひと言を嫁の立場でかみ殺す
夜桜へ立場はなれてワンカップ
立場上 衣まどっている鑑
家族皆母の立場に助け舟
ばつと散る桜に立場などはない
森は森の立場で庇うものがある
五十年経っても消えぬ負の立場
立場逆転子に叱られて米寿なり
六地藏の立場子供を守る役
立場知り枯葉一枚散りました
我慢する立場と月も知っている
お客様がみな神様という立場
怪しまれてもいたし方ない立場に居
嫁姑一度は立場換えてみる
嫁姑立場の目線くい違ふ
回り椅子鬼と仏を使い分け
ぼたり散る立場を知っている椿
老母を看る逃げ道のない娘の立場
妻と母 立場が揺れるイヤリング
やわからかに叱る立場でおばあちゃん
年金になって立場が弱くなり
立場変ればわたしも同じ事を言う
立場入れ替ればわたしも夜叉になる
母という立場で愛を強いすぎる

保秋 佳秋 美津留 隆 諷云児 千歩 洋 悟郎 元紀 森子 三男 希久子 シマ子 典子 月子 紫香 笛生 勝美 悟郎 吐来 鹿太 義子 典子 茜 金太 寿美 たす子 楓楽

佳
当選をすれば握手をしてくれぬ
メダカにはメダカの立場あり群れる
鴉にも鴉の立場カーと鳴く
君の立場僕の立場でまともらず
灯をひとつ守りつづけている立場
人
逆の立場で考えてみる向う岸
地
どんな立場でも白いものは白い
天
立場少しずらしてからのいい景色
軸
私はわたし 立場の違い考える
兼題「ふんぎり」 河内天笑選
つますいた石にふんぎりつけられる
ふんぎりの時機が読めない危機管理
ふんぎりがつかずと曳かれゆくわたし
ふんぎりがついてブランコから降りる
好き嫌い好きふんぎられ花びらよ
ふるさとの駅へふんぎりつけに降り
ふんぎりをつけ階段を二段跳び
ふんぎりがついて世間が広くなる
バンジージャンプ背中を風が押してくれ
ふんぎりをつけようローカル線も春
ふんぎりをつけよと青い山が言う
献体をするふんぎりがまだつかぬ
無一文になって踏ん切りつきました
鬼遊 楓楽 美代子 天笑 英壬子 智子 重人 森子 みつ子 昭子 狸村 森子 たす子 茜 笛生 欣史子 悟郎 美代子 元紀 義子 楓楽 保州

ふんぎりの悪い上司に泣かされる
独身を抜けるふんぎりまだつかず
淡々とふんぎりつける判を押す
逆立ちをしてふんぎりをつけました
ふんぎりをつけたら視野がぱっと開け
ひとふんぎりつけた白髪になっていた
ふんぎりがついてその夜は酒旨し
サイコロを振ってふんぎりつけました
ふんぎりがついたら腹がへてくる
ふんぎりに妻の勝気が物を言う
ふんぎりの時だ桜も散りだした
ふんぎりによすぎる三度目の挙式
赤い服着てふんぎりをつけに行く
諦めがついた所で踏み切ろう
佳
鱗がポロリこれでふんぎりつきました
転職のきっかけくれたのは左遷
はつきりと別れを決めたのは女
手切金もろても愛が棲みついて
高いびき妻はふんぎりつけている
人
ふんぎりがついたか歌をうたってる
地
ふんぎりがついた夕陽を見に行こう
天
ふんぎりがつかないのですやさしくて
軸
ふんぎりがついて涼しい顔になる
狸村 美房 庸佑 美津留 三男 柳弘 たもつ しげお 二南 智子 英子 シマ子 射月芳 美代子 保州 森子 典子 ダン吉 月子 岳人 照 天笑

兼題「亀裂」

橘高薫風選

亀裂気にしないすぐにお天気変わるから
亀裂にもすみれたんば春の詩
ふと湧いた疑心が広がっていく亀裂
仲人も匙を投げたと言う亀裂
蒼敵の亀裂はすぐに癒着する
人間不信の亀裂を埋める一行詩
修理のきかぬ亀裂となってきた別居
共白髪亀裂の危機もあったけど
夫婦の面子保つ亀裂を埋めながら
熟年の亀裂を孫が埋めにくる
親の敷くレールに亀裂出来てくる
亀裂やおへんすれ違いやという夫婦
テストハンマー亀裂の音を逃さない
急ブレーキ亀裂を避けた音になる
一直線に亀裂走っていく諏訪湖
頂上征覇の夢クレバスに置いたまま
亀裂が走った富士山の見える村
へっぴり腰で深い亀裂を覗きこむ
避難所も長いと亀裂生じ出す
地の亀裂人の絆を呼び戻し
ご近所との亀裂を埋めた震度七
徳利のひびから漏れるエピソード
うそ重ね亀裂を深くするばかり
嫁姑亀裂があつて然るべし
母と娘の亀裂を埋めるレアチーズ
歳上の妻で亀裂をつまく埋め
友情に亀裂走った大異動

満津子 かすみ 射月芳 志洋 シマ子 諷云児 文秋 柳弘 たず子 三男 文秋 頂留子 勝美 白溪子 度 武庫坊 天笑 弘直 落児 射月芳 千秀 金太 房子 楓楽 岳人 美房

リストラに亀裂のままの椅子がある
親友との亀裂をほぐす妻同士
敗者の亀裂慰めて埋まらない
歳月や磨崖仏にも目立つひび
その亀裂埋めるに男酒がいり
萬の洋 天笑 憲太郎

月子▼句会部○板尾岳人・宮崎シマ子
同人数部○小池しげお・宮園射月芳▼渉外
部○吉岡美房▼会計部○春城武庫坊・
榎本吐来▼発送部○宮口笛生・山下美津
留・岩佐ダン吉
▽災害見舞金の収支報告(会計部)

亀裂そのままで今年の桜咲く
熱燭一本じわり亀裂にしみてくる
名人の壺の亀裂が生きている
蟬の子だつて亀裂の底で生きている
城壁の亀裂敗者の叫びかな
哲子 青風 英壬子 勇太 希久子

とき 5月20日(土)午前11時
集合 京阪電鉄「八幡市駅」
ところ 岩清水八幡宮・清峯殿
会費 3500円(昼食とも)
兼題 竿・撫でる・親切・当日雑感
申込 5月10日までに都倉求芽へ

亀裂から漏れてる水が澄んでいる
被災地の亀裂で神は眠ってる
被災地の亀裂が破れる雲を見た
元紀 武庫坊 智子 天 軸

わが過去に三日月型の亀裂あり
(清記・希久子) 薫風

川柳塔社常任理事会(4月1日)
▽企画事業部の新設に伴う各部スタッフが3
月7日の部長会議で決定された原案のとお
り承認された(○印は部長)。
総務部○川島諷云児・西口いわゑ▼編集
部○田中正坊・奥田みつ子・高須賀金太
西出楓楽▼企画事業部○河内天笑・河内

時実新子文学碑記念大賞
作品 雑詠2句 選者 時実新子
締切 5月20日 発表 6月25日
用紙 官製ハガキに作品を書き、住所
氏名・年齢・職業・電話を明記
参加費 1000円(郵便振替)
送書先 千039-52 青森県下北郡川内町
石倉岳人方 川柳大賞事務局

京都塔の会 吟行
とき 5月20日(土)午前11時
集合 京阪電鉄「八幡市駅」
ところ 岩清水八幡宮・清峯殿
会費 3500円(昼食とも)
兼題 竿・撫でる・親切・当日雑感
申込 5月10日までに都倉求芽へ

時実新子文学碑記念大賞
作品 雑詠2句 選者 時実新子
締切 5月20日 発表 6月25日
用紙 官製ハガキに作品を書き、住所
氏名・年齢・職業・電話を明記
参加費 1000円(郵便振替)
送書先 千039-52 青森県下北郡川内町
石倉岳人方 川柳大賞事務局

編集後記

★4月29日は、「みどりの日」であった。昭和天皇の誕生日、私のような大正人間にとっては、「天長節」と呼んだ時代が長かった。

戦後五十年、さまざまな出来事があり、忘れられぬ思い出も少なくないが、私にとって最も印象的であったのは、昭和天皇との出会いである。

★「現人神」（あらひとがみ）として正に「雲の上」の人であった天皇の声を初めて聞いたのは、敗戦の日の「玉音」放送で、やや上ずった独特の音声は今もなお、私の耳にこびりついていいる。それから間もなく、マッカーサー元帥と並んだ「人間天皇」の写真が新聞に掲載された。

★こうして地上に舞い下り

た天皇は、各地の「巡幸」を始めた。関東・中部・近畿・東北・中国と全国に及

んでいるが、私は「随行」記者団の一員として、近畿における一週間、天皇一行と行動を共にしている。仕事柄、至近距離で一挙一動を観察したが、私のすぐ前にはいる浅黒い顔色の猫背の人物と、白馬にまたがって三軍を閲兵した「大元帥陛下」とは、どうしても結びつかなかった。

★思えば「天皇」の名による召集令状によって、私は星一つの兵士となり、兄弟や多くの学友たちが死の戦場に追いやられたわけで、何とも表現できぬ複雑な心情にとらわれる日々であった。その印象は、神聖とか高貴とは全く無縁のものでまさに「裸の王様」であった。私の戦後民主主義の原点であったと思う。（正）

ひとこと

南北の交流を

川柳塔には番傘と違って支部と称する川柳会（句会）はないが、構成員の多くが同人・誌友で占められ、同人が中心となつて運営されている会がある。たとえば各地柳壇に掲載されているところがそれにあたる。

ところで、本社のある大阪市を中心にしてその分布を見ると、ほぼ北と南に二分される。北は兵庫

を含む摂津・北河内、南は和泉と中・南河内ということになる。この北同士あるいは南同士の句会や

会員の交流は活発だが、北と南とは少ないのが実情である。他の柳社との交流も大切だが、

川柳塔系の句会が南北のワクをばなれ、相互に往来することが必要ではないだろうか。それによって得るところは大きいと思う。

島江 一夫

☆玄関のベルに急いでドアを開けると「〇〇小学校のボランテニアです。お水をどうぞ」と二、四年生ぐらいの男の子がボトルを手

に立っていた。有難くもあり、申し訳ないような気持ちで可愛い手から受取った。☆句会や、投句締切が迫るのに、句は出来ない。そんな時に限って、次々と雑用が重なる。もう川柳から逃げ出したいノと思うことが何度もあったが、今回のように川柳の絆の有難さを痛感すると、そんな弱音は吐

きたくない、改めて身が引き締まるのを覚えた。ただし弱虫の私のことだから、またすぐに音上げるのは、分かってはいるが……☆中国語を勉強している友人が「患難知交」という言葉を覚えてくれた。もう二度と遭いたくない災難ではあるが、多くの貴重な人との交わりや、やさしさなどを知ることができた得難い体験でもあった。（み）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

発表（7月号）

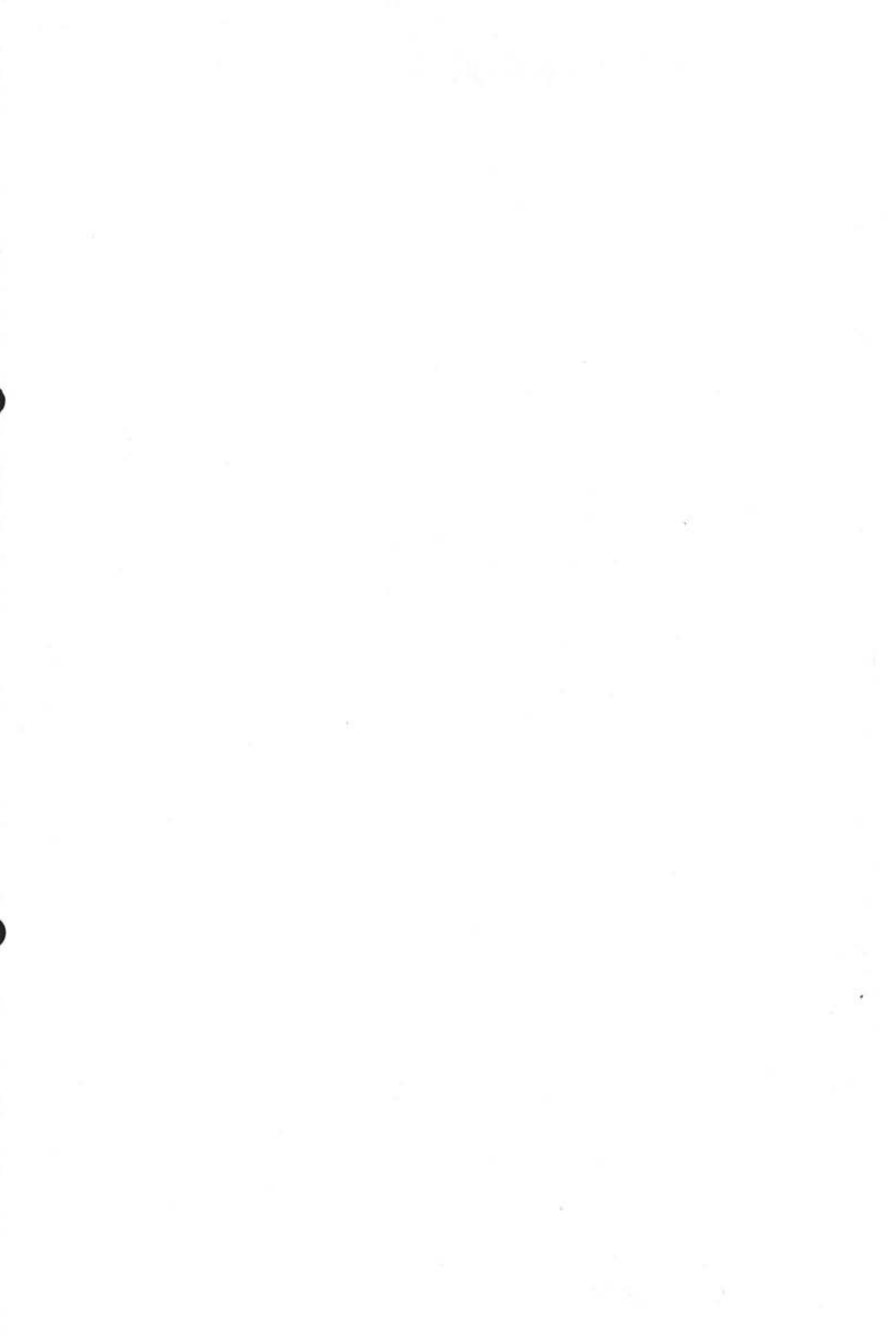
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句) 橘高薫風 選
水煙抄 (8句) 高杉鬼遊 選
渺湖抄 (3句) 小出智子 選
茴香の花 (3句) 西出楓楽 選
吟題「旅」 垂井千寿子 選
「塔」 佐治千加子 選
「從」 黒川紫香 選
初歩教室「傘」 (3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友 (誌代半年分前納者) 茴香の花欄は女性に限ります。

8月号 吟題「雷」「外国」「過ぎる」
初歩教室「痛い」

本社5月句会

とき 5月8日 (月) 午後5時半
ところ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車 (3番出口) 交差点南西角
おはなし
兼題 「減る」「きつい」「道具」「だんご」「痛み」
席題 1題 当日発表 各題2句以内
会費 500円
◎4月句会から投句は廃止されました。

本社6月句会 6日 (火) 予定

兼題 「集まる」「悔しい」「原色」「ひととき」「地獄」

夜市川柳募集

第12回「湧く」 西尾 某選
ハガキに3句 5月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「秘密」 河内 天笑 選
ハガキに3句 5月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 5月27日 (土) 午前11時5分から
ラジオ第1放送 (予定)

西日本文字放送作品募集

課題「山」 橘高薫風 選
ハガキに3句 5月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元 (送料76円)
半年分 四千元 (送料共)
一年分 七千九百元 (同)
平成七年五月一日発行
編集兼 橘高薫
発行人 藤原童心社
印刷所 大坂市阿倍野区三木町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 691-1456
振替 〇〇九八〇一五〇三三三八番

第19回 全日本川柳長野大会

とき 6月11日(日) 午前9時半開場

ところ 長野県松本文化会館(松本市水波)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「群」 西山金悦選

「刻む」 矢島破酔選

「順番」 吉岡茂緒選

各題2句・無記名、封筒に住所・氏名を明記し、出句料1000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記へ

出句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11

ステッピン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第二部(当日出句・午前11時半締切)

「政治」 田中正坊選

「掌(てのひら)」 木野由紀子選

「歩く」 須田尚美選

「充電」 今川乱魚選

会費 3500円(昼食・記念品代共)

観光 6月10日(土) 3500円

前夜祭 同 午後6時 5000円

宿泊 浅間温泉ウエストンホテル

申込先 〒384 小諸市小諸郵便局私書箱26号

全日本川柳長野大会事務局



Pierre Parthen



Daniel Monshell

泣いて笑って……

夜を通り過ぎたら

また陽がのぼっていた

男のロマン



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018